# 基督教年鑑

1948

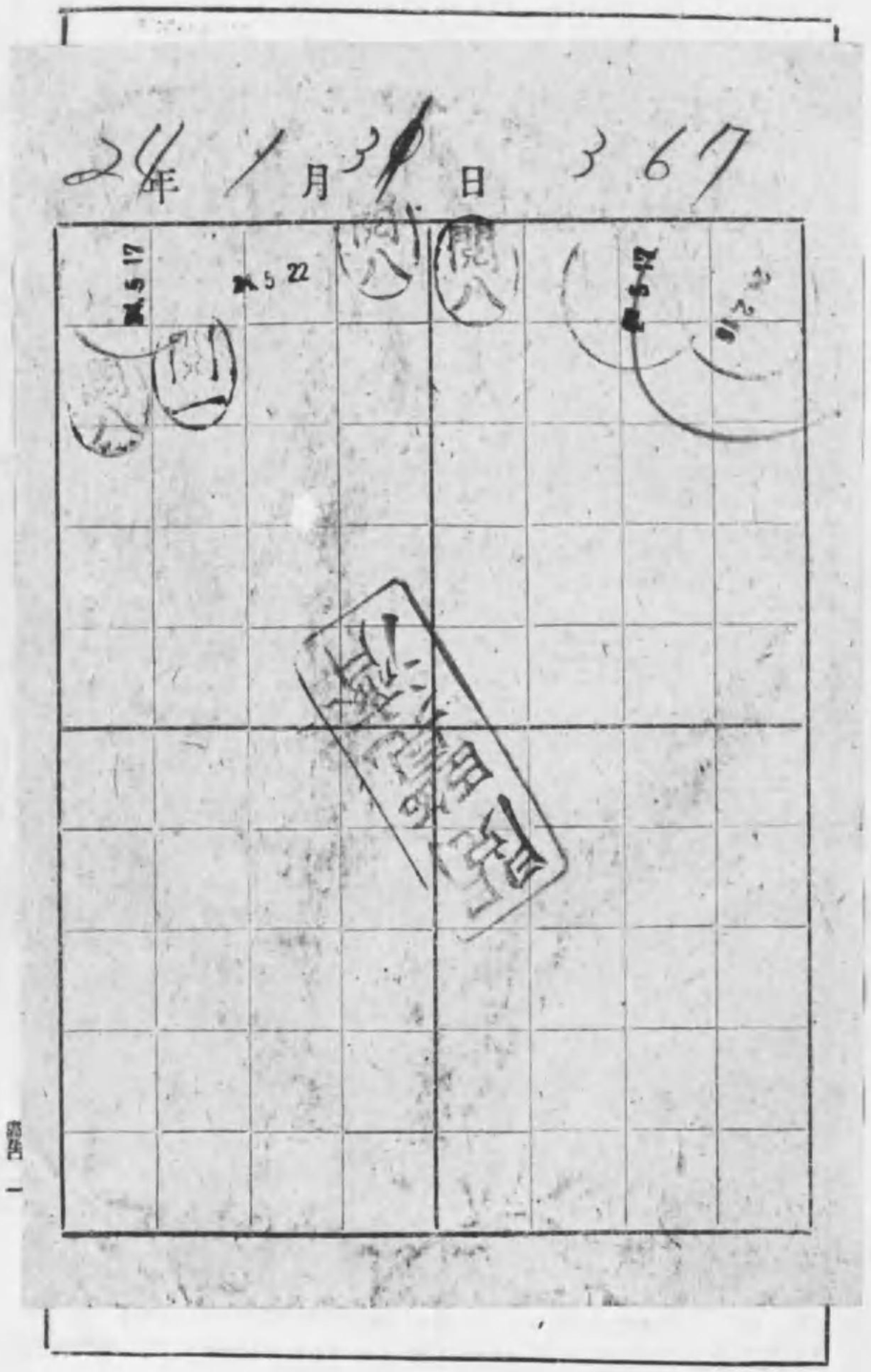
キリスト新聞社

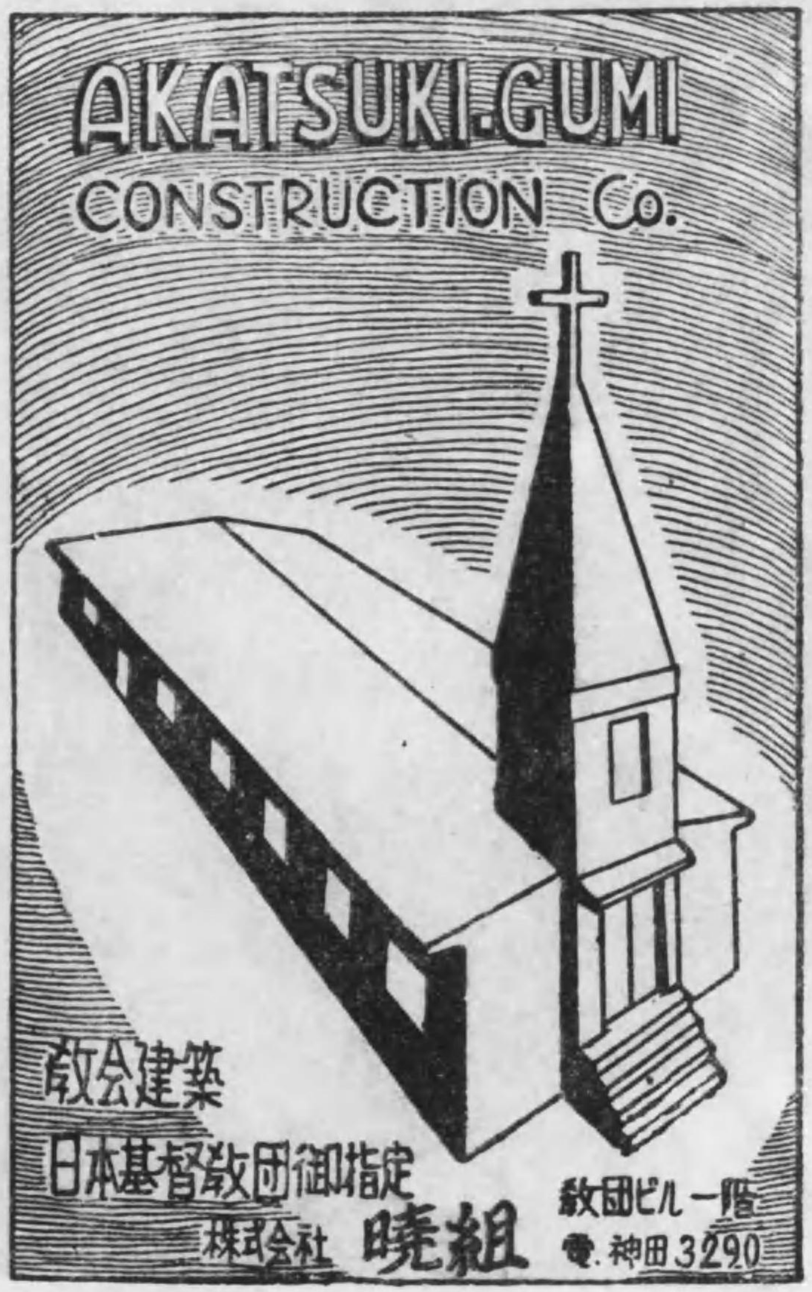
R190.59
Ki254
K

×複写

別室閲覧

始


24年 1月31日 367
5 17
5 22
5 17
5 17
聖書之研究



AKATSUKI.GUMI
CONSTRUCTION Co.
教会建築
日本基督教団御指定
株式会社 暁組
教団ビル一階
電.神田3290

R
190.59
K1254
K

# 基督教年鑑

1948

キリスト新聞社


## きよめの友

本紙は明治廿二年中田重治師が創刊し、同名雷ねる事一千八百餘號に亘り、基督教館福音の宣傳機關に用いられて居り、信仰心を振起せしむるために國いて益々なす好適なる宗教紙。

◇毎月十日、廿五日發行
◇定價 一部十圓送料共
◇前納 一年二百四十圓

傳道版 毎月一回 發行

監輯 篠一著 B6版廿二頁・定價廿圓〒五圓

神の召命とイエスの信仰

人は皆神と契約關係にある事を悟げ、神の律法と福音とを示して、永生を受け神の民となり、現世と來世の祝福を高調した、信者未信者を問はず必讀の書

聖書教會 きよめ教会出版部
東京都新宿區柏木ミノ三九一
振替東京一九六二〇二番

☆聖ミカエル新書☆

八代斌助著
偉人の面影 ¥10.00
麗しき泰西美談 ¥35.00
聖歌の話 ¥35.00
主イエス ¥90.00

柳瀬貞次郎著
基督教読本 ¥80.00

渡邊義光著
神の國と地上の國 響價 ¥70.00

村尾昇一著
基督教を語る 價未定

八代斌助著
教会合同への展望 ¥50.00
＝エキユメニカル ムーヴメント＝

八代斌助・鈴木榮雄共著
繪本 幼兒イエス ¥35.00

八代斌助著
聖餐式の友 ¥10.00

八代斌助著
☆聖ミカエル通信文庫☆
神について語る
イエス・キリストについて語る
教会について語る
祈禱と聖奠について語る
苦痛と罪について語る
來世について語る
（各冊20圓・B6約64頁 多部數申込には割引）

聖ミカエル國際学校出版部
神戸市生田區中山手通3丁目5

ルサレムへの道 價六〇圓（ブレイク詩文選）
天路歴程 第一部 價六五圓 第二部 價七五圓
ソーローの言葉 價五〇圓
交リの宗教（ヨハネ書の講解）價七〇圓
（送料各十圓）

エマソンの言葉（近刊）
信仰日誌（近刊）
聖アウグスティヌスの言葉（近刊）
聖書（近刊）

西村書店
京都市中京區六條通三條上ル

# 警醒社書店

東京都中央区木挽町一の七

内村鑑三　地人論　價一二〇圓
内村鑑三　宗教座談　價八〇圓
内村鑑三　基督信徒のなぐさめ　價特八〇圓 並二五圓
内村鑑三　求安錄　價八〇圓
内村鑑三　宗教と文學　價八〇圓
内村鑑三　平民詩人ホヰットマン　價二五圓
賀川豐彦　キリストの愛読書　價一〇〇圓
賀川豐彦　愛の科学　價一一〇圓
賀川豐彦　人間として見たる使徒パウロ　價一二〇圓
賀川豐彦　イエスの宗教とその眞理　價七〇圓
蘆谷蘆村　こども聖書　價七〇圓
畔上賢造　愛の詩人ブラウニング　價一二〇圓
渡邊善太　舊約書の文学（預言者文學I）　價三八圓
山本和　現代文明の悲劇　九月刊

満江巖著作

民衆の友　田中正造

B6二七〇頁　定價八十圓

鑛毒事件の勇者、キリスト愛の具現者の確實なる資料による傳記

発行所　宇都宮市池上町三二九一　月刊とちぎ社

振替口座宇都宮一四五

西洋文化小史　ナイルの流

（改訂版）B6四五〇頁　定價二〇〇圓

アート寫眞十數葉外さしえ豐富

西洋文化の潮流を分り易く書いた西洋文化史に關する國民の書、學生も一般人も必讀の良書。特にキリスト教の西洋史に於ける役割を明かにす。

発行所　東京都千代田區神田小川町一ノ七　清水書房

振替口座東京五五八七七

満江巖執筆

月刊雜誌　聖望　定價一部八圓

キリスト教に關する研究雜誌。誌友を中心とするキリスト運動。

発行所　栃木縣佐野市金屋仲町　聖望社




國立圖書館
昭和 23.10.22
入庫

ペ ビ ニ著 柏熊譯 キリストの生涯 B6四〇〇頁 價百廿圓送別

コロディイ著 柏熊譯 ピノッキオの冒險 B6二四〇頁 價百廿圓送別

エルネスト・エロ著 宮本さえ子譯 聖人たちの横顔 B6四七八頁 價百廿圓送別

宮本さえ子著 光りの子 B6四二八頁 價百廿圓送別

ヂエズアルダ著 柏熊蓮生譯 薔薇の聖女 B6三三〇頁 價百圓送別

ヂエズアルダ著 マルチエーリ譯 受難の花 B6四四四頁 價百卅圓送別

ワイズマン著 森 雅子譯 ファビオラ B6四一四頁 價百卅圓送別

イミタチオ邦譯 浦川和三郎譯 キリストの御後に B6三七二頁 價百廿圓送別

バウロ・フイステル著 基礎神学講話 A5三三〇頁 價百五圓送別

荻原 昇著 カトリック精神詳解 B6二七〇頁 價百十圓送別

荻原 昇著 カトリック信仰の基礎 B6一二六頁 價五〇圓送別

チェパリ著 森 雅子譯 聖アロイジオ傳 B6二六八頁 價八〇圓送別

聖Fサレジオ著 戸塚文卿譯 信心生活入門 A6三五六頁 價百圓送別

中央出版社 東京都新宿區五ノ一 振替東京62233番 電話淀橋(37)1905番

基督教倫理叢書

岳野慶作著

第一篇 祖國と人類 B6二〇〇頁 價六〇圓送別

第二篇 労働と所有 B6一八八頁 價六〇圓送別

第三篇 自由と平等 B6一六八頁 價四五圓送別

第四篇 結婚と家庭 B6一七八頁 價四五圓送別

第五篇 人生の目的 B6一九二頁 價六〇圓送別

第六篇 自然倫理と基督教倫理 B6二五〇頁 價七五圓送別

ギボンス・楊枝嗣著 浦川和三郎譯 吾等の信仰 B6四二八頁 價百卅圓送別

小林珍雄著 ヴァチカン市國 B6二〇〇頁 價六〇圓送別

松田毅一著 大友宗麟 B6一三二頁 價四〇圓送別

松田毅一著 聖フランシスコ・ザビエル B6一五八頁 價五〇圓送別

ナーベルフェルト著 宮本さえ子譯 高原に語る B6一七〇頁 價五〇圓送別

宗教研究費第一回懸賞作 田野崎昭作著 社会学派の宗教 B6一七八頁 價五〇圓送別

ヨハネス・ラウレス著 マルキシズム批判 B6二〇二頁 價六〇圓送別





書選光春

(1) ルター 善行論 48圓

(2) 石原謙 生命の言 35圓

(3) 藤井武 信仰生活 100圓

(4) 佐野勝也 信仰・愛・希望(近刊)

(出版目錄贈呈)

基督教專門出版

春光社

東京都杉並區上荻窪1ノ176

振替東京196262番

主筆 日本基督教團青年部傳道委員長 平山照次牧師

月刊 キリストの福音

B5判、八ポイント五段組、八頁表紙なし、青年、學生層への信仰指導誌として好評あり執筆者は有力なる日本基督教團青年指導者。學校、會社、工場、病院、官廳等一括購讀多し

定價一部五圓送料五十錢一年送料共六十六圓

發行所 東京都港區赤坂霞南坂町一四番地 福音出版社 振替東京九〇一四番 東京山手教會内

上智大学文学部監修

ニューマン著作集

第一期 全八巻(A5判上製)

アポロギア(上)(下) 聖 豊彦譯(近刊)

承認の原理(上)(下) 野口啓祐譯

基督教教理の發展(上)(下) 小林珍雄譯

ゲロンシウスの夢 酒井義孝譯

大学の理念 田中利太郎譯

季刊誌 カトリック思想 夏季號 五〇圓 送料別

定期ノ刊行次第

後約年二〇〇圓(送料共)

ジャック・マリタン著 吉満義彦譯 形而上学序論 A5三三〇頁 一八〇圓 〒二五圓

—マリタン著作集—

ローラン・ゴスラン著 聖トオマス・アキナスの 大澤 章譯 政治理論 B6三〇〇頁 一〇〇圓 〒一〇圓

ニコラス・ロゲン著 三浦 岱榮序 医学と倫理 B6二三六頁 八〇圓 〒一〇圓

ハインリヒ・デュモリン著 全き人間 B6二八〇頁 一〇〇圓 〒一〇圓

ピエール・シャルル著 犬養 道子譯 聖霊の小径 B6二五〇頁 一〇〇圓 〒一〇圓

ヘルマン・ホイヴェルス著 鶯と詩人 B6一四〇頁 六〇圓 〒一〇圓

東京都千代田區紀尾井町7 エンデルレ書店 振替東京98386 電話九段(33)0959

黒崎幸吉編著

○舊約聖書略註（上）B6上製本 定價二五〇圓【既刊】
○舊約聖書略註（中）B6上製本 定價三〇〇圓【既刊】
○舊約聖書略註（下）定價未定【計画中】
○新約聖書略註（全）品切【再版計画中】

マタイ傳 品切【再版計画中】
マルコ傳 A5版 定價五〇圓【既刊】
ルカ傳 定價未定【計画中】
ヨハネ傳 品切【再版計画中】
使徒行傳 品切【再版計画中】
コリント前後書 品切【再版計画中】
ヘブル・ヤコブ・ペテロ・ユダ書 品切【再版計画中】
默示錄・ヨハネ書簡 品切【再版計画中】
バウロの小書簡 A5版 定價九〇圓【近刊】
ロマ書・ガラテヤ書 品切【再版計画中】

○共觀福音書和合表 A6版 定價五圓【既刊】
○新約聖書語句索引（希—和）B5ト製本 定價八五〇圓【近刊】
○同（和—希）（分冊配本計畫中 詳細ハ御問合セノコト）

D・ネストレ編 ギリシヤ語新約聖書 B6版上製 定價二五〇圓（既刊）
玉川直重著 新約聖書ギリシヤ語独習 B6版上製 定價一五〇圓（既刊）
勝原勝男著 山上の垂訓 B6 定價五五圓（既刊）

☆聖ミカエル叢書
1八代斌助著 偉人の面影 袖珍版 定價一〇圓（品切）
2八代斌助著 麗しき泰西美談 B6美本 定價三五圓（既刊）
3八代斌助著 聖歌の話 B6美本 定價三五圓（既刊）
4八代斌助著 主イエス B6上製本 定價九〇圓（既刊）
5柳田貞次郎著 キリスト教読本 B6美本 定價八〇圓（既刊）
6遠藤義光著 神の國と地の國 定價未定（近刊）

☆聖ミカエル通信文庫
1神について語る B6 定價二〇圓（既刊）
2イエス・キリストについて語る B6版 定價二〇圓（既刊）
3教会について語る B6版 定價二〇圓（近刊）
4祈禱と聖奠について語る B6版 定價二〇圓（近刊）
5苦痛と罪について語る B6版 定價二〇圓（近刊）
6來世について語る B6版 定價二〇圓（既刊）

〇四九〇〇 二三一五 二五一一 川崎市 大阪 振替貯金 大阪根岸

明和書院 北区六ノ二 市上町 大阪市 電話




# 基督教年鑑発刊の辞

キリスト教の現状を知ろうとしても何等據るべき資料のないのを嘆き、本社は茲に、新教（プロテスタント）ロマ・カトリック教會、ギリシヤ正教會を綜合せるキリスト教年鑑を世に送ることとした。

今やすべての人はキリスト教を問題とせざるを得なくなつた。日本人は意識するとせざるとに拘らずキリスト教の流れの中におかれている。苟しくも時代と共に歩もうとする人はキリスト教が何であるかを知るを要する。然るに所謂知識人がキリスト教についてどれだけの知識をもつているかと言うと、先づ殆んど無知と言つても過言ではない。

本書はキリスト教各宗派に属する信者訴氏の信仰生活に便益を供すると共に日本知識人にキリスト教に關する綜合的知識を與えることを目的として編纂された。キリスト教概說、聖書の由來キリスト教の歴史、其の宗派等に付特に概論を述べたのはかゝる念願からである。

惟うにキリスト教は幸福をもたらす普信（セイシン）である。本書が各宗派の信者、求道者によき普信を傳え、相互の交りを深むるに役立つと共に、未だキリストを知らざる人々に福音を宣ぶる働きをなすならば、本社は主のためにその宣務の一端を果し得たりとして感謝に堪えぬものである。

昭和二十三年七月

キリスト新聞社

# キリスト教年鑑

## 目次

1948年


### 基督教概説
—教義・思想篇—

キリスト教とは何か……二
キリスト教の中心事実……三
信仰は我らに何を與える？……四
眞理はキリストに在り……六
イエス・キリストに就て……八
イエス・キリストの生涯……八
イエスの誕生……八
イエス・キリストの時代……九
イエスの受洗と試練……一〇
三つの誘惑を退け給う……一一
イエス・キリストの傳道……一二
神の國は何時來るか？……一三
十字架の死と復活……一四
神の子としてのイエス……一七
罪を赦す權威の持主……一八
救主としてのイエス・キリスト……一九
イエス・キリストと人類の歴史……二〇
キリスト出現せざりせば……二二
神に就いて……二三
キリストによりて示された神……二三
人格者としての神……二五
科学は神を肯定する……二六
神我らを尋ね給う……二七
尊しき愛……二七
イスラエルの最の信仰……二七
十字架に示す神の義……二八
愛なる神……二九
聖靈に就いて……三〇
聖靈の本質……三〇
助主としての神の御靈……三一
聖靈のはたらき……三二
死より生への轉換動力……三三
三位一体に就いて……三四
神の言としての聖書……三六
キリスト教の人間觀……三八
人間とは如何なる存在か……三八
神に象どられしもの……三九
人間は何故罪を有つか……四一
神による再生の必要……四二
滅亡の僕か神の子の榮光か……四三
罪と救とに就いて……四五
罪とは何か……四五
キリスト教罪惡觀の根底……四七
赦される罪赦されぬ惡……四八
パウロは罪をこう觀る……五〇
原罪論とはどういうものか……五一
罪より救うものは誰か……五二
救とは何か……五三
十字架は救の絶対條件……五五
犠牲は何を意味するか……五五
神の義と神の愛……五六
愛は苦しみを伴う……五九
永遠に輝く十字架の功績……六〇
罪よりの解放と永生……六一





キリスト教世界觀……六四
神と世界創造……六四
神は世界の上に在す……六五
苦惱の最後的意義……六五
奇蹟の問題……六六
キリストの奇蹟の意義……六七
近代科学思想とキリスト教……六八
宇宙の法則と神の実在……六九
科学的世界觀を超えるもの……七〇
歴史と終末の思想……七二
來世の問題……七五
キリストの復活に就いて……七五
復活とは如何なる事か……七六
復活の事実とその意義……七七
永生に就いて……七八
死に関する三つの考え方……七九
靈魂は何処へ行く？……八〇
良心は審き主の聲……八一
審判に就いて……八二
審きの座前のれる時……八五
終末と再臨に就いて……八七
終末思想の二つの要素……八七
キリスト教の終末觀……八八
世の終末は何時來るか……八八
我らの直面せる終末と再臨……八九
教会と礼典……九一
キリストの身体としての教会……九一
聖徒の交りとしての教会……九二
見ゆる教会と見えざる教会……九四
教会の起源……九五
洗礼と聖餐……九五
受洗に必要な備え……九五
聖餐についての二つの見解……九六
その他の礼典……九八
教会の機能……九八
教会の強化と罪惡との闘爭……一〇〇
教勢の拡大と教会の合同……一〇一
信仰生活に就いて……一〇二
祈りの生活……一〇二
如何に祈るべきか……一〇二
愛と奉仕の生活……一〇六
感謝の生活と苦難の意義……一〇八
教会生活……一一一
教会に負う個人の義務……一一二
傳道の生活……一一四


### —歴史篇—


キリスト教の歴史……一一五
十字架・復活・ペンテコステ……一一五
ロマ帝國と初代教会……一一六
初代教会の動向……一一七
西方教会と東方教会……一一八
聖地恢復の十字軍……一二〇
宗教改革の時代……一二〇
最初の改革者……一二一
ルッターの活動……一二一
スイスの改革……一二二
英國の改革……一二二
旧新両教勢力の闘い……一二三
プロテスタントの発展……一二四
日本の傳道の歴史……一二五
欧州文明とキリスト教……一二六
キリスト教の諸宗派……一二七
ロマ・カトリック教会……一二七
ギリシヤ正教……一二八
新教……一二八
聖公会……一二八
ルーテル派……一二九
バプテスト派……一二九
長老派……一二九
会衆派……一二九
クエーカー派……一二九
メソヂスト派……一二九
日本基督教團……一三〇
聖書の由來……一三一
旧約聖書と新約聖書との関係……一三一
新約聖書は何時出來たか……一三一
編集は第四世紀に……一三二
日本語訳の歴史……一三四
新約聖書は誰によって書かれたか……一三四

マタイ傳……一五五
マルコ傳……一五六
ルカ傳……一五六
ヨハネ傳……一五六
使徒行傳……一五七
使徒の書簡……一五七
ヨハネ默示錄……一五七
聖書の價値……一六八

## 記錄篇

### 平和回復後の世界教界

世界教会連盟発足す……一七〇
國際宣教連盟活動再開……一七〇
世界教会連盟への進展……一七〇
世界教会会議準備進む……一七一
世界連盟に參加相次ぐ……一七一
教会再一致への歩み……一七一
合同促進を大多數支持……一七一
各國教会の合同氣運……一七二
一つの世界実現へ……一七四
平和完成目指す二会議……一七五
世界に差伸べる愛の手……一七四
対峙する二つの思想戰線……一七六
教皇反共十字軍を提唱……一七六
新教も対共産党闘争へ……一七七
起上りつゝある青年……一七七
世界基督教青年大会開く……一七六
アジアで二大青年会議……一七八

### 各國教会の現狀展望

世界を貫ぬく動き……一七七
聖書協社の協力機関生る……一七八
四大教派の世界大会……一七八
道徳再武装運動の進展……一七九
アメリカ教会の活躍……一七九
躍進目覚しい新教諸派……一七一
カトリック教会の教勢……一七一
基督教話の販賣高激増……一七一
キリスト教病院の進展……一七二
切実な悩み—人種問題……一七二
〃青年を基督へ〃運動……一七二
メキシコ新旧教会の対立……一七四
ブラジルの新教進出……一七四
欧州諸教会の現狀……一七四
英國はキリスト教國か……一七四
ソ連は信教自由の國?……一七五
ソ連政府の新宗教政策……一七六
再起するドイツ教会……一七七
教皇ローマを去るか?……一七六
北欧諸國の教会現勢……一七六
黎明期のアジア教界……一七七
対華傳道・教育に重点……一七七
中國内戰による影響多大……一七一
世界神學界の動向……一七一
新しい神學者の擡頭……一七二
新しき指導者ニーバー……一七二
世界の終末は近いか?……一七四
教会と國家問題再燃!……一七四
神學生の增加に新記錄……一七五

### 終戰後の日本教界

宗教團体法廢止のその後……一七五
宗教法人令制定さる……一七六
終戰一年のキリスト教界……一七六
植村玄史金米を巡回……一七六
キリスト教連合会誕生……一七七
キリスト教界の現勢……一七七
インフレと苦闘する牧師……一七八
牧師を充分に働かせよ……一七九
低すぎる教会の献金率……一七九
國民道義再建の中軸に……一七七
全日本宗教平和会議開く……一七七
新日本建設國民運動……一七七
宗教への國民的関心……一七一
信仰を有つ者七割に增加……一七一
神道・佛教の現勢……一七一
過重苦とキリスト教界……一七二
參議院議員に十氏当選……一七二
基督者代議士廿一名進出……一七二
衆議院議員氏名一覽……一七二
參議員議員氏名一覽……一七二
公選首長と自治体議員……一七二
クリスチャン首相登場……一七二
宗教議員倶楽部生る……一七二
文化平和問題懇談会……一七二
宣教團の活動活発化……一七二



対日布教五ケ年計画……一七六
世界の指導者相次いで來朝……一七六
來日した宣教師團……一七七
内外協力会の機構……一七八
日本の將來は基督教國に……一七八
キリスト教の影響力……一七八
再一致への実驗室—日本……一七九

### 基督教各派の現況

日本基督教團……一八〇
大合同が実現するまで……一八〇
合同教團・部制で発足……一八一
新日本建設キリスト運動……一八二
各地に燃え上る聖火……一八二
信仰告白草案発表……一八二
海外教会よりの援助……一八二
日本基督教團の機構……一八二
日本聖公会……一八二
聖公会再建への努力……一八二
農村へ傳道の主力を……一八三
パチエラー記念傳道……一八三
過ましい復興の意欲……一八三
戰時中の苦難二主教を奪う……一八六
海外母教会と協力会議……一八六
ラムベス会議へ三主教……一八六
教育事業再建に猛手……一八七
新教諸派……一八七
日本福音ルーテル教会……一八七
日本ナザレン教團……一八七
日本基督改革派教会……一八八
日本バプテスト連盟……一八八
基督兄弟團……一八八
イマヌエル綜合傳道團……一八八
東洋宣教会きよめ教会……一八九
日本ホーリネス教團……一八九
活水基督教團……一八九
聖イエス会……一八九
万國福音教團……一八九
イエス之御霊の教会教團……一八九
安息日再臨教團……一八九
基督友会……一九〇
スカンジナビアン・アライアンス……一九〇
日本救世軍……一九〇
在日本朝鮮基督教会……一九〇
日本天主公教会……一九一
教区連盟の機構と事業……一九一
教会復興約四割を達成……一九一
國別的な共同教育発表……一九一
目立つ文化團体の活躍……一九一
日本正教会……一九二

### 教会をめぐる動き

基督教ジャーナリズム展望……一九二
各教派の機関紙と傳道誌……一九四
傳道雜誌続々再刊の途へ……一九四
教界を代表する諸新聞雜誌……一九四
ラジオ・チャーチ開始……一九五
東京宗教記者会発足……一九五
神学・思潮界の動向……一九五
社会基督教活動再開……一九六
キリスト教教育の現況……一九七
教育同盟会の拡充強化……一九七
新制大学に七校認可……一九七
國際基督教大学の発足……一九七
日本基督教教育協議会生る……一九八
基督教保育事業の現況……一九八
農村傳道の沿革と現況……一九九
農民福音学校の沿革……一九九
中央農村教化研究所……一〇〇
立体農業研究所……一〇〇
キリスト教婦人運動……一〇〇
戰後の基督教社会事業……一〇一
飢餓対策と戰災引揚者救援……一〇一
社会事業の公有民営化……一〇一
科学的研究への努力……一〇一
政府当局との協力促進……一〇一
國別的な共同募金の実施……一〇一
米國の指導援助に期待……一〇一
消費組合とキリスト教……一〇一
基督者參加の持つ意義……一〇一
我國消費の発展段階……一〇二
活躍するクリスチャン……一〇二

## 解説篇 附名簿

教会……一〇三

日本基督教團……二〇四
信仰告白草案成る……二〇五
新日本建設基督運動……二〇六
戰災復興六十六教会……二〇七
教團を離脱せる諸教会……二〇七
新しい傳道五ケ年計画……二〇七
日本基督教團教區……二〇八
北海教区 二〇九　奥羽教区 二一〇
東北〃 二一一　関東〃 二一一
東京〃 二一二　神奈川〃 二一三
東海〃 二一三　上越〃 二一四
北陸〃 二一五　中部〃 二一五
京都〃 二一六　大阪〃 二一八
兵庫〃 二二〇　東中國〃 二二一
西中國〃 二二三　四國〃 二二四
北九州〃 二二六　南九州〃 二二七
日本聖公会……二二九
教義・沿革・現勢……二二九
東京教区 二四〇　北関東教区 二四一
南東京〃 二四二　中部〃 二四三
京都〃 二四三　大阪〃 二四四
神戸〃 二四五　九州〃 二四五
東北〃 二四六　北海道〃 二四六
日本福音ルーテル教会……二四七
教義・沿革……二四七
教　会……二四八
日本ナザレン教團……二四九
教義・沿革……二四九
関東区 二四九　近畿区 二四九
中國〃 二五〇　九州〃 二五〇
日本バプテスト連盟……二五〇
沿　革……二五〇
教　会……二五一
日本基督改革派教会……二五一
教義・沿革……二五一
東部中会 二五一　西部中会 二五一
基督兄弟團……二五二
沿　革……二五二
北海教区 二五二　東北教区 二五三
関東〃 二五三　東京〃 二五三
東海甲信〃 二五三　中京〃 二五三
北越〃 二五四　近畿〃 二五四
山陽山陰〃 二五四　四國〃 二五四
九州〃 二五四
イマヌエル綜合傳道團……二五四
沿　革……二五四
教　会……二五五
東洋宣教会きよめ教会……二五五
教義・沿革……二五五
教　会……二五六
日本ホーリネス教團……二五六
教　会……二五六
万國福音教團……二五六
沿　革……二五七
教　会……二五七
活水基督教團……二五七
沿　革……二五七
教　会……二五七
聖イエス会……二五八
教義・沿革……二五八
関東教区 二五八　信越教区 二五八
北陸〃 二五八　近畿〃 二五九
山陽〃 二五九
安息日再臨教團……二五九
教義・沿革……二五九
教　会……二六〇
イエス之御霊教会教團……二六〇
教義・沿革……二六一
教　会……二六一
基督友会……二六一
沿　革……二六一
教　会……二六一
スカンヂナビアン・アライアンス……二六一
沿革・特色……二六一
教　会……二六二
極東福音医療宣教團……二六二
沿　革……二六二
國際基督教團……二六二
教　会……二六二
日本宣教会……二六三
沿　革……二六三
単立教会……二六三
日本救世軍……二六四
沿革・特色……二六四
東京連隊 二六四　東海道連隊 二六五
関東〃 二六五　大阪〃 二六五
東北〃 二六六　中國〃 二六六



北海道〃 二六五　九州〃 二六六
在日本朝鮮基督教会総会……二六六
教　会……二六六
沖縄人キリスト教團……二六六
クリスチャン・サイエンス……二六六
日本天主公教会……二六八
沿革・現勢……二六八
教　区……二六九
東京大司教区 二七〇　四國教区 二七四
浦和教区 二七〇　福岡司〃 二七四
横浜司〃 二七一　長崎司〃 二七五
新潟〃 二七一　宮崎〃 二七七
名古屋〃 二七二　鹿児島〃 二七七
京都〃 二七二　仙台司〃 二七七
大阪司〃 二七三　札幌〃 二七八
廣島〃 二七四
日本正教会……二七九
沿革・教義……二七九
教　会……二八〇


## 團　體


基督教主義・関係團体一覧……二八三
連絡・協力……二八三
日本宗教連盟……二八三
日本基督教連合会……二八三
日本基督教協議会……二八四
日本基督教教育團体協力会 二八四
日本基督教青年会同盟……二八四
日本基督教女子青年会……二八七
基督教教育同盟会……二八八
基督教保育連盟……二八八
日本基督教々育協議会……二八八
日本連合基督教共励会……二九〇
傳　道……二九〇
日本聖書協会……二九〇
基督教同志会……二九〇
イエスの友会……二九一
社会基督教全國連盟……二九一
基督教傳道後援会……二九一
日本キリスト教献身運動……二九二
医師同志会……二九二
沖縄基督教同志会……二九二
日本國際傳道協会……二九二
鉄道基督教青年会……二九三
東京医学基督教同志会……二九三
盲人基督信仰会……二九三
教派附属傳道團体……二九四
日本基督教團……二九四
日本聖公会……二九四
日本天主公教会……二九五
教化社会事業……二九八
全國基督教社会事業連盟……二九八
基督教社会事業運営協議会 二九九
日本基督教婦人矯風会……二九九
日本救癩協会（ＭＴＬ）……二九九
日本ロッチデール協会……三〇〇
文　化……三〇〇
國際平和協会……三〇〇
日本基督教平和協会……三〇〇
日本基督教文化協会……三〇一
基督教文化学会……三〇一
基督教政治社会問題研究会 三〇一
聖書註解刊行会……三〇一
宗教文化平和問題懇談会……三〇一
基督教兒童文化協会……三〇一
立教大学宗教学会……三〇一
基督教学会……三〇二
岡山基督教文化協会……三〇二
音楽・美術……三〇二
東京バッハ・ヘンデル協会 三〇二
東京ヴオランテアコワイヤ 三〇二
仙台ヴオランテアコワイヤ 三〇二
横浜オフトリオ協会……三〇二
横浜木曜会……三〇三
グリーコワイヤ協会……三〇三
基督教造型藝術協会……三〇三
宗教音楽研究会……三〇四
一般宗教関係……三〇四
協同組合・その他……三〇四
職域・地域・聖書研究会……三〇四
各種青年傳道團体……三〇四


## 社会、事業


基督教の社会事業……三〇五
連絡機関・兒童保護・[illegible]事業
医療保護・経済保護事業・特殊
女性保護・養老事業……三〇六
社会事業施設一覧……三〇七

## 便覧統計篇


基督教主義・関係学校一覧……三三
各教派関係神学校……三三
日本基督教団・日本聖公会・救世軍・安息日再臨教団・基督兄弟団・日本基督改革派・聖イエス会・活水教団・天主公教会
基督教主義学校……三四
プロテスタント……三四
カトリック……三九
各種学校……三三
基督教幼稚園……三三
東京　石川　高知
神奈川　長野　福岡
千葉　京都　佐賀
埼玉　滋賀　長崎
茨城　奈良　熊本
栃木　和歌山　大分
群馬　大阪　鹿児島
山梨　兵庫　宮崎
新潟　鳥取　沖縄
静岡　岡山　宮城
愛知　広島　岩手
三重　山口　青森
岐阜　香川　山形
福井　徳島　秋田
富山　愛媛　北海道
新聞・雑誌・出版社一覧……三四〇
教派機関紙……三四〇
新聞・雑誌……三四〇
出版社＝専門店……三四一
出版社＝関係出版店……三四二
終戦後の基督教出版書……三四五
神学＝教義信條に関する物……三四五
聖書＝に関する読みもの……三四五
哲学・思想……三四六
教育・倫理……三四七
伝記・歴史……三四八
傳　道……三四九
文学＝詩・歌・小説・随筆……三五〇
児童・教育……三五一
音楽・美術……三五一
その他……三五二


## 統計


基督教幼稚園の実態……三五二
基督教学校・都道府県別分布数……三五三
基督教学校生徒〃……三五三
各派教会都道府県別分布数調……三五四
各教派教勢調……三五六
十五大教会教勢概況調……三五七
昭和廿二年クリスマス祭員礼拝出席数調……三五七
教会事業都道府県別分布一覧……三五八
キリスト運動と神の國運動……三五九
世界宗教地区別一覧……一四八
日本基督教団教職生活実態調査……一六八
日本聖公会教職生活実態調査……一六八
宗教世論調査＝性別と年齢の信仰についての関連……一七一
同＝職業と信仰との関連……一七一
同＝都市と郡部の信仰への関心……一七一
日本基督教団教会復興地区別一覧……一七四


## 名簿篇


教派・団体・学校主要役職員住所録……三五四
宣教師名簿
日本基督教団……三五九
日本聖公会……三六〇
日本福音ルーテル教会……三六一
バプテスト連盟……三六二
日本ナザレン教団……三六二
基督友会……三六三
安息日再臨教団……三六三
アライアンス……三六三
日本救世軍……三六四
その他の教派……三六四
日本正教会……三六四
基督者衆議院議員氏名一覧……一七四
同　参議院議員〃……一七四





基督者知事氏名一覧……一七四
同　市　長〃……一七四
同　町　長〃……一七四
同　村　長〃……一七四
同　議会議員〃……一七四
同　市会議員〃……一七四
同　区会議員〃……一七四
同　町村会議員〃……一七四


## 其他


キリスト教年鑑刊行の言……一
教界重要日誌……三六六
編集後記……三七一


## 廣告


暁　組……表紙二
日本基督教団社会部……〃三
日本聖書協会……〃四
愛　育　社……廣告一
ミカエル國際学校出版部……〃二
きよめ教会出版部……廣告三
西村書店……〃二
醫聖社書店……〃三
聖　望　社……〃三
中央出版社……〃四
春　光　社……〃五
福音出版社……〃五
エンデルレ書店……〃五
明和書院……〃六
大丸百貨店……〃七
立教学院……〃八
青山学院……〃八
上智大学……〃九
関西学院神学部……〃九
明治学院……〃九
プール学院……〃一〇
大阪女学院……〃一〇
頌栄保育専攻学校……〃一〇
捜真女学校……〃一〇
聖書農学園……〃一一
友愛家具生産協同組合……〃一二
奥田商会……〃一二
目白ロゴス英語学校……廣告一三
大阪府生活協同組合連合会〃一三
神戸消費組合……〃一三
共　益　社……〃一三
千里山生活協同組合……〃一三
白十字会……〃一四
久美愛園……〃一四
永生会館……〃一四
日本愛育運盟……〃一五
國際教育文化協会……〃一五
社会基督教徒國運盟……〃一五
関西少年輔導新生会……〃一五
白十字協会……〃一六
関西厚生協会……〃一六
阪田商会……〃一七
田中鞄製株式会社……〃一七
岡部証券株式会社……〃一七
共　栄　会……〃一七
双葉漢薬株式会社……〃一八
平岩鑑農工業株式会社……〃一八
友愛書房……〃一九
日本基督教団日曜学校部……〃一九
東鹽営新製社……廣告一九
万伸社書店……〃一九
日本基督教青年会同盟……〃一〇
ライオン歯磨……〃一〇
日本協同組合同盟出版部　本文二五
一燈書房……〃一九
共栄社油脂化学工業株式会社二五
日興土木株式会社……〃二一
東京歯科医院……〃二六
キリスト新聞……〃二七
神戸改革派神学校……〃二八
日本基督教事業團……〃二八
日本基督教團出版事業部……〃二九
教文館……〃二九
衣笠病院……〃二六
日本基督教團診療所……〃二六

# 基督教概說

教義・思想篇

## キリスト教とは何か

キリスト教とは何か、と質問に對して私共は、ナザレのイエスをキリスト即ち救主、活ける神の子なり（マタイ一六ノ一六）と信ずる信仰であると答える。

ナザレのイエスとは今から凡そ千九百五十年前にユダヤに生れナザレ村に育つたイエスという人物のことである。キリストというのは救主と云う意味であつて、神の子というのは人間の姿をもつて人の世に降り給うた神のことである。即ち歴史上に現れたイエスという人物を救主として信仰し、神の子としてあがめること、これがキリスト教である。

宗教學や比較宗教史の學者たちは、世界の宗教を人類學や、心理學を取り入れて比較研究し、諸々の宗教に共通する類型を明らかにしようとする。斯うした方法は日本の様に雑多な宗教がそれぞれ有力に現存しているところに於ては、宗教理解の方法として一般に受け入れられているが、反面一つの宗教の本質を正しく識ることが出來ない憾がある。

**キリスト教の中心事実**　キリスト教のある學者たちは、もし世の宗教と稱えられているものが宗教であるならば、キリスト教は宗教ではないと主張し、キリスト教が他に類例のない獨自のものであり、絶對なものであることを強調している。キリスト教は全く獨特のものである。私共は一般的な宗教概念を以て之を理解しようとしてはならない。キリスト教を單なる思想體系と見てはならないし、又倫理道徳と密接な關係を有つものではあるが單なる倫理的な教えと見ることも亦間違つている。世間にはイエス・キリストを預言者、或は聖賢と見て、最高の道徳理想を玆に見出そうとする人々がある。

釋迦や孔子の場合に於いては、その教訓が最も重要な位置を占めている。釋迦はその生涯の終りに當つて弟子たちに『私は行わうと思つたことを行いつくし、語ろうと思つたことを語りつくした。これまで説いた教えそのものが私の生命である』と語つたと傳えられ、孔子の生涯に於いても、その人格と、その教訓とが密接な關係をもつてはいるが、人格は教訓の背景をなしているにすぎない。然しイエス・キリストに於いてはその言説よりもその人格が根本的な問題となるのである。

イエス・キリストはその教訓を守れといわれるよりも『我は道なり、眞理なり、生命なり』（ヨハネ傳一四ノ一）と

仰せられ、その人格を前面にもちだして『我に從え』と宣うのである。又『汝等は我を誰とするか』との嚴肅な問いを私共に投げかけ、これに對するまじめな應答を要求し給うのである。故にキリスト教の中心事實はイエス・キリストであり、キリスト教信仰とはキリストへの信仰である。キリストはその全人格をもつて私共の心をゆりうごかし、私共の魂をとらえ給う。このキリストに從い、このイエスを活けるキリスト、神の子と信ずるのがキリスト教の信仰である。

**信仰は我らに何を與える?** 然らばこの信仰は何を私共に與えるか。先ず第一に私共は信仰により苦しみ惱みを解決し常に慰めを與えられる。此の世の中は嬉しいことや樂しいことばかりではない。どんな人にも惱み、苦しみ、悲しみがある。もしそれが物に原因するならば、物で解決する。又、物で解決し得なくとも、人によつて解決し得るものがある。しかし人によつてもどうもならぬものがある。この時信仰はこれを解決してくれる。『凡て勞する者、重荷を負ふ者われに來れ、われ汝等を休ません。』(マタイ傳一一ノ二八)とイエスは仰せられた。キリストを信ずる信仰により私共は魂の休息を與えられる。『視よ、神人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在してかれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も苦痛もなかるべし。』(ヨハネ默示錄二一ノ四)とある如く信仰により私共は此の世の悲しみ、苦しみ、惱みを解決して神による慰めを與えられるのである。

第二に信仰により私共は死を解決することが出來る。死を解決せねばほんとの安心は得られない。人生の苦勞の大半は死に關係をもつ。親の死、子の死、兄弟の死、友の死、いづれも重大な問題であるが、特に己れの死は何物よりも重大である。信仰はこの重大問題を解決してくれる。『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん』(ヨハネ傳一一ノ二五)とイエスは仰せられた。キリストを信ずることによつて私共は永遠の生命を與えられる。キリストは『永遠の生命は唯一の眞の神にいます汝と、なんぢの遣し給ひしイエス・キリストを知るにあり』(ヨハネ傳一七ノ三)と仰せられた。キリストを信ずることによつて私共の亡ぶべき生命はこの世に於て永遠の生命に活かされ、來世に於いて遂に完成されるのである。

使徒パウロはロマ書第六章の終りに『なんぢらは神のしもべとなりたれば潔にいたる實を得たり、その極は永遠の生命なり。神の賜物は我らの主キリスト、イエスにありて受くる永遠の生命なり』と教えてキリストを信ずる者に與えられる恩惠を示している。この樣に信仰ある者にとつては死は滅亡ではなく、未來への門出を意味する。

第三に私共は信仰によつて此の世の惡に打ち勝つことが出來る。此の世には私共が善良になろうとすればこれを妨げ、高く登ろうとすればこれを引戻す力がある。私共は清い者となりたいのだがなれぬ。善い人となりたいのだがなれぬ。これは惡の力が誘惑するからである。この惡の力が強くなつて來れば、個人は墮落し、民族は衰える。然るに信仰は私共をして此の世の惡に勝たしめる。『凡そ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。世に勝つ者は誰ぞ、イエスを神の子と信ずる者ならずや。』(ヨハネ第一書五ノ四)とある通り、キリス

トを信じ神を中心とする生活をなすことによつて私共は此の世の惡に勝つことが出來るのである。

第四に信仰は私共が此の人生を最も善く正しく生きて行く導きとなる。私共が此の世に生きて行くには理想とか目的とかをもたねばならぬ。蓄財や慾をみたすことは一生を捧ぐべき目的とはならぬ。人生の最高の目的は人格完成であり、これは何人にも同じ條件の下に與えられる目的である。『さらば汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ』（マタイ傳五ノ四八）とイエスの敎え給うた如く、私共は神の如く全くなりたいと念願する。この目的に向つて私共を導くものは信仰である。又信仰によりこの目的に向つて進むとき、私共は最も美しくそして正しく生きることが出來る。若し人が美しく正しく生きるため必要なことを、すべて自分の努力によつて學ばなければならないとすれば、人はそれを得ることは出來ないか、出來たとしても長い時間を必要とするであろう。信ずる者と皆にいまし給うイエス・キリストは私共に人生の目的とこの目的に向つて如何に生きて行くかを絶えず敎え、私共を導き給うのである。

**眞理はキリストに在り**　最後に最も重大なことは、イエス・キリストへの信仰により私共の靈魂は神に結びつけられる。以上四つの事柄は實は私共が神に結ばれた結果として生ずることである。神とは何であるかと言うことは古えより論じつくされたが、未だ神を見た者はない。成程神は人間の思考を通して、又自然を通して或は歷史を通してその存在をおぼろげながら示すがそれは決して確實なものではない。神の何たるかはイエス・キリストによつてのみ知ることが出來る。まことに「未だ神を見し者なし、唯父のふところにいます獨子の神のみ之



を顯し給へり。」（ヨハネ傳一ノ一八）とある如くである。私共が神と人格的に交ることはキリストを通じてのみなし得ることである。この意味に於てイエス・キリストを仲保者と云うのである。

第十七世紀の信仰篤き物理學者パスカルはその著『瞑想錄』に於て次の樣にいうている。『我々はただイエス・キリストによつてのみ神を知る。またイエス・キリストによつてのみ我々自身を知る。我々はイエス・キリストによつてのみ生と死とを知る。イエス・キリストを離れて我々は我々の生、我々の死、神、我々自身が何であるかを知らない。』

現代の人々は斯うしたキリスト敎の眞理について何らかの證明を求めてやまない。然し宗敎的眞理の證明は自然科學に於けるが如き方法によつてなさるべきものではない。宗敎的眞理は宗敎經驗によつて證明せらるべきものである。

實にキリスト敎の眞理はイエス・キリストそのものである。この眞理の活ける實證は信仰によつて救われた人々であり、廣くいえばキリスト敎の歷史がこれを證明している。

ヨハネ傳第一章四節に『言は肉體となりて我らの中に宿り給へり、我らその榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして恩惠と眞理とにて滿てり』とあるはヨハネ傳記證者の言である。

# イエス・キリストに就いて

## イエス・キリストの生涯

**イエスの誕生**　イエス・キリストはロマ皇帝アウグストの時代、クレニオがシリヤの總督として最初の戸籍登錄を行つた時（西暦紀元前四年、一説によれば五年）ユダヤの國ベツレヘムの町に生れた。系圖によればダビデ王の末裔ヨセフを父とし、その妻マリヤを母として誕生した。イエスはナザレの父母の家で生長し、父ヨセフを助け家業である大工の生業に從い、父亡き後は一家の責任者として母と弟妹とを養つた。

少年時代の物語りとして傳えられる所によれば、十二歳の時兩親に携えられてエルサレムに上り神殿の祭が終えて歸路についた父母がイエスの一行の中に居ないのに氣づいて引返した時、イエスは獨り神殿で多くの學者に圍まれて經典に就いて論じて居り、兩親が心配した事を告げると『何故われを尋ねたるか、我はわが父の（神の）家に居るべきを知らぬか。』と仰せ給うたことがルカ傳第二章に記されて居る。イエスは『智慧も身のたけもいやまさり、神と人とにますます愛せられ』て成長された。



**イエス・キリストの時代**　イエスの生國パレスチナは三つに分れてをり、北をガリラヤ、中央をサマリヤ、南をユダヤと呼んで居た。これは地中海の東側に當り廣さは約二萬五千九百平方キロ、我國の四國より三割廣いだけである。此處に住んでいる民族はイスラエル民族で、ヘブル人とも呼ばれ、又支族の一つであるユダヤ云う名前に由來し、ユダヤ人とも云われている。

このイスラエル民族はキリスト出現前約二千年前、エジプトに移住し約千五百年前モーセに率いられて祖先の地に歸つて國を成したが、以來周圍に次々に興つた大國の間にはさまれ、外敵の侵入にあい、或いは虜となり、樣々な辛酸勞苦をなめた。併し彼等は代々の預言者たちによつて教え育くまれた信仰を有つていた。それは彼らの信ずる唯一の神がこの宇宙と世界との創造者、支配者であつて、神の選民である彼等に特別の恩寵を下し、メシヤを起して唯に外敵を征服するばかりでなく、民族を潔め、イスラエルを中心として、神の王國を打ち建てるとの信仰である。メシヤはギリシヤ語ではキリストと言い、元來の意味は『膏注がれたる者』と云うことで、救世主の意味となつた。メシヤ待望の信仰は廣く國民の間に普及して居り、民族としての苦惱が大きければ大きい程この信仰は深くなつて行つた。當時のユダヤはロマ帝國の支配下にあり國民生活は窮乏し社會には罪惡が充ちて居り、政治的權力はこれを除去するというよりはこれを助成するの觀があつた。正義と公道に對する尊敬は放棄され、惡は祕密ではなく人々の眼前を濶歩し道德的暗黑の時代をなしていた。

しかも當時のユダヤの宗教は形式に墮してその生命を失い、指導者は、墮落して民衆を導く力を失つていた。

ロマ帝國の壓政と生活の窮乏と道德的頽廢、しかも宗教の腐敗墮落のうちにあつて、民衆のメシヤ待望は高潮に達した。預言された救主は現れてイスラエルを回復するだろうとの信仰に人々の間に高まつた。

**イエスの受洗と試錬**　メシヤの出現を待望していた人々は、神の國が如何なるものとして現われるかについてははつきりしていないが、その間違いないことを信じていた。この時預言者ヨハネがヨルダン河のほとりに現われて國民に警告し『斧ははや樹の根に置かる、凡て善き果を結ばぬ樹は伐られて火に投げ入れらるべし』といつて、人々に悔改を說き、メシヤ出現に備え、新生活に入つた證據として洗禮を施した。彼は自らメシヤの先驅者を以て任じ、自分よりも偉大なる人物が出現して、聖靈と火とを以てお前たちに洗禮を施すであろう、自分はその鞋のひもを解くにも足りないものであると云つた。

この時、三十歳に達したイエスはガリラヤのナザレからヨルダン河のヨハネの許におもむき洗禮を受けようと申出られた。ヨハネは「われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給うか」と云うて之をとめようとしたのであつたが、イエスは『今は許せ、我らかく正しきことを悉くしとぐるは當然なり』と云い、進んでこれを受けられた。この時イエスは天がひらけて聖靈が降り、『なんぢは我がいつくしむ子なり、我なんぢを悅ぶ』という神の御聲をきいて、神の子としての自覺を得給うた。

イエスは神の子としての自覺を得られると共に如何にしてその使命を成就するかに就いて默想するために荒野に退かれた。神の子としての事業即ち救主としての使命は政治的であるよりも宗教的でなければならぬ、律法や戒律の尊嚴というよりも神の愛と恩寵に根ざしたものでなければならぬ。イエスのこの確信は當時のユダヤ人の期待に反することであつたので、この困難な事業を如何にして遂行するかの問題に就いて四十日間精神的苦鬪を續けられた。この時イエスは三つの誘惑とたゝかい完全にこれを克服された。

**三つの誘惑を退け給う**　第一は『なんぢ神の子ならば、この石に命じてパンと爲らしめよ』即ち經濟問題の解決によつて世を救わんとの誘惑であつた。イエスは之に對して、パンは必要であるが、もつと根本的な問題がある。『人はパンのみによるにあらず、神の口より出づるすべての言に由る』と舊約聖書に記された通り、人間の靈的食糧たる神の言が先決問題である。神を信ずる信仰があれば、經濟問題その他すべての問題は自ら解決する。この根本問題こそ救主の使命であるとの確信に到達された。

救主の使命について確信を得られた後、その使命遂行の方法に對して第二の誘惑は來た。それは破天荒なことをやつて人氣をさらうことであつた。即ち若し汝神の子ならば宮の頂より身を投げよ、天使は來つて、汝の身を守り、汝は恙なきを得るであろう、然らば人々はこの驚異すべき大事件によつて汝に從う樣になるだろう、という誘いであつた。イエスは如何なる場合にも神を試みるべきでないとの確信によつてこの誘惑に打勝ち給うた。

第三の誘惑は救主として使命を達成するためには、目的は手段を選ばずで、この世の惡と妥協し、世を征服して權力と榮華とを得、人々の上に君臨し、然る後救の業をなせばよいだろうとの誘惑であつた。イエスは『主たる汝の神を拜し、たゞこれにのみ仕えまつるべし』との確信の下に、この世の惡に從うことを敢然として拒絕し

給うた。この時イエスは世の所謂英雄たちのとつた道を選ばず、十字架の苦難の道を選び給うた。

かくて、我が使命は神のみこゝろを行い、これを實現するにありとかたく心に決められたのであつた。

**イエス・キリストの傳道** かくてイエスは故郷のナザレからガリラヤ湖畔のカペナウムに移り此處を中心として傳道を開始された。ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネの二組の兄弟漁師がガリラヤ湖畔で漁をしていた時イエスは『我に從へ』と仰せられた。その御聲に應じて彼等は直ちにその本業をすてて弟子となつた。その後加えられたものを數えて十二人の使徒が、イエスに從つてその事業を助けた。イエスは人間の踏み行うべき道に就て驚くべきことを示された。それは當時の宗教家の教えの如く形式に捉われず、深遠な眞理を極めて單純に、又平易通俗に說き給うた。自然界の事物をたとえに用いて深い宗教的眞理を說明し、日常生活のことから神の國の眞理を解明し給うたのである。

第一にイエスは愛に就て次の樣に教えられた。それは父なる神が凡ての人を同じ樣に愛し給うごとく凡ての人を愛し、世に棄てられ又罪に沈んでいる者を憐れみ、自分の敵をも愛してその罪を赦し、仇のため祝福を祈れと言うことであつた。事實キリストは人類の救のために十字架にかけられながら、自分を十字架に釘けた人々の爲に祈り、完全な愛の模範となり給うたのである。

第二に淸き心、神を愛する心を最も尊ばれた。行いに現われなくても、心の中に惡がきざせば既に罪を犯したことになる。行いよりももつと大切なものは心持である。イエスは行いの結果よりもその動機、又動機の奥にある心持に重きをおかれた。人は淸い心を以て行動するのでなければ道德的生活は全うされないという教へは、從來の道德を全うし、之を最高のものにまで引き上げたものである。又『汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を査ぶ、然るに汝ら生命を得んために我に來るを欲せず、ただ汝らの裏に神を愛することなきを知る』（ヨハネ傳五ノ三九）と仰せられ、更にいづれの誡命が一番大事かと問われた時『たんぢ心を盡し、精神を盡し、思ひを盡して主たる汝の神を愛すべし』と答えて神を愛し、己の如く隣人を愛することを教え給うた。神を愛することが先ず第一のことで、凡てのことがこれに基いて爲されなければならない、と說かれたのである。

又イエスは心の貧しきもの、悲しむ者の却つて幸福なる事を說き、人生の最高の目的は神の國とその義とを求むることにあると教えられた。イエスは神の國の觀念に全く新しい意義を與え、神の御意の全く行われる靈的王國として之を說かれたのである。

**神の國は何時來るか？** 神の國は何時來るかとの問に對してイエスは『神の國は見ゆべきさまにて來らず、また視よ此處に在り、彼處に在りと人々言はざるべし、視よ、神の國は汝らの中に在るなり』（ルカ傳一七章二〇節以下）と仰せられ、神は人類の父であつて、子としての人間が完全に神に從うことが神の國である。それ故にイエスの神の國の思想はその傳道の最も中心的なものであつた。そして人がこの神の國を求むる時にその凡ての必要なもの、衣食の如きものは自ら與えられると教えられたのである。

イエス・キリストによつて傳えられたこの道は、最高の、そして最も深い意味をもつものであつたが、同時に

最も理解しやすいものであつた。イエスは『天地の主なる父よ、われ感謝す、此らのことを智き者、慧き者にかくして嬰兒にあらはし給へり』（マタイ傳一一ノ二五）と仰せられた。當時の學者たちや、智慧者を以て自任している人々は、イエスの教を理解しなかつた。之を受けた者は幼兒の様な純眞な心をもつた大衆であつた。『神の子を知るものは神の子より外にない』と云われているように、これはイエス・キリストによつてはじめて人類に示された眞理であつた。

**十字架の死と復活**　イエス・キリストの傳道は又肉體の病や精神の病をいやし、盲目の眼を開き、その他様々の奇蹟を行う力を伴つていたために、多くの群衆がイエスの赴くところ何處にでもこれに從つた。併しこの力ある不思議な業は神の恩寵として行われ、又特別な教訓のためであつて、奇蹟のための奇蹟ではなかつた。又イエスの教訓も行動も凡てが天來の權威をもつてなされたので、人々は彼に驚異し、彼を信じた。

イエスは一方に於いて當時の形式に捉われ、僞善的な行爲に滿ちていた宗教家、即ち神殿における祭司や、學者パリサイ人等を痛烈に批難した。イスラエルの苦惱の時に現われた代々の預言者の活動が、宗教の形式主義と指導者の腐敗、墮落に對する挑戰であつたように、イエスの說いたところは當時のユダヤ教の形式化と指導者の墮落に對する糺彈であつた。

當時エルサレムの神殿に於いては複雜な儀式が執り行われ、その功德で人間の罪が赦されると信じられていたが、玆に犧牲の儀式が濫用され、それが犧牲用の動物を賣買する者の利得に利用された。又ロマの貨幣をユダヤ



の貨幣に兩替をする獨專權を握つていた祭司たちの利益のために、神殿が利用された。これを目のあたり見給うたイエスは、これを宗教家の墮落として鋭く衝いたのであつた。又パリサイ派という一派の律法主義の人々は、學者によつて解說されたモーセ以來の律法（人の踏み行う掟）を綿密周到に實行すべきことを說いていたが形式的になつてその精神を失い、僞善に陷つてしまつたために、イエスの批判の對象となつたのである。

僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、汝らは盲目なる手引である、律法の中で尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にして、貪慾と放縱に滿ちているではないか、救は律法を形式的に守ることによつて與えられるものではなくて、心を盡し精神を盡し思を盡して主たる汝の神を愛し、おのれの如くなんぢの隣を愛することによつて與えられると說かれたのであつた。

この糺彈のため祭司、學者、パリサイ人たちの憎惡は愈々昂まり、衝突の危機は迫りつゝあつた。又一方においてイエスの神の國の福音が政治的な此の世のものではなくて、靈的王國の建設にあるということが民衆に明らかになるとともに、此の世の强大な王國の出現を待望していた民衆は、望を失つて次第にイエスから離れて行つた。イエスは二年半に亘る傳道の後弟子たちを率いて首都エルサレムに上ろうとした。弟子ペテロはこれを引とめたが、イエスは『汝は神のことを思はず、却つて人の事を思う』と叱責され、十字架の苦　を通しての み使命の完成されることを弟子たちに示され、祭司、學者、パリサイ人との衝突を豫期しつゝ、御顏を固くエルサレムに向け、人類の救を全うするため、敢然として苦難の道を進み給うた。

イエスはその最後の晩餐を弟子たちと共にせられ、パンを裂いて弟子たちに與え『これは汝らのために與うるわが身體なり』といわれ、ぶどう酒の杯をも弟子たちに與えて、『これは汝らのために流すわが血なり』と仰せ給うた。更に食事の後自ら弟子たちの足を洗い『我は主また師なるに尙なんぢらの足を洗いたれば汝らも互に足を洗うべきなり、われ汝らに模範を示せり、わが爲ししごとく汝らも爲さんためなり』との遺訓を與えられた。その夜エルサレムの郊外ゲツセマネの園に於て『この酒杯もし飲まで過ぎ去り難くば御意のまゝに成し給え』と祈り、十字架の苦難への御決意を固められた後、祭司長、學者らの配下によつて捕えられ、七十人よりなる宗教會議の裁判にかけられた。宗教會議はイエスが自ら神の子と稱したことは、神を瀆すものであるとの理由によつて死罪に定めた。ロマ總督ピラトはこれを赦そうとしたが、民衆の反抗を恐れ、死刑執行を承認したのであつた。かくてイエスは十字架にかけられた。十字架の上に於てイエスの述べられた七つの言葉は、凡て深い意味をもつが、その中でも『父よ、かれらを赦し給え、そのなすところを知らざればなり』という祈りは人々の胸を打つた傍觀していたロマ兵の隊長はこの有樣を見て『實にこの人は神の子なりき』と嘆じた。

イエスを愛し敬つた人たちは總督ピラトに屍を乞うてこれを近くの園にある新しい墓に葬つた。三日目の日曜日の朝墓詣りに行つた弟子たちは、墓の入口がひらけて屍の失われているのを知り驚いたが、やがて復活し給うた主イエスの御姿に接し、その御言を聞いて他の弟子たちにこれを傳えた。その後主イエスは屢々弟子たちの前に現われた後『汝らは往きてもろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈の名によりて洗禮を施し、福音を述べつたえよ、我は世の終りまで常に汝らと偕に在るなり』と仰せられ、人類を救うべき使命を與えて、四十日目に弟子たちを離れて天に昇り給うた。



## 神の子としてのイエス

イエスは或時弟子たちに問うて、人々は自分を誰というかと仰せられた。この問に對して彼等は　或人はバプテスマのヨハネ、或る人は預言者の一人であるという『ている』と答えた。イエスは更にお前たちは我を誰と言うかと問い給うた。ペテロは『なんぢはキリスト、活ける神の子なり』と答えた。イエスは『バルヨナ・シモン、なんぢは幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。』と言つてペテロを賞讃された。ペテロは正しい信仰を告白したのである。この樣にイエス・キリストを如何に見るかと言うことによつてその人の信仰は決定される。

現代人はキリストを私共と同じ人間であつて、ただその人物がすぐれぬけて偉かつたとしか考えぬ傾向があるが二千年に亘つて保たれて來た正しい信仰によれば、キリストは人間として生れ給うたが、神の性格をもたれ、神と質を同じうする方である、キリストは神の子である、天地宇宙を創り之を支配し給う神は、限りなく人間を愛し給い、身を以てその愛を示し給うた、即ちキリストにより己れ自らを人間に示し給うた。

新約聖書を見るとイエスが學者の如くではなく、權威をもてるものの如く語り給い、またその行動には弟子た

ちを驚かせ、隨い往く者どもを懼れしむるものがあつた。ペテロはゲネサレの湖のほとりでイエスの膝下にひれ伏して『主よ、我を去り給へ。我は罪ある者なり』と言うた。イエス・キリストの人格には罪ある者の容易に近づき難き聖なるものがあつた。イエスに接した初代の使徒等はイエスを以て『聖にして惡なく、穢れなく、罪人より遠ざかれる者』であつたと記し、罪を知り給わざりしものに在し給うたことを斷言しているし、イエス自身も『汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る、われ眞を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。』(ヨハネ傳八ノ四六)と言われている。

**罪を赦す權威の持主**　イエスの神の子としてこの世に遣わされた使命は、罪人を悔改めさせて神の國に入らしめるということにあつた。これはイエス自身のうちに清き心なくしては出來ぬことであり又イエスが人の罪を赦す權威を與えられていることを明言されていることからも、イエスには全く罪の無かつたことを證明している

然らばキリスト御自身は如何なる意識を有つていられたか。イエスは神に對して特に「我が父」と云われていし又マルコ傳第十二章には葡萄園のたとえをもつて御自身が神の獨子、世嗣であることを語られた。又『すべての物は我わが父より委ねられたり、子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままにあらはすところの者の外になし』(マタイ傳一一ノ二七)と仰せられていることからも、イエスは御自身を神の子としてはつきり意識してをられたことが解る。

今日迄誰もキリストの如く神を知りし者はなかつた、又誰もキリストの如く父なる神をこの世に現わしたもの



はなかつた。イエスの教える所は即ち父なる神の教える所であつて、イエスの生涯における祈り、苦惱、たたかい、十字架の死は全く父なる神の人格とみこころとを現わしたものであつたのである。神の子イエス・キリストによらなければ我らは神も神の愛も神のみこころも知ることが出來ず、また神を信ずることが出來ないのである我らは唯、イエスによつてのみ神を知り、また我ら自身の本來の姿、現實を知り、永遠への希望を與えられるのである。

## 救主としてのイエス・キリスト

ヨハネ傳第三章第十七節には『神その子を世に遣したまへるは世を審かんためにあらず、彼によりて世の救はれんためなり』と記されているように、キリストの此の世に來り給うた使命は世を救い人を救わんためであつた

人類は罪のために亡ぶべき運命をもつている。罪とは單に法律に背き道德を紊る行爲を言うのではなく、人間の罪惡の根抵にある根本的なものである。これを詮じつめれば、罪とは神への背叛である、即ち人間が神の聖旨に背き、神に從わずして自己を中心とすることである。この根本的な罪は人を害し世をそこね、遂に人類を亡びに導く。このことは戰爭と云う一事を例にとつて考えただけでもわかることで、人類の罪が嵩じて來ると、それが相互殺戮となつて現れ、多くの人を亡びに至らしめるのである。

神より見るならば、すべての人に罪がある。自分は惡い事をしていないから何も罪はないと云う人があるが、

自分を神の子キリストと比べて見る時、如何に自分が神の御こゝろに背いているかがわかるであろう。この罪は人間の力によつてはどうにもならない。今日迄眞實に生きようとした多くの眞面目な人々の切實な經驗がこのことを立證している。

人類の罪は神の恩寵によつてのみ赦される。神の子イエス・キリストは十字架の死によつて人類の罪をあがない給うた。本來ならば全人類が罪から免れるには、神の審きを受けて苦しまねばならぬものであるのに、キリスト一人の御苦しみにより全人類の罪は赦された。キリストを信ずる者は十字架の功德を受けてその罪を赦してもらえるのである。これは神の人類に對する恩寵である。『神はすべての人の救はれて眞理を悟るに至らんことを欲し給ふ。それ神は唯一なり、また神と人との間の中保(なかだち)も唯一にして、キリスト・イエスこれなり。彼は己を與へて凡ての人のあがなひとなり給へり。』(テモテ前書二ノ四)とパウロが說いた如く、イエス・キリストは十字架によつて私共の罪をあがない、神と人との間に罪によつて設けられている隔てをとりさり給うことによつて私共の救いとなり給うたのである。

## イエス・キリストと人類の歷史

イエス・キリストは如何なる事業をされたか、又現在なしつゝあるか。キリストは『われ父にをり、父はわれに居給ふなり。若し信ぜずば、わが業によりて信ぜよ。』(ヨハネ傳一四ノ一一)と仰せられたが、キリストは今日迄の人類の歷史に於て如何なる業をなし給うたか。

第一にキリストによつて人間というものは何ものにも勝る尊きものとして價値づけられた。一箇の人間の魂を全世界よりも價値あるものとせられたキリストは『人全世界をもうくとも、己が生命を損せば何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや』(マタイ傳一六ノ二六)と仰せられ、又迷える一匹の羊のたとえを語られた時、『汝らつゝしみて此の小さき者の一人をも侮るなかれ』と仰せ給い『またかくの如く此の小さきものの一人の亡ぶるは天にいます汝らの父の御意にあらず』(マタイ傳一八ノ一二)と仰せ給うたのであつた。

ギリシヤ、ロマの文明は貴族文明であつた。少數の貴族が多くの奴隷を使役し、華やかな生活をなし絢爛たる文化を創り出したけれども、その反面には人間と生れながら自由をもたず、家畜同樣の取扱いを受けていた無數の男女があつた。この奴隷を解放して自由人たらしめたのは、キリストの業であつた。神の前にはすべての人は平等であるという立場から一人一人の人間の價値は尊重され、人格の尊嚴は認められるに至つた。こゝからして奴隷解放になされたのである。婦人を男子の隷屬化より解放することも亦キリストの敎えより來つた。勞働者の解放も亦その源はキリスト敎より發しているのである。

第二にキリストにより人類の道德は高められた。味方を愛し仇を憎むことは從來の道德であつた。敵を愛し仇の爲に祈ることはキリストにより初めて敎えられ實行されたのである。この至高の道德は今日迄人類の世界を導いて、一方に於て憎惡と殺戮が行われて來たにも拘らず、之を滅亡の淵に陷らしめず、絶えずこれを引上げる働

きをなして來たのである。

第三に人間の生き方について最高の目標を示し今日迄人類を導いて來たのはキリストであつた。『神の如く完全なれ』（マタイ傳五ノ四八）と云う目標を示すことによつて人類の進み行くべき道は明かにされた。そしてキリスト自身神の如き全き人格を人類に示し給い、歴史の頂點となり給うた。神の國と神の義とを求むる（マタイ傳六ノ三三）ことを以て人間生活の第一義的なものとなすところの敎えは今日迄人類の世界を導いて、此世的なもの肉慾的なものに墮落し去ることを防いで來た。

第四にこれは小さなことの樣に見えるが、キリストの敎え給うたところにより男女關係は清められ、一夫一婦制が次第に人類の世界に支配的となつたことである。キリストは『神の合せ給ひし者は人之を離すべからず』（マタイ傳一九ノ六）と述べられ神が男女を同數に創り給うた御旨に從い、一夫一婦制の正しきものであることを敎え給うたが、キリスト出現以前の社會に於てもそれ以後の社會に於ても力ある者は多くの女を蓄える風習が存在し、世の亂れの原因をなしたが人類社會は次第に一夫一婦制に向い男女の關係は潔められつゝあるのである。以上は人類の歴史にあらわれたキリストの御事業であるが、これは人類を救い給う御事業の一つの現われにすぎない。

**キリスト出現せざりせば** もし人類の世界に、ギリシヤ、ロマの文明のみがあり、キリスト敎がなかつたとしたなら今日迄の世界は如何になつていたであろうか。奴隷制度は何等かの形に於て存續し、弱者は深刻な苦惱のうちにあつたであろう。力ある者富める者は淫樂の限りを盡し、性道德は紊れ、現世的享樂の氣風のみが幅を



利かし、正しきもの、美しきもの、高きものが今日程には求められなかつたであろう。

信仰と救の立場をはなれ、客觀的に人類の歴史を見ても、私共はそこにキリストの大いなる事業の行われ來つたことを知る。私共はこの業を見る時、神の子キリストを信ぜざるを得ないのである。

# 神に就いて

## キリストによりて示された神

キリスト敎に於ける神は如何なる神であり、又如何にして私共に知られるか。神に就ての觀念は漠然とではあるかもしれないが、大ていの人が有つている。人間は誰でも神あるいは宗敎と全く無關係に生きることは出來ないからである。然し、キリスト敎の神は私共が自分の頭で作り上げた所謂概念としての神ではない。それはイエス・キリストによつて示された父なる神であり、人格者としての神である。

キリストは神を如何に敎えたか。當時の學者パリサイ人等は神を『いと高きもの』『聖名』あるいは『天』と呼んだのに對して、イエスは神を『わが父』と稱え神が父なる神であることを示した。イエスは『我を見しものは父を見しなり』（ヨハネ傳一四ノ九以下）と仰せられた。又キリストの敎え給うた神は愛の神であり、人をその行いによ

つて直らに審くことをせず、救の道を開き給う神である。父なる神は罪ある人間を追い求め、これを尋ね出して
その罪を負わんとする神である。この愛のあらわれとして神はキリストをこの世に降し給うた。キリストも『そ
れ人の子の來れるは、失せたるものを尋ねて救はんためなり』(ルカ傳一九ノ一〇)と仰せられた。
更にキリストの示し給うた神は人間の全生活をその掌手のうちにおさめ、之を支配したまう神である。マタイ
傳第十章二十九節以下にはこのことに就いて次のように記されている。『二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、
然るに汝らの天の父の許なくばその一羽も地に落つること無からん。汝らの頭髮までも皆かぞへらる。この故に
おそるな、汝らは多くの雀よりも優るるなり』と。このように神は人間を守り、人間の運命をつかさどり、如何
なる時にも、又如何なる危機にも人間を棄てず、その行くべき道を開いてこれを導き給う方なのである。
キリストの示した神はこうした恩寵の神であるとともに、倫理的な神、正しい神である。キリストは『天の父
はその日を惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり
なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ』(マタイ
傳五ノ四八)と仰せられた。神は人に對し互に愛の奉仕を求め、神の如く完全ならんことを求め給う。
又イエス・キリストの父に在す神は全能の神である。キリストは祈りにおいて『父よ、父には能わぬことなし』
と仰せられている。然し子としてのイエスはその全能の力を用いて自分の意志を通さうとはせられず、ただ神の
御意にのみ從わんとせられた。私共は神への信仰においてキリストのこの態度に學ばなければならない。全能な



る神への信仰というのは神の全能を自己の目的遂行のために信ずるのではなくして、その全能を信頼してただこ
れに從うという態度をもつてすることである。キリストはその全生涯を以て私共にこの模範を示し給うた。
最後に神は、隱れたるに在す神であつて、私共の祈りを聽き給う神である。キリストは愛を行う時、僞善者の
如く人の前にあらわすことを目的とせず、ひそかに之を行うべきを教え給うた。又祈る時戸を閉ぢて祈るべきを
教え給うた。それは神が隱れたるに在す神であり、隱れたるに見給う神であるからである。人は神が在し給うな
らばそれを目の前に示せと言うかもしれないが、人間が神と顏と顏とを合せて相見る時はパウロの言うている樣
に『彼の時』即ち救の完うされた時である。

## 人格者としての神

神と天地自然の根本についての考え方には昔から今日まで大體三つの考え方がある。古代の人は自然現象を神
の意志の現われと見た。つまりその背後に人格を持つ神があり、天變地異を始めとして凡ゆる自然現象、進んで
は人生の事どもまで神という人格者のなす業と考えた。その最も純粹な考方は古代イスラエル人のそれであつた
次は神を以て宇宙の本體とか精神とか、窮極の原因となすものでこれを人格的に見ず、抽象的な精神原理と考
えた。これはギリシャ哲學、西洋哲學の考え方であつた。科學が發達した結果、神についての觀念は薄くなり、
これにとつて代つたのが法則である。すべての現象は法則によつて支配されている。法則が宇宙の原理である。

私共は法則を發見し、この法則に自らを合せて行けばよい。こゝに無神論が生れ、神は否定され、神という言葉さえも使われなくなつた。

**科学は神を肯定する**　人類の歴史はこの三つの過程を通つて現代に至つた。然るに科學が發達して人格を持つ神は否定されたと思つたところ、却つて科學は宇宙の神祕をわれわれに示した。かくて天體や自然についての學問を深く究めた學者たちは、この宇宙と自然は全智全能なる者によつて造られたと考えるより外なしという結論に達した。そして天地自然の根本に一つの意志のあることを悟り、そこに人格的な神を思わざるを得なくなる即ち、より高められ深められた形において、古代イスラエル人と同じく、人格を有つ神を考えるに至つたのである。

人格者としての神は自然的世界にその意志をはたらかせていると共に、人間の世界にその御意をはたらかせて人間と交り、人間の行爲と苦惱とその歴史に深き關心を寄せ給うのである。キリスト信者は、神を信頼し、神を愛し、神に祈る。神を私共の信仰の對象として全身全靈を傾けて愛すると言うことは、神を絶對精神とか抽象的本質と言う様に考えるだけでは出來ることではない。神の自由なる意志が私共にはたらくという信仰に立つて始めて可能となることである。

舊約聖書に『神其像の如く人を創造たまへり』(創世記一ノ二七)とあるが、すべての人間は神の像をそのうちに宿している。私共は己れのもつ不完全さを取除いて自己の人格を省察した時、おぼろげながら神の人格性を想像出来るであろう。神は己れに似せて人を造り給うたからである。

**神我らを尋ね給う**　私共はキリストを見て神が愛に富む義しき人格であることを知り、この神を愛し仕えまつるのである。しかも私共が神に對し愛と信頼をもつに至つたのは　私共が自分で努力して神を見出したのではなく、神の方で私共を愛して神に到るの道を開いて下さつたのである。『我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり』(ヨハネ第一書四ノ一〇)とある如くそれは神の意志の現われであつた。神は私共が失われた狀態にある時、私共を尋ね求めて救いの業をなしとげ給うた。

この人格者たる神と私共が交ることが祈りであり、祈りに於ては私共は『天にいます我らの父よ』と云う人格的な呼び掛けをなすのである。

## 義しき神

正しい信仰と迷信の區別は信仰の内容が倫理的であるかどうか、道にかなつているかどうかにある。換言すれば、拜むところの神が義しい方であるか否かによつてきまる。倫理性を缺く宗教は必ず迷信邪教となる。此點に於てキリスト教は徹頭徹尾倫理的である。それは神が義しい神であるからである。

**イスラエルの義の信仰**　神は義であると言うことは歴代のイスラエル預言者のいだいた信仰であつた。即ち神の審判は嚴正であり、惡人を正しく審き、義人を守り援け救い給うのである。此處から神は正しい人間を義と

し給うという信仰、所謂『義認』又は『稱義』の信仰が出て來たのであつて、義とされることが救いであると考えられるに至つた。

イスラエル人は神によつて與えられた律法を守ることによつて義とされようと努力したが、形に捉われて精神を失い、キリストの現われた當時は、この努力は空しきものとなつていた。キリストは弟子たちに向つて、『我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者パリサイ人に勝らずば、天國に入ること能はず。』(マタイ傳五ノ二〇) と仰せ給い又『先づ神の國と神の義とを求めよ』(マタイ傳六ノ三三) と敎え給うた時の義は、當時のユダヤ人の樣に唯律法を形式的に守るのでは足らず、もつと高いものを求め給うた。この樣に敎え給うたキリストは父なる神を義なる神としてその行いによつて如實に示し給うた。

**十字架に示す神の義**　『神は眞實にして正しければ我らの罪を赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん』とヨハネは云うているが (ヨハネ傳一書一ノ九) 神が眞實にして正しくあればあるだけに、我ら人間の罪と不義と不眞實とをそのまゝにして放任し給わないのである。神は義なる神としてこれを審き、これを處分し給わないならば神の聖も眞實も共に失はれ、神の道德的世界秩序は破壞されてしまうからである。こゝに於て神はその義を現わそうとして御子キリストを犧牲とし、人間の罪を贖い義を全うし給うたのである。玆に至つて神の義は神の愛と切り離しては考えられなくなるのである。愛はやさしく、義はきびしいから一見矛盾しているようであるが、神は愛であると共に義なのである。このことは私共の生活に於ける父と子との關係を考えればすぐ〳〵る。父は子が不良になつたり、惡いことをしたりすることを欲しない。子が邪道にふみこむ時は父は怒る。子の罪を憤りつつ、しかも子の罪の故に惱み何とかして子を正道に引戻そうとする。父は子を愛する故に子の義とせらるることを願うのである。

## 愛なる神

聖書の言葉の中で最も多くの人々に親まれているのは使徒ヨハネの『それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり』(ヨハネ傳三ノ一六) という言葉であらう。

父が子を愛する如く神は人間を愛し給う。人類が踏み行くべき道を間違えて邪道に入り遂には滅びに至る運命に陷つたのを御覽になり、神はキリストを世に遣し、人類を正しい道に引きもどす事業を完成し給うた。卽ち、罪に沈んでいる人間を救い出す道を開き給うた。キリストはこの神の愛を身を以て證明し給うたのである。

キリストの全敎訓の基礎をなしているものは、神は父であるということである。これは父の愛を以て神が人類を愛し給うことを示している。失われたる人間が神の許にかえることの喜びが神にとつて如何に大きなものであるかということと、神は如何に深い愛をもつて人間を愛してをられるかということを最もよく私共に示しているのは、ルカ傳第十五章に於いてキリストが私共に語り給うた三つのたとえである。それは一匹の失われたる羊のために九十九匹を野においてこれを見出すまで尋ねる牧羊者の譬であり、十枚の銀貨を有てる女が失せたる一枚

を尋ねるために燈火をともし、家を掃いて見出すまで懇ろにたずね、見出さばその友と隣人を呼び集めて喜ぶという話であり、今一つは父の許を去つて放蕩の限りをつくし零落の末、父と我家とを思出して父の許に歸る息子のたとえである。

神はこの愛を更に徹底せしめ、人間の救を完成するためにキリストを十字架につけてこれを罪のあがないの犠牲となして、神の義を完うし、その愛をあらわし給うたのである。更にこの神の愛はキリストを信ずるものの罪を赦して救うということに止らず、信仰によりてこれを義とし、神の子となし給うことによつて一層大なるものとなつたのである。ヨハネは言う。『視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大いなるかを。我ら神の子と稱へらるる既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり』(ヨハネ第一書三ノ一)と。

## 聖霊に就いて

**聖霊の本質** キリストはバプテスマのヨハネから洗禮を受けて水から上られた時、神の御霊が鴿のごとく降つてその上にきたるのを見給うた。また御霊によりて荒野に導かれて惡魔に試みられ給うた。(マタイ傳三ノ一六以下)キリストはまたその弟子たちを傳道のために派遣するに當つて、彼等が危機に際會した場合には聖霊がこれを導き言うべき言葉を與えると約束された。(ルカ傳一二ノ一二)バプテスマのヨハネはキリストに就いて次のように語つた。『神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、御霊を賜ひて量りなければなり』と。(ヨハネ傳三ノ三四)キリストには神の御霊が働いて父なる神の御意を行い、病を癒し、奇蹟を行い、救の事業を完成されたのである。

聖霊の働きが更に大きな新しい意味を有つようになつたのは、キリストの弟子たちに對する約束によつてであつた。キリストは十字架につけられる前に最後の教を與えられたがその中で次のように語り給うた。『われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝らと偕に居らしめ給ふべし。これは眞理の御霊なり』(ヨハネ傳一四ノ一六以下)キリストが此の世を去る時には助主である神の御霊がキリストの代りにおくられて永遠に偕に居るというのである。この助主、眞理の御霊が與えられる故に弟子たちはイエスがこの世を去つても孤兒のごとくならない。從來キリストの上にはたらいた神の御霊が今度は直接弟子たちにはたらいて何時までも變らないというのである。この助主という言葉には指導者または援助者あるいは慰めを與える者という意味がある。

**助主としての神の御霊** この聖霊は信仰生活をなすに當つて、人々を助け導くものである。この聖霊が約束の如く弟子たちに與えられたのはキリストの復活の日から五十日目の五旬節の日に於いてであつた。(使徒行傳二ノ一―四二)

この力ある聖霊は私共がキリストを信じ、父なる神に祈る時私共にも與えられるということがルカ傳第十一章十三節に約束されている。

コリント前書(一二ノ四)には『聖霊に感ぜざれば誰もイエスを主なりと言ふ能はず』とあり、キリストが私共の救主であるという確信は聖霊によつて與えられるものであつて、理論や理窟からは出て來ない。聖霊の來る時

我につきて證せんとイエスの仰せられた通りである。

又二千年前の歴史的人物であつたイエス・キリストが現在の私共に、活ける神の子としてはたらき給うのは聖靈のちからによるのである。キリストがこの世に在る間は神の靈がキリストの上にはたらき、弟子たちはキリストと偕に生活することによつて凡てが滿たされたのであつたが、キリストがこの世を去つて後はその代りに聖靈が與えられ、永遠に變らざる人格として私共に語り、私共のために祈り執成し、私共に命令し、また證言をなし奇蹟を行い、教會を指導し給うのである。使徒行傳は別名を聖靈行傳と言われている程聖靈の人格としてのはたらきを數多く記している。聖靈はその本質からみれば一つの人格であるということが明かである。

**聖靈のはたらき**　聖靈のみわざはキリストと私共とを結合することである。即ち聖靈を受けこれを宿すということはキリストを私共の中に宿すことであり、私共がキリストに居ることであつて、キリストの生命をさながらに自分のものとなすことである。

聖靈は眞理の靈として私共にはたらく。『眞理のみたまきたらん時なんぢらを導きて眞理を悉く悟らしめん』。(ヨハネ一六ノ一三)。とキリストは仰せられ、また『我は道なり、眞理なり、生命なり』と言われたのであるが、このキリストを私共に教え示し、またキリストの言われた事を思い出さしめるのは聖靈である。まことに愚かな私共に、罪と神の愛と來世のこととを教えたのはキリストをおいて他にない。この聖書に示された眞理を私共に解き明かすものは聖靈である。それで使徒パウロはコリント前書第二章において次のように言った。『我らは奥義を解いて神の智慧を語る。それは隠れた智慧であつて神がわれらの榮光のために世の創造の先から豫じめ定め給うたものであつた』と。

聖靈は神の遠大な救の經綸とその眞理を教えるばかりではなく、私共の日常生活に於ける道德的判斷をも與えてくれるのである。私共は聖靈に教えられて善と惡とを識る。私共が善惡の判斷において惑うのは聖靈から遠ざかつているからである。聖靈から遠ざかる時に人は墮落するということを私共は知らなければならない。聖靈は眞理の靈であり智慧聰明の靈である。故にパウロはまた「兄弟よ智慧に於ては子供ゝなるな、惡に於ては幼兒となり、智慧に於ては成人となれ」とすゝめている。

**死より生への轉換動力**　次に聖靈は私共に生命を與える靈である。私共の現實生活を前にして考えると、その生命が缺陥だらけであつて、生きつゝあるというよりは寧ろ死しつゝあるということを知る。永遠の生命を思わせるものは何所にもない。斯うした中にあつて我は生命なりと宣言されたのがイエス・キリストであつた。キリストは「我言をきゝて我を遣はし給ひし神を信ずるものは永遠の生命をもち、死より生命に移れるなり」(ヨハネ五ノ二四)と仰せられるのである。聖靈が我らに與えるのはこの生命即ちイエス・キリストである。聖靈はキリストを我らの中に住わせ、キリストは聖靈によつて我らの許に來り我らと住處を共にせられるのである。このことに於いて我らの生活は永遠の生命を有つキリストの生活となり、キリストが我らに代つて惡とたたかい、我らに代つて勝つてくれるのである。そうして我らの裏にキリストのかたちが出來てゆき、信仰が完成し、永遠の生

命が成就するのである。

第三に聖靈はこれに從つて歩むものに多くの善き果をむすばしめる。キリストは『我はぶどうの樹、なんぢらは枝なり、人もし我に居り、我また彼に居らば多くの果を結ぶべし』(ヨハネ傳一五ノ五)と仰せられているが、聖靈によつて私共がイエスに接がれ、イエス・キリストの生命を私共のものとする時に始めて多くの果を結ぶのである。パウロはガラテヤ書第五章において『御靈の果は愛、喜悅、平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制なり』(二二節)と言つている。

聖靈の大いなるはたらきとして以上のような三つのものを聖書は我らに教えているのである。そしてキリスト信者は信仰生活に於て聖靈のはたらきが聖書に記されている通りであることを現實に體驗するのである。

## 三位一体に就いて

イエス・キリストは弟子たちに對する最後の教訓として『汝ら往きてもろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。』(マタイ傳二八ノ一九)と言われたが、この父と子と聖靈の三つに就いて後になつて所謂三位一體の教義が樹立されるようになつた。勿論新約聖書には父なる神と、子なるイエス・キリストと、聖靈の三つに關しては記されているが、三位一體ということは言つてない。新約聖書はただ唯一の信仰を以つて父と子と聖靈とを信ずべきであるということと、父と子



と聖靈とが唯一の神であるということとを明かにしめしているだけである。この教義が確立されるためには多くの論爭がなされ、教會も決定的な判斷を下さなかつたが、アウグスティヌス(紀元四世紀の聖者)によつて更に一歩をすゝめられた。後にこれは宗教改革者等によつても受けつがれた。

アウグスティヌスによれば、神の三つの人格には時間的なあるいは場所的な區別はなくこの三つの人格は同等であつてまた永遠の存在である。萬物が造られたのは、或る物は父なる神により、ある物は子により、あるものは聖靈によつて造られたのではなく、萬物は悉く三位の人格をその創造主と仰いで存在する。又人間は神の子及び聖靈なくして父なる神によつてのみ救われるのではなく、父なる神及び聖靈なくして御子によつて救われるものでもない。又父及び子なく唯、聖靈に依つてのみ救われるものでもなくて、父、子、聖靈の唯一なる眞の永遠なる神によつて救われるのであるという。又彼は三位一體の像は人間の性質の中に見ることが出來るという立場からその祕義を説明しようとした。『愛といふ概念の中には三位一體の像がある。愛は常に三つのものを含んでいる、即ち愛そのものと、愛する者と、愛せらるゝものとこの三つである』とも言うのである。

使徒パウロはコリント後書の最後に『願はくは主イエス・キリストの恩惠、神の愛、聖靈の交感(まじはり)、なんぢら凡ての者と偕にあらんことを』と記してをり、これは今日の教會において常に用いられる祝禱の言葉となつているが、私共は主イエス・キリストの恩惠によつて神の愛を知り、聖靈の交感によつて信仰生活を完成して行くのであつて、私共としては初代の教會の信者と同じように、イエス・キリストの人格に接し、父なる神を仰ぎ、絶え

す聖靈の導きを受けて信仰が深められ、救を經驗すればそれが何よりであり、その經驗のうちに於いて、この三つのものが一つであると悟ることが出來ればよいのである。

## 神の言としての聖書

新約聖書を何う解釋するかと問えば人によつてその答は違うであらう。或人はキリストの傳記と考え、或人はキリストの格言集と見、或人はキリスト教の神話傳說と云い、或人はキリスト教の經典と答えるであらう。聖書は人によつて記されたものであるが、それは單なる文學ではない。又單なる格言集でもなく、歷史でもない。勿論神話や傳說ではない。

新約聖書は端的に言えば、神がその中に自らを顯わし給いしものである。聖靈に動かされた使徒が神の啓示即ち神の言を記したものである。故に聖書はキリスト教の據て立つ權威である。そもそもキリスト教は何を據り所とし何を權威として立つているかと言えば、ロマ・カトリック教會(舊教)とプロテスタント教會(新教)とでは解釋がちがう。

カトリック教會にあつては、權威は法皇にありとする。聖書は教會の傳承(言い傳え)と同じく、教會の教義の基礎となるものである。そして聖書の正しき解釋は教會によつてなされるとするのである。然るにプロテスタントにあつては、權威は聖書にありとする。神の言は聖書により示されて居り、聖書こそはキリスト教の據つて立つ唯一絕對の權威であるとなすのである。

一體新約聖書はキリスト昇天後使徒たちの活動によつて、教會が成立した後に記されたものであるから、教會が先で聖書は後である。しかし聖書は單なる歷史の記錄ではなく、神がその御子を降して人の罪を贖い給うたという事實を使徒たちが靈感によつて錄したものである故に、私共は聖書を通じて神の言、即ち救主イエス・キリストに接することが出來、又聖書を通じて聖靈の働きを受けて信仰に入ることが出來るのである。この意味に於て、プロテスタント教會は聖書を以て神の言として絕對の權威とするのである。

聖書は神の言を記したものとすれば一點一劃も誤りはないかといえばそうではない。作者の私見も入つているし、舊約聖書よりの引用句の間違いもあるが、全體としては神の言を誤りなく傳えている。私共は聖書を讀む時には、他の書物を讀む時の樣に理性のみに賴らず聖靈の助けにより、信仰によつて讀まねばならない。かくて神の言は誤りなく傳えられるのである。

神の言としての聖書の何たるかは、ロバート・ウイリアム・デールの語によつて最もよく云い現わされている。『新約聖書を讀む場合には、そこに讀まれた眞理がそれ自身の光を以て輝く。余はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネを忘れ、顏と顏を合せてキリストを見る。余は彼の聲を聞き、驚異と喜悅とを以て滿される。余は聖パウロを忘れ、キリストの故に、又神の故に自由に余を義となし、永遠の生命の賜を許し給いし限りなき恩惠に對して感謝を以ておのおのく。新約聖書の記者が無謬であるかないかは問題にならない。彼等が余に眞理を告げる時、

余はそれが余自身のものであることを知る。」

# キリスト教の人間觀

哲學のあらゆる問題は「人間とは何か」という問題に歸着するとカントはいうているが、この問題は哲學のみならずキリスト教に於いても亦、最も古くして又最も新しい問題である。事實現代程人間に就て種々のことが言われている時代は曾てなかつた。又人間が現代に於いて特に問題にされているのは現代が却て人間の何であるかを知らないからであるといわれている。

**人間とは如何なる存在か**　現代の一般人は、人間とは自然の一部であり動物の一種であると考えている。この考方に徹底すると人格の尊嚴も道德の存在も便宜的なものとしか考えられず、更に人間の生命、靈魂というものも動物的なものとして扱われるようになる。一體人間は鳥獸虫魚と同じ生物であり自然の一部であると考えられるか、それとも人間は「萬物の靈長」であり、自然の上に立つものであるか。成程私共が人間を觀察の對象として研究して行くと、生れること、死ぬこと、生活すること、殖えることすべて生物界の法則に從つて居り、確かに人間は生物の一種であり唯少しく他のものより高等であり複雜であるに過ぎない。認識の對象としての人間は確かに自然の一部である。



しかしひるがえつて、この天地宇宙を觀察し、解釋し、又己れ自身を反省し道德的行動をなすところの人間を考えて見るならば、人間は決して自然の一部ではない。

善を追い求め惡を避けようとする意志は人間特有のものであり、天地宇宙の創造主、支配者たる神を拜みこれに祈ることは人間にだけしか出來ぬことであり、人間は全生物及森羅萬象を代表して神の祭を行う。この意味に於て人間は宇宙の祭司である。肉體的に見るならば人間は生物の一種であるが、靈的に見るならば人間は宇宙に於て最も高い位置を占めるものであり、宇宙の冠である。

**神に象どられしもの**　以上の豫備知識を以てキリスト教に於て人間を如何に見るかを考究しよう。創世紀第一章二十六節以下には次の樣に記されている。『神言ひ給ひけるは我らに象どりてわれらの像の如くに我ら人を造り、これに海の魚と空の鳥と家畜と地にはふ所のすべての昆虫を治めしめんと、神その像の如く人を創造り給へり。』

これを讀んで神話と思う人は考えが淺いのである。之を文字通りにとらずに、こう言う表現をした人の思想、信仰を考えると、そこに深遠なものがあるのである。

神が己れの像の如く人をつくり給うたと言うのは、人間の外形が神に似ているというのではなく、その道德的性格に於て、その精神に於て、その靈に於て、神に似ているという意味である。他の生物は神のつくり給うたもの一あるが、神には似ていない。獨り人間だけが神の像をもつて居り、又すべての生物を神に代つて治めて

いるのである。詩篇の第八篇四節以下に『世の人は如何なるものなればこれをみこゝろにとめたまふや、人の子は如何なるものなればこれを顧みたまふや、只すこしく人を神よりも卑くつくりて榮と尊貴とをかうぶらせたまへり』とある。人間は神に似ているが、ただすこしく神よりもひくくつくられたものであつて、人間は神に肖た靈性を持つていることを謳つているのである。而してこの思想は洗練されて舊約聖書の預言者たちによつて人間は神の子であると自覺されるに至り、キリストによつて、これが最も徹底的に、且つ明確に解明された。實にキリストは人間の價値に就いての新しい發見をされ、これを私共の前に提示されたのである。『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。然れば人の子は安息日にも主たるなり』（マルコ傳二ノ二三）『人の子は羊よりも優ること如何ばかりぞ』（マタイ傳一二ノ一二）以上の言葉はその時々に應じてキリストの口よりほとばしり出たものであるが、それらの何れにもまさつて私共の心を強く衝くのは『人全世界をもうくとも己が生命を損せば何の益あらん、人その生命の代に何を與へんや』（マルコ傳八ノ三六）と仰せられていることである。人間は神の子として大いなる價値をになうものである。神の子としての人間の價値は他の生物全體とはその價値においてかけ離れて尊いのである。この樣にキリストによつて神の子として大きな價値をになうこととなつた人間は、その可能性において神の子であるが、その現實性においてはむしろ失われた人間である。この失われた人間としての現實を神の子たらしめるには私共は信仰によらなければならない。天の父なる神の權威を認め、これに全き讃遜を以て信頼しなければならないのである。

**人間は何故罪を有つか**　使徒パウロやアウグスティヌスにとつては、人間の問題は即ち自己自身の問題であつた。彼等はこれを單なる客觀的な觀察や一索によつて解決しようとはせずに、自ら人間として切實に惱み、靈と肉とのたたかいを自分の裏に繰返して經驗し、その體驗を通して人間の何たるかを悟り、遂に神による救を得たのであつた。ロマ書第七章第八章に記されているパウロの體驗、『懺悔錄』（告白）の中にあるアウグスティヌスの經驗が即ちそれである。

人間は神によつて、神に向けられて造られたものであつて、人間は生れながらにして神を讃美しようとする心をもつている。『われ中なる人にては神の律法を悅べど、わが肢體の中に他の法ありて、我が心の法とたたかい、我を肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る』（ロマ書七・二二―二三）『善をなさんと欲する我に惡ありとの法を我見出せり』（同　七・二一）というのが彼らが自己自身の中に見出した人間像であつた。神の律法を悅び、神を慕う心が痛切であればある程他方に於いて罪にひかれる力の強いことを識つたのであつた。この矛盾に彼らは惱みつづけたのであるが、この人間の自己分裂は神よりの離反と相俟つて、人間の喪失という結果をもたらしたのであつた。

神によつて創造されたものはすべて善である。人間も亦神によつて造られたものとして本質に於いて善である筈であるというのは、神の創造を信ずる彼らの動かすべからざる信念であつた。この神によつて善なるものとして造られた人間が罪の中にあつて苦しむのは、神から離れたからである。人間が生命の根源である神から離れた

ときに、その狀態を罪と言うのである。神から離れた人間は神を愛する代りに自己自身を愛した。この自己を愛するということが罪の根本原理であるということをアウグスティヌスはその體驗によつて識つたのである。

**神による再生の必要**　人間はその創造のはじめから神なくしては生きることが出來ない。如何に純潔であり、自由であるとしても、あるいは又墮落しなかつたとしても人間は神に倚り頼むことが絶對に必要であつた。まして神から離れては善を行う力を無くし、またこれを意志する能力をさえも失つてしまつた現在の狀態に於いては、神の恩寵なくしては何も出來ない。人間を造り給うた神がその恩寵によつて再びこれを造り更えることによつてはじめて本來の像が人間に恢復されるのである。キリスト敎に於ける人間というのは神の恩寵によつて更新された人間のことである。

このようなキリスト敎の人間觀に立つて私共は始めて人間をめぐつている種々の問題を解決して行くことが出來る。人間はその肉體に於いてはまことに弱くて力のないものであり、しかもその上に外部から樣々の苦惱が押しよせて來るのであるが、この場合にもキリスト敎の信仰は人間の靈魂が神によつて堅固に守護されていることを確信する。キリストは『我が友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも爲し得ぬ者どもを懼るな、おそるべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナ（地獄）に投げ入るる權威あるものをおそれよ。われ汝に告ぐ、げに之をおそれよ。』（ルカ傳一二ノ四）と仰せ給うて惡の力が暴威をたくましくして私共の身體を殺すようなことがあるかもしれないが、それは少しもおそるるには當らない。唯、權威ある神をのみおそれ畏むべきであると敎え給うたのである。又その他の苦難や、人間性に基く悲劇も、信仰さえあれば、それが常に人間の道德的訓練として、或は愛のための犧牲として意味のあることが理解されるのである。

又業（ゴウ）とか宿命とか言うて如何ともすべからざるものと考えていた問題が解決する。キリストのところには惱み苦しみをもつ人々が集つたが、キリストにより救われざる者は一人もなかつた。生れながらの盲人は己れの罪によるか親の罪によるかとの弟子の問に對しキリストはそれを否定し『神の業の彼の上に現れん爲なり』と仰せられ彼の眼を開き給うた。（ヨハネ傳九ノ一以下）愛の力は宿命を打破する。信仰はすべての苦惱を克服する。たとえ苦惱は存續するも『神の惠我に足れり』（コリント後書一二ノ九）としてこれを負うて行く力を與えられる。

人が神の子なりとの自覺をもち、靈魂の價値を無限に高く評價した時は、キリストの如く愛と犧牲の精神に生きるに至る。キリストの弟子たち、その後の信仰の勇者たちは皆この精神に生きた。愛の爲に苦痛を忍び犧牲の生活に喜びを見出して行くことに於て私共は人間たるの價値を發揮するのである。

**滅亡の僕か神の子の栄光か**　凡てのものに優つて人間が榮と尊貴とをかうぶらされているというキリスト敎の人間觀はまた宇宙の萬物が人間によつて始めてその創造の意義を全うされるという結論を生む。パウロはこれに關して『それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ、造られたるものの虛無（むなしさ）に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり。然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる狀より解かれて神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり、我らは知る。すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、と

もに苦しむことを」（ロマ書八ノ一八）と言うて人間の救によつて宇宙の完成も亦成就することを說き、自然界も人間の救のために共に嘆き、共に苦しみつゝあることを敎えている。神によつて創造された自然界は單なる物質の世界として價値なきものではなくて、それは神の榮光をあらわし、その美と、その眞と、その法則と秩序とをもつて人間の倫理生活を導き、これを援助し、訓練して神の國の實現を待望しているのである。

茲において明かなことは人間の靈魂は單なる物質によつて構成されているものではなく、物質から獨立して存在しているものであつて、人間は物質的、自然的諸條件によつて決定されるという唯物論者たちの主張する樣なものではないということである。むしろ反對に人間の靈魂によつて自然的世界の方向が決定されるということである。キリスト敎の人間觀においては唯物的な考えは斷然排擊される。唯物論的な思想に伴う虛無思想はこの人間觀によつて完全に克服される。文化の問題に就ても同樣である。世界とその文化のよつて立つところは物質的諸條件にあるのではない。唯物論者たちは人間の意識生活やその文化が物質的條件や制度によつて決定されるという。それらは單なる世界と文化を動かす條件の一部として力をもつが、文化を創造するものは人間の生命である。この生命があるからこそ人間に價値と尊嚴があるのである。

然し人間の生命の價値は既に述べた樣に、そのあるが儘の狀態において價値があるのではない。卽ちキリストによつてもたらされた神の恩寵の下に全く謙遜になることによつて、神を禮拜し、神を讃美し、神の榮光をあらわし、倫理的な責任を遂行して行くことによつて眞の價値を與えられるのである。



# 罪と救とに就て

## 罪とは何か

私共の常識では罪といえば盜みをしたとか人殺しをしたという樣な犯罪が頭に浮ぶ。社會の安寧秩序を紊す行いで、刑法に定めてあるものが罪である。次は私共がよく日常の會話で「そりや罪だ」などという時の罪で、弱い者をいじめたり、人を裏切つたり、人の心を傷つけ、人に不幸をもたらす樣なことをすることであり、道德に背くことである。こういう罪は人の行いである。

ところが罪についてもつと突込んで考えて見るに法律上の罪を犯し良心に背く行いをなすのは人間の性質のもつと深いところに原因がある。その根本的な原因までさかのぼつて罪の問題を論ずるのがキリスト敎における罪の問題である。この根本的なものを論ずると、こゝに亦四つの考え方がある。

人間は完全なものにたろうと努力する。そのため善いことと惡いこととを選んで善いことを行うように努め

る。ところが悪いと知りながらその悪いことを行つてしまう。それは人間が完全なものになり切れないからであり、人間性の不完全なところが表に現われて悪い行いとなる。この見方からすれば罪の根本的なものは人間の不完全性にあるということになる。もう一つの考え方は進化論の思想に基く。人間は下等動物から進化して來たが、まだ獣性を脱け切らない。人間のうちに残つている獣性が行いに現われるとき罪となる。從つて罪の根本的なものはこの獣性であるという。第三の考え方は、人間の社會を研究して見ると、一人一人の人間とは別に社會的な惡の力があり、これが人間を誘つて惡事をさせる、また一人が惡事をすると他がこれを見倣うため惡が傳染して行くと見る考え方であり、この社會惡の力を罪と呼ぶのである。第四の考え方は實驗的觀察によつて罪を說明しようとするものである。人類の道德的發展の歷史を研究すると習慣から法律が出來、それから更に高い道德が發展したことがわかる。人間が生れながらにもつている衝動を滿足せしめようとする自然の本能に對し、これを判斷し、惡いと思うことを斥け善いものを選擇するところの良心が目ざめる樣になつて、玆に罪の意識が明かになり、自然の本能に盲從しないで道德的理性に從つて選擇をする樣になる。この選擇に失敗する時これを罪と言うのである。

こういう見方には一面の眞理があるがキリスト教にあつては更に深く突込み、罪とは神への背叛、神に從わぬことであるとなすのである。人は神の像の如く造られ神に從わねばならぬものである。然るに人は神を知らず、信ぜず、愛することが出來ぬ。神から離れてこの世と己れとを中心として生きようとする。この性質と傾向が罪で



ある。この根本的な原因から罪惡が生ずる。そしてこの罪は程度の差こそあれ、全人類に普遍的なものである。

**キリスト教罪惡觀の根底** この樣な深刻なキリスト教の罪惡觀の基礎をなすものは、云うまでもなく、神に對する罪、卽ち純粹に宗教的なものである。第一のそして最大の罪は神に不從順なる事、神から離れることである。神に叛き、神に對して自己を固執することから凡て、の罪が派生して來るのである。紀元前第八世紀から第六世紀に亘つて活躍した預言者たちは、宗教と道德との密接な關係を認め、罪の觀念を深く掘り下げた。神の選民としての自覺を有つていたイスラエル民族は特別な神の恩寵が與えられると考えた。預言者たちは此考え方を排して、不義は神の民といえども不義であり、罪であつて、これはどこまでも神に罰せらるべきものであると叫んだ。かくて神に對する不義、卽ち罪とは神の意志に對する反逆である。又神に對する信仰の缺乏が罪であると考えられるようになつたのである。更にその後罪の觀念に三つの特色が現われた。第一は神の意志を明かに示すものは律法であるから、この律法を犯すことが罪である。第二は罪を個人的な幸福と關連して考えるに至つた。義しい者は樣々な禍や死をまぬがれる。義しいことは、義しさとは何かをよく知つているものによつて行われ得るものである、故に義とは智慧であり、善とは聰明を意味するが、罪とは愚かさに由來するというのである。第三は偉大な預言者らの觀念を繼承するもので、神は從順を求め給う。罪とは神に對する內心の反逆であつて人が眞に悔改める時にのみ神は罪を赦し給うと言うのである。かゝる預言者たちの深刻な罪觀念をもつイスラエルの中より現われ給うたキリストは人間の罪の問題を特に重要視された。しかしキリストは預言者たちより遙かに高

い見地に立つて罪を考え給うた。それはキリストが罪に關し述べられる場合人間の價値を無限に高く評價されたことである。人間の價値が高ければ高い程それをそこなうもの、それを卑しくするものとしての罪を排斥し、憎惡された。そして一人の罪人の悔改める時神の前に大いなる喜びのあるべきことを說かれた。キリストは罪とは何かに就て概念的に示し給わなかつた。唯個々の場合に對して深い洞察を行い、これを具體的に示された。

**赦される罪、赦されぬ惡**　キリストはこの現實の世界に於て人間の罪は普遍的なる事實であると認められ、凡ての人に悔改めを求め給うた。凡ての人が神の前に負債を負うものであることを屢々敎えられ、兄弟の過ちのみを認めて自分の非を認めないものを凡て惡として『もし汝らおのおの心より兄弟を赦さずば我が天の父も亦なんぢらに斯くのごとく爲し給ふべし』（マタイ傳一八ノ三五）とも言われている。

斯くの如くキリストは凡ての人に罪があることを認められたが、凡ての人が皆同一に罪深きものであるとせられたのではなくて、それには大小輕重の程度の差を認めてをられた。又キリストは人間の性質が全く墮落してしまつているとも考えられなかつた。イエスはその鋭い靈的な洞察を以つて最惡の人間中にも善の芽のあることを見出されたのであつた。更に又幼兒の極めて自然なそして單純な性質の中に善きものを認め給うてこれを信仰の型とされ、隣人に對する憐憫は自然な人間性に根ざしているものであるがこれを義しく、善なるものであるとされたのであつた。而してキリストは善人と惡人とを機械的に區別し給わなかつた。當時の人々から罪ある人々として卑められていたものも、キリストにとつては必ずしも罪人ではなく、善人とされていた者が必ずしも善人で



はない。又キリストによれば、人間は全く善人でもなく、全然惡人、罪人でもなく、二つのものが混り合つている。故に世に於いて全く棄てられた罪人も、その何所かに救を與えられる端緒となる善きものがのこされていることを直感的に認め給うて、これに救の道をひらかれたのであつた。たとえば、悔改めの心とか、全き服從とか、救を求むる熱心さとか、その他樣々のよきことを、それが極めて小さな、多くの人には氣の付かない樣なものであつても、キリストには救を與えられる大きな契機とされたのであつた。

新約聖書において最も大きな、そして赦さるべからざる罪は、聖靈をけがす罪であるとされている『人の凡ての罪とけがしとは赦されん、されど御靈をけがすことは赦されじ、』（マタイ傳一二ノ三一）　この御靈をけがし、聖靈に逆う罪というのは、キリストの恩惠の行爲を神から來たものとせずして、惡魔から來るものとする瀆神の行爲である。惡を善とし、善を惡とするもので、善に對する感覺を失つたもののことで、これは全く絶望的なものであるというのである。他の罪はこれを恢復することは比較的容易であるけれども、これは赦さるべからざる罪であるとされている。

キリストは又罪を父なる神と密接な關係において敎えられている。罪というのは父なる神の律法に背くこと、神より以上にこの世を愛してこれを選ぶこと、神に對する不從順又神と人とに對する利己心である。ここに罪が外部に現われた行爲の結果ではなく、人間の內部の心の狀態として考えられている。キリストがこの樣に罪を內部生活の問題とせ　れたことは、當時の宗敎家・學者達がこれを內面的に見ないで、外部的行爲と見たことに對

して、罪の本質を示されたものであつた。又これによつて、當時罪を人の職業とか身分に附隨するものとなすあやまつた考えを打破された。例えば取税人とか遊女とかは殊に罪深きものとされ、異邦人は異邦人の故に罪人であるというように決められていたのであつたが斯るあやまてる考えるに對してキリストは『まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは信じたり』（マタイ傳二一ノ三二）と仰せられた。

、取税人と遊女とは汝ら　先だ　て神の國に入るなり、それヨハネは義の道をもて來りしに、汝らは彼を信ぜずかくの如く人間の罪についてのキリストの教は恩惠と救の希望にみちたものであり、すべての罪は神によつて滅ぼされ人間の救わるべきを示している。

**パウロは罪をこう観る**　キリストの弟子たちの中で罪について最も深刻に考えたのはパウロである。彼が罪について深く考えるに至つたのはイエス・キリストを知つたためである。キリストの人格がだんだんわかつて來ると、私共人間はキリストの如くありたいものだと云う心持になるが、さて努力して見ても到底出來ない事である。こう云う境地をパウロは『我が欲する所の善は之をなさず　反て欲せぬ所の惡はこれをなすなり。我もし欲せぬ所の事をなさばこれを行ふ　我にあらず、我が中に宿る罪なり』（ロマ書七ノ一九以下）　と言い表した。パウロにして尚罪のためにこれ程惱み、遂に『其の罪人の中にて我は首なり。』（テモテ前書一ノ一五）　と歎するに至つた。

この様な深刻な惱みを經驗したパウロは罪に就てどう考えていたかと云うと先ず彼は罪とは人間を支配してこれを誤らしめる力と見た。このことを私共に示すものは神の律法であつて、律法のないところには罪を犯すということもない。律法はユダヤ人が神から與えられたものであるが、他の人々にあつては良心が即ち律法であるというてをり、律法及良心によつて凡ての人が罪の下にあることを說いている。

この罪の結果として人間に死がもたらされた。ここで死とは靈肉の消滅を意味せず、靈魂が永遠の苦悶の狀態におかれることを意味する。パウロは凡ての人が死なければならない運命にあることから人間の罪が普遍的なものであるということを證明しようとしている。（ロマ書第五章）しかして全人類に死をもたらしたところの罪はどうして人間の中に入り込んだかという所謂罪の起原の問題を取上げ、パウロは次の様に言うている。『それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり』（ロマ書五ノ一二）　人類の祖先アダムと其の子孫である全人類との間にはつながりがあり、アダムの墮落によつて人間に罪を犯す傾向が傳わつたというのである。パウロは、この思想を、キリストによる救との關連において述べている。一人の人アダムによつて死がもたらされ、一人の人キリスト即ち第二のアダムとも云うべきキリストによつて罪の赦しがもたらされたというのである。

**原罪論とはどういうものか**　創世記の始めにある様に、人類の祖先であるアダムが神によつて創造せられた時には全く罪がなかつたのであるが、誘惑に負けて神より與えられた自由意志を濫用し、神に反逆してから後、この罪は引續いて人間の全部に遺傳して來た。だから人間は生れ乍らにして罪人である。これは人間の生來の運命づけられた姿である。

原罪論に接して私共の感ずることはその理論よりも、人間の罪をこの様に深く感じた人の信仰である。彼らは神の子キリストの人格に己れを比べ人は生れながらにして罪ありとの結論に達した。キリストの教はこの前提に基くとき其の意義が一層深くなる。パスカルは之について次の様に言つている。『この原罪の教義のように私共の心を亂すものはない。しかしながら最も理解し難いこの神秘なくしては私共は自己を理解することは不可能である。私共の存在の謎はこの深き淵に於て紛亂する。しかしながらこの神秘が私共に理解が出來ないというよりはこの神秘なくしては人間は一層理解し難いというべきである』

**罪より救うものは誰か**　罪は元來宗教的なものであつて、一言にして言えば聖なる者の前に立たしめられた時に感ずる人間の魂の自己意識である。漁師ペテロはキリストの御言に隨つて網を下し、おびただしき魚を得た時、イエスの膝下に平伏して『主よ我を去りたまへ、我は罪ある者なり』と言うた。（ルカ傳五ノ八）こうした罪の意識は端的な神の聖を犯したという直觀から來るものであつて、神聖なるものに對する冒瀆の感情である。キリスト教に於ける罪惡というのは神の意志に對する無頓着なこと、神の意志に對する反逆である。生活に神なきこと、神を信ぜざることが罪なのである。神によつて創造された人間が、神から離れて自己自身によつて生きることと、神とこの世とをおきかえることが罪である。故にルツターは不信仰が凡ての罪の源泉であり不信仰よりも大きな罪はないとさえ言つているのである。

罪に關する理論は以上で略述したが、私共が現實の社會を觀察し又世界の情勢を見るときに、人類を滅びに向



わせる力の存在することを見出さずにはいられない。個人々々の考えを尋ねれば皆平和を求めているのに現實は戰爭へ戰爭へと向つて行く。又個人の生活に於ても自分の行動はかくあらねばならぬと思うのに、實際にはそれに背いて惡に走つて行く。この有樣を見ると、そこに何か深い原因のあることが分る。もし仰いで神を見るならばこの根本的原因が罪にあることを知るであろう。この罪より個人を救い人類を救うものは何か？それはキリストの十字架である。

## 救とは何か

罪ある人間が神より罪を赦されて義しき者とされ、永遠の生命を與えられて神の御旨に從つて人生を送り、死後神の御許に至つて限りなき幸福を與えられる。これが救である。そしてこの救の事業はイエス・キリストによつて成しとげられた。その事業の中心をなすものは十字架である。

**十字架は救の絶対要件**　イエス・キリストは十字架の死により人間の罪をあがない、救を全うしたと云うことはキリスト教の根本義であるが、現代人がこれを理解するには色々と困難がある。この困難を解決するために二つの問題を提起しよう。第一はキリストは止むを得ずして十字架につけられたのであるか、それとも進んで十字架の道を選び給うたのであるか。第二はもしキリストの十字架なかりせば、人類の歴史はどうなつていたであろうか。

第一の問題について云えばキリストは進んで十字架の道を選び給うたので、反對黨に迫いつめられ、捕えられていやでも應でも處刑されたのではない。マタイ傳第十六章第二十一節には『この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己れのエルサレムに往きて長老、祭司長、學者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日目に甦るべきを示し始めたまふ。』とある。又キリストは荒野に於て誘惑と闘われ、この世の榮華と權力とを拒否して神にのみ仕えまつる決意をされた時から、十字架の道を選んで居られた。エルサレムに祭の爲禮拜に上つたギリシヤ人がキリストに會見を申込んだ時、キリストは『一粒の麥地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。もし死なば多くの實を結ぶべし。』と答え會見を拒まれ、十字架の死を通して後ギリシヤ人に到るべきを暗示し給うた。ゲセネマの園で、苦惱のうちに祈り給い、御意のままになし給えと仰せられたのは十字架の苦しみを受くる心のそなえをなし給うたのであつた。又敵に捕えられる時も、その大能を以てすれば敵を粉碎できたにも拘らず預言の成就するために、進んで縛におつきになつた。殊にマルコ傳第十章四十五節にはキリストが弟子たちに向つて次のように述べておられる。『人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與えん爲なり。』以上によつてキリストが十字架の道を自ら選んで進み給い、十字架の死によりその御事業を完成せんとし給うたことがわかる。

第二の問題に對しては次の如く答えることが出來る。もしキリストが十字架の死を遂げ給わず、單に傳道だけの事業をなして世を終つたとしたならば、キリスト教は成立しなかつたであろうし、人類の歴史は別なものにな



つていたであろう。つまりギリシヤ・ローマの文明に對して大きな力を振い歐洲の中世を動かし現代に至つたキリスト教と云うものは存在せず、奴隷文明と現世主義とが世界をもつと強力に風靡していたことであろう。人類の世界を混亂と頽廢から救い、これをもちこたえて來たのは十字架の力であつた。

然らばキリストの十字架の死は如何なることを意味し如何なる效果をもつか。先ず神の義と云う方面から考察してみよう。神は義しき方である。神の創造し支配し給う人類の世界には嚴肅な道德的秩序がある。この秩序が破られたまゝに放任されることを神は欲し給わない。もしこの秩序が破られるならば神は必ずこれを回復し給う

人類は神への反逆罪を犯している。これが因となつて諸々の罪惡が生ずる。かくて神の創り支配し給う世界の秩序は擾亂される。神は聖なる怒を發し給う。神は之を放任し給わない。此處に神の審判がある。義しき神は義をもて世を審き給う。しかしながら全人類を神の審判廷に引出し之を審くことは混亂を生ずる。こゝに於てこの混亂なしに人類の罪をつぐない、神の義を全うし、神の聖なる怒を和げる道が必要となる。キリストは人類の罪を負うて十字架につきその御苦しみによつて人類の罪をあがない、神の義を全うし給うた。神の聖なる怒はこれによつて和げられ、人類世界の秩序はこれによつて回復されたのである。

神はキリスト出現に至る迄人類の罪を見すごし給うた。しかし最早放任し難くなり、御子キリストを下して罪をあがなうという御業を成し給うた。

**犧牲は何を意味するか** 玆に疑問となるのは何故にキリスト一人が十字架にかゝり給うたことにより萬人の

罪のあがないがなし遂げられたかと云うことである。この疑問を解決するには二つのことを理解する要がある。

その一つは犠牲と云うことである。犠牲とは動物を殺して神に供える儀式を謂う。この犠牲の意味は、人間が罪、咎、汚れをもつて居り、神はこれを怒り給う故、神の前に犠牲をさゝげて神の怒をなだめる。更に進んで人間の罪のために祭壇の上で動物が殺され、その血を流すことによつて人間の罪があがなわれると言う考である。これには最も深い宗教的意味がある。

更に第三の問題として世の中の實生活における犠牲を考えて見るがよい。多くの人のため何人かの人物が苦しみを受ける例は澤山ある。子供たちのため母親が心身を苦しめる。その爲子供たちは成育する。この苦しみが犠牲である。もつと突込んで、犯罪と刑罰との關係を考えると、興味のある結論が出る。それは罪人と云う者は自分の犯した罪だけの爲に處罰されるのではない、多かれ少かれ他人の罪を負うているものである。彼は自分の罪は勿論のこと、親の罪、惡友の罪、社會の罪皆これを背負つているのである。それは彼に罪を犯させたのは彼だけの責任ではなく、これらのものが一緒になつて彼の犯罪の原因、動機となつているからである。彼が裁判所で處刑される時は、親の罪、惡友の罪、社會の罪も一緒に處分されるのである。

洗禮者ヨハネはイエスを見て「見よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」と言つたが、キリストは罪のけがれなき方であり、全人類の罪を負うて犠牲となり、神の前に人類の罪を清算し給うた。罪なきが故に全人類の罪をすべて負うことを得たのである。



今、キリストの十字架の前に立つて、靜かに我を省みてみよう。キリストを十字架につけたものは何か？それは人間が神の聖き愛に向つてなされた徹底的反抗であつた。「人々また叫びて言ふ「十字架につけよ」かれら烈しく叫びて「十字架につけよ」と言う」（マルコ傳一五ノ一三）ユダヤ人たちの叫びパリサイ人たちの陰謀、ユダの裏切、その他諸々の罪がそこに暴露されている。そして私共の心のうちに潜んでいるその同じ罪は共に暴露される。私共はこれをまざまざと見せつけられるのである。

**神の義と神の愛**　十字架を神の側より見るならば、それは人間の罪を審き給う神の峻嚴なる態度の表明である。神の義が人間に對して徹底的に主張される時、どうしてもそのまゝでは濟まされぬ。最大最高の犠牲なくしては人間はその罪より解き放たれることは出來ない。こゝにキリストが十字架に於て生命を捨て血を流すことによつて人の罪をあがなう御事業をなし給うたことがわかるのである。

次にキリストの十字架を神の愛と云う方面から考察しよう。神の子キリストの御一生は苦難と犠牲の生涯であつた。御自身のためには何等求め給うところなく、常に人を愛し人の苦しみを救い、世の中から罪人として爪はじきされた者や、人のいみきらう病人や、あれども無きが如き者として顧みられぬ人々の間に住み給うた。まことに人の子は枕するところなしと言う御生活をせられ、極みまで人を愛し給うた。そして遂に世の罪を負うて十字架にかゝり救の業をなしとげ給うた。十字架はキリストの愛の御生活のクライマックスであつた。

キリストの御生涯が神の人類に對する愛の現れであり、十字架はその極致であるということはルカ傳第十五章

第十一節以下にある放蕩息子の譬話によく示されている。

或人が二人の息子を持つていたが、弟は父に乞うてその財産中の分前をもらい、遠國に行つて放蕩に使いつくし、無一文となり、折から饑饉の爲、その日の食にも窮し、遂に他家の傭人となつて賤業に從事し、落ぶれはてた時、彼は初めて父のことを思い起した。そこで彼は父の許に行つて『父よ、われ天に對しまた汝の前に罪を犯したり、今より後、汝の子と稱へらるるにふさはしからず、雇人の一人の如くなし給へ』と言おうと決意し、故郷さして出發した。父は息子の家出した後にも片時と雖も忘るることなくその歸り來るを待つていたが、或日門口に出て見ると息子のうらぶれてとぼ〳〵と歸つて來る姿を認めた。父は走つて行きその頭を抱いて接吻した。息子は父に言うた。『父よ、我は天に對し又なんぢの前に罪を犯したり。今よりなんぢの子と稱へらるるにふさはしからず。』父は喜びにあふれ『とく〳〵最上の衣を持ち來りて之に着せ、その手に指輪をはめ、その足に鞋をはかせよ、また肥えたる小牛をひき來りて屠れ、我ら食して樂しまん。この我が子、死にて復生き、失せて復得られたるなり。』と。

神は子に去られた父の心持を以つて絶えず人間のことを心配し人間の爲惱み給うた。人間が悔い改めて父なる神のみもとに歸ることを待ち望んでいられた。遂に悲境のドン底にあつて人間が己が罪を自覺し悔い改めて父なる神の下に歸り來るなくば死にてまた生き、生きてまた得られたりと仰せられ、叛いた人間を我が子として受け



入れ、最上の榮譽を與えて下さるというのである。キリストの御一生は神の人間に對するこの愛をお示しになつたものである。神に背き去つた人間を神のみもとに呼び戻す爲に神は獨子キリストを世に下し給うたのである。

**愛は苦しみを伴う** まことの愛は苦しみを伴う。キリストの御一生は罪ある人間の爲、放蕩息子の父親が惱み苦しむが如く苦しみ給うた。私共は十字架の上に惱み苦しみ給うキリストを見て父なる神の深き愛を知り、己が罪を悔い改めて父の家に歸るのである。これが悔改であり救である。

十字架がなかつたとせば、神の人間に對する苦惱は十分に表明出來なかつた。神の人間に對する愛は全うせられなかつた。御子キリストの十字架の苦惱により神の愛は全うされ救は完成されたのである。

神の愛はこの樣に深いものであるから、私共が罪を赦されて神のもとに歸らせて頂くには他に條件は要らぬ。イエス・キリストを信ずる信仰さえあればよいのである。パウロは言つている。『すべての人、罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、功なくして神の恩惠により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるゝなり』(ロマ書三ノ二三、二四)

十字架によるあがないの恩惠は人間の側で求め神が之に應え給うたのではない。神の方から進んで人間を救わんとして爲された御事業である。私共人類が之を知ると知らざるとにかゝわらず、神はすべての人のため救の道を開き給うた。

そこでキリストの十字架は罪の赦ぎ切實に求むる者には救の能力となるが、そうでない人たちには理解の困難な問題であることは昔も今も變りはない。故にパウロは『ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。されど我らは十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。これはユダヤ人に躓物となり、異邦人に愚となれど、召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の能力また神の智慧たるキリストなり。』(コリント前書一ノ二三)と云い、又『それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。』(同一ノ一八)とも言うている。キリストの十字架は信仰を以てこれを仰ぐものにのみ罪を赦す神の恩寵としてはたらくのである。これを私共に現在の活ける力として經驗せしめるのは聖靈のはたらきである。信仰と聖靈とが、歴史的事實としてのキリストの十字架を現在のものとなし、又永遠のものとなすのであつて、これがなければ、即ち聖靈によつて生れた信仰がなければキリストの十字架の功德は私共に及ばないのである。

**永遠に続く十字架の功德** 次に歴史の一點をなすところのキリストの十字架が現在の私共にその功德を及ぼすのはどう言うわけであるかと云う疑問が起るが、人類の社會と言うものは個人個人バラバラの寄せ集めではなく、全人類集つて一つの體をなしているのである。身體の一ケ所が病めば全身が苦しみ、一ケ所が癒されれば全身が癒される。一人の人物がなした善行は一人ではすまない。次々に影響してよい果を結んで行く。一人の惡も亦それだけではすまない。次々に傳播して多くの人を害し世を損ねる。これは横の關係を言つたのであるが、縱の關係を見ても同じである。先祖の德は子孫に傳はり、前時代の罪惡は後世に影響する。つまり横から見ても縱から見ても人類と言うものは一體であり、過去現在未來を通じ全世界を通じ一つの體である。ここに人類社會の連帶性がある。ロマ書第五章十五節にパウロは『一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、まして神の恩惠と一人のイエス・キリストによる恩惠の賜物とは多くの人に溢れざらんや』という。千九百年前の歴史的事實は決して過去の事實ではない。信仰をもつて十字架を仰ぐものにはそれは現在の事實であり、我身、我が一身に關することなのである。次にキリストを信じ十字架の功德により罪を赦された時、人は如何なる狀態になり何を與えられるかと言うと、ヨハネ傳第一章十二節には『されど之(キリスト)を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となるの權をあたへ給へり』とある如く 新しき生命を與えられ神の子となるの資格を得るのである。事實キリストを信ずる樣になると人間の生活は一變する。要するにこの世に於ける束縛苦惱から解放されて如何なる場合にも祝福にみちた生活が出來る。これ即ち新生である。こゝに私共は救いの事實を見るのである。

**罪よりの解放と永生** 更に突込んで永遠の生命の問題となると救いの效果は愈々明かになる。ロマ書第六章二十二節には『然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる實を得たり、その極は永遠の生命なり。我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり』永遠の生命とはキリストを信ずることによつて與えられる私共の靈魂の新しき狀態である。信仰をもつ者は現在に於て永遠の生命をもつ。私共の靈魂は神の

恩惠を受けて現在より未來にかけ、死を超えて、完成に向て進み行くのである。十字架後、『神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦へらせ』（エペソ書一ノ二〇）給うたが、この神は『又その能力をもて我等をも甦らせ給はん』（コリント前書六ノ一四）とあるように私共は死に打ち勝つ力をキリストの十字架の恩寵によつて與えられるのである。ここにまた主イエス・キリストの仰せ給うた『われは復活なり、生命なり、われを信ずる者は死ぬとも生きん』（ヨハネ傳二一ノ二五）との御言は新しく私共の魂を打つのである。最後に『キリストの己を捨て給ひしは教會を潔め、潔き瑕なき尊き教會を建てん爲なり』（エペソ書五ノ二六）とパウロの記している如く、キリストの十字架の犧牲は罪をあがなわれし者の集ひである教會のためであつた。キリストの十字架による罪のあがないがなかつたならば私共は永遠に失われ、罪の當然の結果として永遠の刑罰を受けて呻吟しなければならなかつたであらう。

# キリスト教世界觀

## 神と世界創造

世界は如何にして成立したか、即ち世界の起原、宇宙構成の過程は之を科學に讓り、こゝでは神と世界とは如何なる關係にあるか、即ち世界の意義、宇宙の目的に付て說くことゝする。

創世紀にある天地創造の物語は世界が神によつて造られたものであり、その内にある凡てのものは善であり、それは神の力によつて維持され神の目的に從つて導かれていることを示す。故にイスラエルの歷代の預言者たちは神と世界及人間との密接な關係を說き、世界が神に依存すると言う信仰を强調した。

神は總ての物を造り給うた後、萬物の支配者として人間を造られたが、その目的は神の榮光を現す爲めであつた。すべての造られたものの中で、人間だけが意識的に神と交わりを有ち、神の子としての特權を與えられている。これは人間の人格的な完成によつて神の世界創造の全き意義が發揮されうるためである。こゝに人間の救の事業を成就し神の國を建設するためにキリストのこの世に來り給うた所以がある。

世界は神の力によつて維持され、神の愛によつて導かれている。故に神を信ずる人々には凡てのことが働いて益となる。（ロマ書八ノ二八）世界に於ける凡てのものは喜びであり、愈々神への信頼を深くさせるのである。

**神は世界の上に在る**　キリスト教に於いては神は世界の内にあるのではなく、世界の上にあると考える。人格的なる神が世界を創りその智慧と愛と力とを傾けて之を導き給うことを信ずる。パウロは世界の中に神が在し給うのではなくして、神の中に世界があり、私共は神の中に生き、動き、また存在するのであるというている。（使徒行傳一七ノ二八）そして神はこの世界に經綸を行い給う。世界の中に自然の法則が凡ゆるものを貫いて支配しているのは、神が一定の目的をもち、その方向に從つて世界を支配し給うことを示している。自然的世界の秩序は神の側から見るときには極めて整然としてをり、人間の目から見てそれが理解出來なかつたり、無秩序の如く見えたりするのは、唯私共の知識を以ては理解出來ない程神秘で深いというだけである。

神は世界の内にあるのではなく、世界の上にあり、之を導き給うと言う信仰から私共の神に對する義務と責任とが生じ、又神に絶對的に依存して生きることの喜びが與えられる。神と世界が同一であるという立場からはこの様な責任感は出て來ない、却て神に依存することを忘れて、勝手な我意を通そうとする態度が生ずる。かくて神への反抗としての罪惡が存在する様になるのである。私共の眞の自由は神の子として、神の支配を受ける時にはじめて與えられるものである。神の創造になる世界に何故に惡が存在するかは説明の困難な問題であるが、キリスト教の信仰においては惡の根源は人間の側にあるのであり、それは遂には善によつて征服され、支配される



と信ずる。この爲にキリストの十字架の意義があるのである。

**苦惱の最後的意義**　苦痛或は苦難についても同様な困難があるが、深く考えるならば、苦しみのうちに人生の價値も意義もある。肉體の苦痛は身體を健全に保たしめるための警告であるし、精神的な苦痛は時に人格の訓練となり、時により善きものに達しようとする時の抵抗を意味し、時に罪のあがないとなり時に愛と犠牲とにならなくてならぬものとなる。現在の如く特に苦惱に滿ちている時代においては苦痛と言うものを徹底して考えることは、神への信仰をもつことに於てのみ可能である。私共の目前の苦難は充分にその目的を達していないし、その意義を發揮してはいない。それは將來において明かにされることであつて、苦惱の最後の意義は現在においては隱されたものであり、來世への信仰なくしてはこの苦惱の意義を徹底的に解決することが出來ないのである。そうしてこれが又現在におけるキリスト教の信仰生活の徹底な態度が生ずる大きな理由でもあるのである。

人力を以ては如何ともし難い自然の災害については確かに困難な點がある。しかし災害を生ぜしめる法則は同時に福利を與える法則である。噴火により人を殺す火山脈は溫泉を湧出せしめる。洪水で人家を流す河川は灌漑の用をなす、殊に災害により人は訓練され人智は進歩する。また災害を受ける一半の責は人間の側にある。死そのものを神のお召しと信ずる信仰に徹するならば、災害をも神の攝理として受け、個人的利害のみの觀點にたたず、現在未來を通じて大きく考え、神の思召のあるところを知ることが出來るのである。

# 奇蹟の問題

キリストの事實は奇蹟的な事件によつて終始している。處女降誕にはじまり、復活と昇天に終る地上の御生涯の間、奇蹟的な出來事の連續である。イエスは病人を一瞬にして醫され、死人を甦らせ、盲人の目を開き、跛者を立たせ、その他樣々の奇蹟を爲し給うた。しかし、何よりもまずキリスト御自身が最大の奇蹟であつた。現代人の中には奇蹟を虛構の事實となし又キリスト教に奇蹟といふものが無いならば自分はキリスト教を信ずるであらうと言う人々が數多く居る。

奇蹟とは常識又は科學的知識で判斷しては理解することが出來ない出來事である。それは超自然的なものである。私共の經驗と知識で說明出來ないからと言つて之を排除し、否定しようとするのは超自然の事實に自然界の法則を適用するからである。神の支配する世界には近代科學や唯物論の取扱う自然以上の世界がある。神に導かれ、神に依存する世界がある。否、自然界と雖その本體は科學的法則によつて成立しているものではなく、神の意志によつて成立するものである。世界は神の意志によつて支配せられ、進展せしめられているから、私共は機械的な組織や因果律を超えて働き給う神に祈るのである。私共の祈りに應じて神は自由にこれに答え給うという



信仰は言い換えれば奇蹟出現への待望を含んでいる。

奇蹟は斯うした待望への應答として神の自由な行爲によつて起されたものであつた。神によつて行われる奇蹟は人間の魂を神の方に向はせ、神の御業を信ぜしめるためである。それが超自然であるというのは不自然ということではなく、私共の經驗的な知識によつて說明の困難な出來事という意味である。それは自然の秩序を補い、また自然の失われた秩序を恢復するところのものである。

**キリストの奇蹟の意義** この樣に奇蹟を失われた自然の秩序の恢復であると見る時、イエス・キリストの出現とその行動が全く奇蹟に滿ちていたことは當然であり、奇蹟とは自然の中における自然、自然の深奧にあるところの自然である。

奇蹟は眞の秩序恢復の爲めの、神意の顯現である。而して神の最大の奇蹟はイエス・キリストであつた。キリストは人間の罪のために失われた宇宙と人類の秩序を恢復するためにこの世に來り給うた。そして十字架の上に人類の罪をあがなうために死に給うたが、この人間の罪の存在と罪による秩序の破壞が寧ろ變則的なものであつて、キリストの十字架の死こそ自然であるという逆說も成立すると言えよう。キリストの生涯が奇蹟の連續であつたと言われるのは極めて當然のことであつて、それは人間の贖罪の目的をなし遂げるための神の自由な行動であつたのである。

神が人格的な存在者としてこの世界を支配し、機械的な回轉と因果の法則を突き破つて自由な行動によつて私

共を導くという信仰は、私共のこの世に於ける生活を大いなる希望に満たしめる。キリストが求めよさらば與えられんと約束をせられ、キリストの僕ヤコブが『正しき人の祈りははたらきて大いなる力あり』(ヤコブ書五ノ一六)と教えてゐるのは神がキリストをこの世に遣して私共の罪をあがない、私共を神の子として祈りに於いて親しく交り給い、自然の因果法則を越えて、私共を遇したことを意味している。

キリストを信ずる者には自然的な世界の他に超自然の世界が存在しているのである。私共はこれを私共の祈りにおいて現實となすことが出來るのである。

## 近代科学思想とキリスト教

近代の世界觀の一つの大きな特色はそれが科學の影響、特に自然科學の影響の下に立つているということである。そしてこれはキリスト教の世界觀と本質的に違つた世界像を私共に與えているように思われている。人々は今日科學が提出する様々の定義や證明等を何の疑いもなく受け容れようとする。科學的な方法に基くものの考え方であるといえば、一應は誰でもこれを信用して仕舞ひ、これを論駁しようとはしないのである。この様な地位を何時の間にか占めて仕舞つた科學はそれが唯一の確實な思考方法であるかのような妄想を與え、宗教や哲學から分離したばかりでなく、之を排撃しようとした。人々は凡ての疾病に効力を有する萬能藥の如くこれを用いて



凡ゆる問題を科學の能力だけで解決しようとしたのであつた。

近代科學は宗教の分野にも浸入してその世界觀の根柢を搖り動かし、遂には全くこれを粉碎して仕舞つたかの感をさえ多くの人々に與えたのであつた。宗教と科學のたたかいとか、衝突とかいう話題はつい最近まで多くの人たちの關心を引いた問題であつた。此の場合宗教は凡ゆる方面に於いて全く敗北しているという様な印象をさえ與へた程であり、事實人々は科學的世界觀の側につくことが近代人の當然の役割であるかの如く思い込み、否むしろこれを誇としているのである。

**宇宙の法則と神の実在** 然し一方においてキリスト教信仰に基く世界觀は新しき姿を以て擡頭しつゝある。

科學の發達は凡ゆる分野において驚異すべき事實を私共に示したが、特に宇宙の神秘を究めようとした天文學と物質の核心を究めようとした自然科學に於いては、然りである。天體が整然たる秩序の下に一刻一秒の狂いもなく運行している事實や、次ぎつぎに發見される雄大なる星や、宇宙の神秘を物語る新事實の驚異にうたれた天文學者たちや、原子核の構造の精妙なのに驚いた自然科學者たちの中には、無限大に擴がる大宇宙と無限に微少であるとも云うべき原子構造を貫いている法則と秩序の發見によつて、神の宇宙創造と神の宇宙目的とを肯定して有神論的宇宙觀に立たざるを得なくなり、神を讃美するに至つた人々も少くはないのである。科學的な眞理を究めることが深ければ深い程キリスト教信仰に近ずいて行き、神の宇宙創造を信ぜざるを得なくなるということは キリスト教信仰の眞理が何人にも受け容れられるべきものであることを示しているのである。

今や流行しつゝある科學的世界觀に滿足することの出來ない人々が、世界觀であると共に單なる世界觀の與え得ない更にもつと深い要求をも滿たすものとしてキリスト教信仰を求めるのは故なきに非ずである。

近代科學の發展とその絶えざる新事實の發見や證明によつて、キリスト教信仰は、一切の基礎を破壞されてしまつたかの樣に言われていながらも、その力を少しも喪失しないばかりか、却て益々その輝きを增しているのである。この事實はキリスト教信仰こそ凡ゆる問題の解決者であり、凡ての世界と人間に就いての思考の基礎としての責務を果し得ることを證明し得るのである。

併し乍らキリスト教は自然科學的な方法やその他の學的思惟に基く證明を拒否してはいない。キリスト教はそれらを全面的に承認し、これを受容してしかもなお少しの矛盾なく活々とした信仰を保持している。このことはキリスト教が如何に大きな抱擁力を有する眞の宗教であるかを證明している。使徒パウロがコリント前書第一章二十節以下に於いて『智者いづこにかある、學者いづこにかある、この世の論者いづこにかある、神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや。世は已の智慧をもて神を知らず、この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救ふを善しとし給へり』と言うた時には、神の智慧卽ち『神の能力また智慧たるキリスト』が人間の頭腦によつて考え出された知識よりは遙かに優れているという確たる信念を有つていたのであつた。

**科学的世界観を超えるもの**　キリスト教は近代科學がその立場から提起するキリスト教世界觀への抗議や壓迫に對して一つ一つ辯解や訂正などをしない。寧ろキリスト教はその世界觀において科學的世界觀よりも無限



に高く立つていることを主張するものである。近代科學は理性やそれに基く數價計算や感官等を用いて現象世界を分析し、その構造を示そうとするのであるが、それは現實の世界の外面に觸れるだけに留つている。それは現象の世界の背後にある實在の世界には決して到着することが出來ないのである。玆に科學には限界があるということがキリスト教の側から強く主張される根據があるのであつて、これは如何に強く主張されたとしても過ぎることのない點である。

近代科學は個人の主觀的關心を超越して客觀的な事實やその價値に就いてのみを考慮して、世界を解明しようとする。この方法は勿論延いては個々の人間の價値や意義、生命の問題の解決に影響を及ぼすであらうけれどもそれによつては一人の人間の生命や價値や意義、あるいは運命が眞の、意味においてそれ自身取り上げられることはない。取り上げられるとしてもそれは客觀的な價値とか、文化とかを促進する手段、あるいは用具としてなされるにすぎないのである。故に個々の人間の生命あるいは死、運命の問題に就いては表面的な一應の解釋を與えるに止まり、眞に私共を滿足せしむるに足るものを與えることは出來ない。

キリスト教の信仰は近代科學の目指している眞理の證明とか、現實の世界の理性的認識等をつき拔けて神の愛に根差す聖意に對して絶對的な信賴を傾ける。キリスト教はこの樣な人格的な確信に基く世界觀を樹立するのである。玆においてはじめて個々の人間である私共の具體的な問題が、人格的解決を與えられるのである。

# 歴史と終末の思想

歴史の問題が近代哲學に於いて問題となつてから、人間は歴史的存在であることがわかつて來た。そこで人間についての理解は歴史の意義についての理解なしに之をなすことが出來ないと言う結論に至つた。人間はこの世界に於いて歴史的存在であるということによつて凡ゆる他の存在物から區別されるのである。自然には歴史がない、其所にあるものは發展と進化だけである。然らば歴史とは如何なるものであるだらうか。

普通歴史は過去のことであるという風に考えられている。歴史的なものと言えばそれは過去に屬する過ぎ去つたものを意味しているのであるが、過ぎ去つたものは必ずしも過去の中に埋沒し去つたものであるとは限らない歴史的なものという場合には寧ろ何らかの意味において現在に對して影響を與えているものを意味しているのである。唯に現在に關係するばかりでなく歴史は現在と將來とを決定する存在の全體を意味してをり、人間が歴史的存在であるというのは歴史を作るものであるということである。故に歴史とは過去の出來事でありながら同時に傳達されて現在にはたらくものであつて未來を孕むものであるというべきであらう。

自然界にも歴史に於けると同じ様な成長や發展を見ることが出來るが、それは何らかの意味で因果的なものが假定されてをり、直線的な進化であるが、歴史はそうではなくて過去と現在との綜合的な統一というべきもので



あつて、自然は絶えざる繰返しにすぎないが、歴史は繰り返さないことにその特徴がある。

しかしながらひるがえつて考うるに、人間は歴史的存在であるのに單なる繰返しにすぎない生活を實際においては續けているのではないだらうか。私共のすぎ去つた生活は何の意味もない空漠たる生活であつて、時間の推移を自然界の變化と同じ様に過して來たのでは無かつただらうか。歴史的存在でありながらこれを喪失して、自然物と同様に生きるより他にその道が無かつたではないか。このことを私共は反省して、人間の歴史性を恢復することは如何にして可能であるかを考えなければならないのである。

キリスト教の信仰は私共に確實な歴史を恢復せしめる唯一のものである。使徒パウロが自分の生涯を顧みて、自分がまだキリストの使徒として献身するに至らなかつた時代も神の恩寵の下に生きていたことを思い、母の胎内を出た時から既に自分は神に選ばれていたと言うたのはこのことを最もよく私共に教えている。人間の歴史性は神の恩寵によつて私共に與えられる。神の恩寵の信ぜられないところには歴史的な意識は生じないのである。

キリスト教に於いては歴史に就いての意識が明瞭にそして精確に把握されている。神の計畫的な意思が人類に實現されることが明かに示されてをり、世界の凡ての事象が決して一つの旋律の絶えざる繰り返しではないことを聖書は教えているのである。預言者たちは先祖たちに示されたものを現在において鮮かに見ると共に他方初めて彼等によつて體驗されたものを未來が完成するだらうと言う活き活きとした信念をもつていた。舊約聖書の信仰は過去と未來とが現在の預言に於て密接に結びついている。新約聖書においては過去と未來のこの結合がキリ

ストの人格においてその保證を見出している。歴史の完成の最後の狀態がキリストの人格と共に出現したのであつて、人は世界を理解することと世界の凡ての事柄の價値を計量することをキリストによつてなさねばならないのである。

即ちキリストの出現と共に新しい世界、新しい時代、人類の創造の時にまで遡る神と人間との歴史が、その目的と終結とを見出し、その完成の時が到來したのである。

イエス・キリストの人格に於いて人間はその最も完全な形成をなした。キリストに於いて人間の人格的完成が成就した。故に人間は歴史の中心點と重點をキリストによつて與えられるのである。キリストによつて人間の憧憬と希望が成就された。キリストによつて神と人間との間の深い、越えることの出來なかつた淵が決定的に克服されて、キリストの恩寵によつて私共は神との交りに導かれる、私共個々の人間の魂もひとつ一つ神に結びつけられてパウロの如くその歴史性を恢復するのである。普通歴史といえば過去の出來事を價値づけ、これを敍述することであるという樣に考えられているのであるが、キリスト教によつてはじめて歴史の眞の意味が闡明され、世界觀としての歴史觀が確立されたというべきである。

歴史の終末の思想は新約聖書の全體を被うている思想である。勿論この地上の歴史にはその端緒があつた如くその終末もなければならない。この歴史の端に何時かもたらされる終末は、個人の場合に於ける死の事實の樣に決してこれを外部的な事件として見るべきではなく、常に自己自身の現在において經驗しなければならない。キ



リストは數多くの譬をもつて之を敎えられて、終の日は眼の前に差し迫つた事實であり、恰も盜人の夜來るが如くこの世界に來る故に人々は目を覺してをるべきことを警告された。これは宇宙論的なこの世界の終末ではなくして、それは歴史的なものである。即ち未來の終末を現在に於て體驗することである。キリストの敎えられたこの終末觀をもつていた初代キリスト信者たちの活動はこの故に必然的に猛烈とならざるを得なかつた。彼等の行爲は眞の意味に於て歴史的なるものであつた。

# 來世の問題

## キリストの復活に就て

イエス・キリストの復活はその十字架と共にキリスト教の中心をなす事項である。キリストは十字架にかけられ、死後葬られて、三日目に甦り弟子たちに現われ給うた。一旦死んだ者が復活するということは現代人には理解しがたい。これを傳說又は神話と考える人も少くないであらう。然しながらキリスト教の歴史を調べて見ると復活を否定することは出來ない。復活なくしてキリスト教の歴史は存在しなかつたという結論になるからである

キリストの弟子たちはキリストが捕えられ十字架につけられると共に四散してしまつた。然しこの弟子たちが再び捲土重來の勢を以て傳道を開始したのは、彼等が復活の證人として立ち上つたからであつた。ペテロはエルサレムの宮に於てキリストの御名によつて跛行者を立たしめた時、民衆に向つて『汝らは生命の君を殺したれど神はこれを死人の中より甦へらせ給へり、我らはその證人なり』と宣言した。又使徒行傳には『信じたる者の群はおなじ心おなじ思となり、誰一人その所有を己が物といはず、凡ての物を共にせり。かくて使徒たちは大なる能力をもて主イエスの復活の證をなし、みな大なる恩惠をかうむりたり』(四ノ三二―三三)と記されているのをみてもいかに彼等が復活のキリストを宣べ傳えたかということが判る。

**復活とは如何なる事か**　そこで私共は先づ第一に復活の事實を聖書に基いてはつきりと認識する要がある。キリストが葬られた日の翌日は安息日であり、其の翌朝マグダラのマリヤと、も一人のマリアと墓詣りに行つたが、墓の入口に立てかけてあつた石はまろばし退けられ墓穴は空虛だつた。二人は弟子たちに報せようと走つて行くうちに復活のキリストに會ひ、その御足を抱いて拜した。(マタイ傳二八ノ一以下)

墓に葬られたキリストの屍體は朽つることなくしてよみがえつたのである。復活のキリストの體と墓に葬られた屍體とは別物ではなかつた。弟子たちが復活の主を見て懼れおののき亡靈だろうと思つた時、キリストは『我が手、我が足を見よ、これ我なり。我を撫でゝ見よ、靈には肉と骨となし、われにはあり、汝らの見る如し』(ルカ傳二四ノ三七以下)と仰せられた。主のよみがえりを疑つた弟子トマスに現れ給うた時も、御手の釘の痕と脇の傷とを



示し給うた。(ヨハネ傳二〇ノ二六以下)墓に葬られたキリストは實に死よりよみがえつて墓より出で給うたのである。

しかし復活のキリストの體は肉の體ではなかつた。復活のキリストは出沒自在であり、弟子たちに現れ給うても彼等はこれを認め得ず、何かのきつかけに初めて主キリストだとわかることが屢々あつた。例えば戸を閉ぢておいた部屋にキリストは忽然として姿を現し給うた。(ヨハネ傳二〇ノ一六)又エルサレムよりエマオへの道に於て二人の弟子はよみがえつた主と會い、話をしたにも拘らず之を認め得ず一緒に宿について、主がパンを擘くに及んで初めてそれと氣がついた。(ルカ傳二四ノ一三以下)

「これらの事實から推測して復活のキリストの體は朽つる肉體ではなく、さりとて幽靈の如き又幻影の如き非實在でもなく、靈體と言う獨特な體であつたと言い得る。聖書の記すところによれば肉の體をもて葬られたキリストは靈の體にてよみがえり給うたと言うのが正しい結論である。

**復活の事実とその意義**　パウロはコリント前書第十五章に主の復活を論じているが第三十五節以下に次の樣に言つている。『されど人あるひは言はん、死人いかにして甦へるべきか、如何なる體もて來るべきかと。愚かなる者よ、なんぢの播く所のものは後に成るべき體を播くにあらず、麥にても他の穀にても、たゞ種粒のみ。然るに神は御意に隨ひて之に體を予へ、おのおのの種にその體を予へたまふ。死人の復活もまた斯くのごとし、朽つる物にて播かれ、朽ちぬ物に甦へらせられ、血氣の體にて播かれ靈の體に甦へらせられん。』

キリストの復活は何を私共に與えるかと言えば、復活によりキリストの神の子たることは明かにせられた。

『御子は肉によればダビテの裔より生れ、潔き靈によれば死人の復活により大能をもて神の子と定められ給へり』（ロマ書一ノ四）とある如く、キリストが人間と同質でありながら同時に神と同質であることは、復活によつて實證されたのである。

次に復活によつて十字架は永遠のものとなり、現在の私共に罪のあがないの能力としてはたらく。即ち復活によりキリストは活けるキリストとして私共の前に立ち給うのである。キリストが肉體をもつてこの世に在し給うた時は、キリストの現在そのものが罪の赦しであつた。御許に來れる憐める人々が何よりも先に與えられたものは汝の罪赦されたりとの御言葉であつた。今なお活けるキリストは私共に『汝の罪赦されたり』とのお言葉を何よりも先に與え給うのであるが、この恩寵は十字架と復活の私共にもたらした賜物である。

第三にキリストが靈の體にてよみがえらされたことは、私共に永生の確信を與える。キリストは私共に永遠の生命を約束し給い、又十字架につけられる前『われ汝等のために處を備へに往く、もし往きて汝らのために處を備へば、後きたりて汝らを迎へん、わが居る處に汝らも居らん爲なり』（ヨハネ傳一四ノ一―四）と仰せられたが、復活によりこの約束は成就された。復活の主を仰ぐことによつて私共は死後迎えらるべき住處の確かなることと共處にあつてキリストと共に居ることの出來ることを確信するのである。

## 永生に就て



人間は死後にどうなるか。この肉體は腐敗して諸元素に還元してしまい、靈魂も滅びてしまうのか、それとも人間の靈魂は肉體の死を超えて存在し、自己の存在を意識して生きて行くものであるか。これは人生の根本的な問題で、この解決なくしてはこの世に生きて行く上に確かりした信念がもてないのである。

**死に関する三つの考え方**　現代人の死後についての考には三つのものがある。その一は唯物論の影響を受けたもので、生命は物質の派生物であるから肉體が滅びれば靈魂も無くなつてしまうというのである。その二は佛教的な考え方で、死によつて人間の生命は全宇宙の生命に歸してしまう。個我は普遍我に吸收されるという考え方である。その三は肉體の死を超える生命を比喩的に考えるもので、或る人がよい本を書いて死んだ後、その本が讀まれているところにその人の生命があり、よい事業を殘して死んだ人はその事業の殘つているところに生きているという樣なものである。

死と死後の問題は今日まで哲人や賢人が眞劍になつて研究し、色々と結論を出した。人類の歴史は處によりまた時代に從つてこの問題を解決し、之に就ての信仰を打ちたてている。現代人が唯物論的な思想をもつているのもこの時代の特色である。公平にみて人間の死後の靈魂が存在するや否やの論爭は五分五分である。何故ならば死後の世界から歸つて來て報告したものはなく、凡ては推量で云うているに過ぎないからである。しかし一度キリスト教の世界に入るならば局面は變化する。この問題は現代人の常識的な考え方と違い、眞劍に取り上げられて、そこには僞りや誤魔化しはない。死とは何か、死後は如何ということをひたむきに追求し、信仰によつて解

決するのである。聖書は死及び死後の問題について明確な解答を與え、又今日までの神學者は之に就て深い研究をなし遂げ、その結論を出している。

聖書に死という言葉を用いてある時二つの意味がある。一つは精神的な死、つまり神から離れた靈魂の狀態を云い、もう一つは肉體の死に伴う靈魂の狀態を云うのである。肉體の死に伴う靈魂の狀態に就てキリスト教信仰は次の樣に敎える。死とは靈魂が肉體から離れることを云うのであるが、肉體が死んでも靈魂は消滅しない。死後においても神の支配する世界は現存するのである。これは人間が神によつて創造されたという信仰から當然出て來る結論である。私共は父母より生れたのであるが、私共を母の胎に造り之を生ましめたのは神の創造である

**靈魂は何処へ行く?** 然らば死後人間の靈魂は何ういう狀態におかれるであらうか。ルカ傳二十三章四十二節以下にはキリストと共に十字架にかけられた惡人の一人が臨終の前に『イエスよ、御國に入り給う時我を憶えたまへ』と賴むと、キリストは『われ誠に汝に告ぐ、今日なんぢ我と共にパラダイスにあるべし』と仰せられていることによつて知られる。キリストを信ずる者の靈魂は肉體の死んだ後キリストと共に居るものであることが解るのである。パウロは信仰の極致にあつて自分の想うところは『この肉體をはなれて主キリストの御許に到りキリストと偕に居ることである』と云うた。信者にとつて肉體の死は靈魂の訓練であり、更に光榮ある生活に入る出發點である。

然らば信仰のない者、救われない者の死後は何うなるかということに就てはルカ傳第十六章十九節以下に次



の樣なキリストの御言葉が記されている。

一人の富める人があつて美衣美食をして毎日奢り樂しんでいた。又ラザロという貧しき者があつて身體は腫物ではれただれ、歩くことも出來ずこの富める人の門前におかれて、人の情けにすがつて生きていたが、二人とも死んでしまつた。ラザロは神の御使たちにつれられて先祖アブラハムの懷に抱かれ、富める人は黄泉に落ちて苦惱のうちにおかれた。彼は目を上げて上を見ると遙か彼方に、かつて自分の門前にいた貧しきラザロが、アブラハムのふところに抱かれて安らかに幸福にしている有樣を見てたまらなくなり、ラザロを遣して指先に水をつけて自分の舌を冷させて下さいと賴んだ。するとアブラハムは答えて『お前は世にある間快樂にふけり、ラザロは苦しんだ。今ここでは彼は慰められ、お前は悶えるのだ。その上此處からお前のいるところに行こうと思つても出來ない。此處と其處との間には大きな淵があるのだ』というた。彼は始めて自分の運命がわかつて驚いたとともに、自分は仕方がないとしてもまだ生きている自分の兄弟が、こうした苦しみを受けるのは可哀そうだ。何とかこのことを報せてやつてこの苦惱にあわぬようにしたいものと思い、アブラハムに向つてラザロを兄弟たちの許に遣さんことを乞うた。ところがアブラハムは答えた。『彼らは人の守るべき道が示されているからそれに從えばよいのだ』『いや、彼等はそのままにしておいたのでは正しい道を踏みません、死人の中から使が行つてよく事情を話すならきつと悔改めてよい人になるでせう』『モーセその他の預言者たちの與えた正しい道を行わない者は、たとえ死人の中から使者が立つて實情を話して忠告しても之に從わないだらう。』この話は來世に於け

る人間の靈魂の狀態を示したものである。地獄極樂とか天國地獄とかいうと迷信だとか、たとえ話であるとか云つて笑うであらうが、人生の經驗をつみ、深く考えるならばそう簡單に片附けられる問題ではない。現世において道に外れた生活をし奢り樂しんだ魂の死後陷るべき運命は玆に描かれている。キリスト教における來世の問題はここから展開される。

**良心は審き主の使者**　善因善果、惡因惡果というのが世の中の道であると考えられているが、然し萬事この樣に行くかというと決してそうではなく、善人であるのに不幸な境遇に陷り、惡人であるのに榮えている例は隨分多い。これでは神も佛もない。いざ我ら飲食すべし、太く短く世を渡れという結論になり、善い事、正しい事をするのが馬鹿馬鹿しくなる筈なのに、世の中には多くの善い人があつて、正しい道を踏んでいるのは何う云う譯かといえば、人間には良心があるからである。良心とは何か。キリスト教の信仰からいえば良心とは人間の靈魂が來世の狀態を見ていることである。

前述の富める人とラザロの死後の狀態を人間の靈魂は見ている。その見た儘の感じがつまり良心である。現世の人は死後の世界から使者が來てその有樣を告げ知らせたならば之を信ずるだろうというたが、實は來世からの使者は絶えず來ている。それは卽ち良心である。この使者の言うことを聞かぬ者は更めて使者を出しても役には立たぬ。そういう見方でルカ傳第十六章十九節以下を讀むとその深い意味に驚くのである。

現世に行われていることだけで因果應報は決められない、これは來世を通じて初めて正しく行われるのである法律が守られるのは之に叛く者に對して裁判があり、罰があるからである。裁判が亂れてしまうか、行われなくなつてしまえば法律の威力はなくなつてしまう。道德が行われるのは矢張りこれに叛く者に裁判があり、罪があるからである。但しこの裁判と罰とは此の世だけに行われるのではなく來世に亘つて行われ、清算がなされるのである。現代人は死後の世界などというものは迷信だ位にしか考えないが、そうではない。人生の經驗を通して深く考え、よく聖書を究めて見るならばキリスト教がどんなに深遠な徹底した信仰と思想をもつているかを悟るであろう。來世の解決なくしては信仰も宗教もないのである。

人間の良心が來世からの使者であるというだけでは證據不充分であるが、人間の死後において個性をもつて生きるということの實證はイエス・キリストの復活である。キリストの復活を受け入れることさえ出來れば死後の問題は一遍に解決してしまう。此の點キリスト教は佛教の來世觀とくらべて實にはつきりして居り、或る意味で實證的である。然らば救われた者は來世において如何なる生活をなすであらうか。神と人との理想生活の有樣をヨハネは手にとるように默示錄に於て述べ『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在してかれらの目の淚をことごとく拭ひ去り給はん、今よりのち死もなく悲歎も號叫も苦痛もなかるべし、前のもの既にすぎ去りたればなり』(白ハネ默示錄二一ノ三)と記している。

これ實にキリストを信ずる者の與えられる永遠の生命である。永遠の生命は死後の世界のみならず現世に於てキリストを信じた時から始まる。卽ちその信者は現世に在りながら既に天國に住み、變轉常なき世に住みながら

永遠の生命に生きるのである。この確信が出來れば世の中のことは何一つとして解決出來ぬことはない。死も恐怖ではない。死んでも我はキリストの許に到り永遠に生きることが出來るという樂しみがある。可愛い子供に先立たれ、愛する者を喪うた悲しみにも打ち勝つことが出來る。先立つた人は此の世を去つてよりよき世界に於て自分を待つているという信念があるから、悲しみに打ち負けることはない。何物を以てしても慰め得ない悲哀、何物を以ても解き得ない煩悶がキリストの復活への信仰によつて慰められ、解決されるのである。

## 審判について

ダンテは『神曲』の中で『人間は神の台前に審判を受くるために翔び行く一羽の蝶である』と歌つている。これはすべての人が最後に神の前に於て地上生活の總決算をするものであることを意味する。神は眞しき方である。故不正不義がそのまゝに放任されていることを容し給わない。こゝに審判のなければならぬ理由がある。

キリスト教に於て審判と言う時、樣々の意味がある。その第一はキリストが此の世に降り給うた結果必然的に起つたところの審判である。キリストは『我の來りしは世を審判かん爲にあらず　世を救はんためなり。』(ヨハネ傳一二ノ四七)と仰せられたが又『われ審判の爲にこの世に來れり。』(ヨハネ傳九ノ三九)とも言い給うた。この一見矛盾した御言葉は、キリストの降臨の結果として人の正邪善惡は批判されると言う意である。律法を形式的に固執しまことの義と愛とを見失つていたパリサイ人はキリストの臨在によつて審判された。人類の歴史に對する正邪の見方も亦キリストの降臨によつて明かにされた。現在私共の生活に於ても、キリストを知ることによつて、是非善惡の判斷が變つて來る。こう言うことはキリスト降臨による審判の結果である。

キリストの降臨による審判は十字架に於て極致に達する。私共が十字架の前に立つ時、私共の罪は完膚なきまでにさばかれる。義しき神の審判はキリストの十字架に於て完全に行われた。審判を受けて罪を悔い神の子キリストを信ずる者は罪の赦しを受けて救われる。然らざるものは救われないのである。次に人間の死後に於て行われる審判がある。『善をなしし者は生命に甦へり、惡を行ひし者は審判に甦るべし。』(ヨハネ傳五ノ二九)とある如くすべての人は死後に於て神の審判を受ける。來世に於ける審判の有樣については、マタイ傳第二十五章三十一節以下に記してあり、キリストは諸々の御使を率いて榮光の位に坐し、もろもろの國人をその前に集め、此の世の行いに從つて審判する。かくて愛の行を爲さなかつた者は永遠の刑罰に入り、正しき者は永遠の生命に入るのである。

### 審きの座開かれる時

更に此の世の終末に於て終局的になされる審判についてヨハネ默示錄第二十章十一節には壯嚴な場面が述べられている。大いなる白き御座にキリストは坐し給う。現在の天地は御顏の前に過ぎ行き跡だに見えず滅び去つてしまう。かくて既に死せるすべての人が審判の御座の前に立つ。數々の卷物が展かれるが、ここに生命の書があつて展かれる。すべての人の此の世に於ける行いが之に記してある。そして審判はこの

行いに從つてなされる。生命の書に其の名を記され救に入ることゝなつている者は除外されるが、其の他の者は火の池に投げ入れられる。此の火の池は第二の死である、かくて新天新地は現れ、救われた者は神の許にあつて永遠の幸福を與えられるのである。

死によつて靈肉共に滅ぶと考えるならば、未來に於ける審判は問題とならない。若し靈魂が肉體を超えて來世に存續するとせば審判を認めざるを得ない。審判あつて初めて道德の尊嚴は維持される。否道德が嚴として存在することが來世に於ける審判を暗示しているのである。

此の世の終末について言えば、近代の科學的世界觀より見ても、私共の住んでいる世界は早晩滅亡すべきものである。肉體を超えて存續する靈魂は、此の世界滅亡の際に審判され、總決算がなされ、新しく創造された世界に引つがるべきものである。新天新地は神の第二の創造であり、現在私共の住んでいるこの世界とは全く異つたものである。救われた靈魂が神の許にあつて永遠の至福を受ける世界は、此の世ではなく、新に創造される新宇宙に於てである。

死は靈魂の消滅を意味しない。肉體の滅びた後靈魂は堪え難き苦惱のうちにおかれ永遠に救われぬ狀態にあることが死である。『罪の拂ふ價は死なり。』(ロマ書六ノ三)とある場合の死はこれを意味する。然るに永遠の生命を與えられた者は肉體の死を超えて神のみもとに至り祝福を受けるのである。



# 終末と再臨とについて

人間個人の生活は死によつて現世を終り、そこから來世が始まるのであるが、廣くこの天地宇宙というものには人間個人の如く終りがあるだろうか。又人類全體というものに終りがあるだろうかという疑問は起らざるを得ない。多くの人たちは自分個人の終りに就てさえ明確な考えをもたないから、天地宇宙の終末とか、人類全體の終りとかいうことに就ては深く考えない。こうした問題にふれると如何にもそれが人を迷わす邪說の如く感じたり、知識の足りない人達の迷信の樣にしか考えない。

然し天地宇宙が今の儘で無限に續くものであるとは考えられない。現代の天文學の敎えているところによれば宇宙は絕えず變化しており、その中には、成長、發展、消耗、死滅があり、大宇宙には始めがあつたと共に終りがあることを示唆している。人類全體の運命を考えて見ても同樣で、人類の起原を進化によるものと見ても、又神の創造になるものと考えても、その始めがあつたことには相違ないし、これが永遠に續くとは考えられない。人類の世界の終末は容易に推測出來るのである。

**終末思想の二つの變型**　世の終末については、思想體系のことなるによつて色々と考え方がある。又、終末というものをこれ程深刻に考えないで、人間の力によりこの地上にユートピアを實現し得るとなす思想がある。

これは終末論の一種の變形であり、その倫理的なものはデモクラシーとなつて現われ、その唯物論的なものは共産主義となつて現われた。現代に於てこの二つの變態的終末論は鬪爭を展開しているのである。

**キリスト教の終末觀**　舊約聖書の預言者たちによつて唱えられたメシヤ降臨の待望は明かに終末思想であつた。唯一絶對の神を信じていたイスラエル人は、その信仰から神は必ず救主を降して神の國を建て給うことを確信していた。しかもこの終末思想は彼等が異民族の壓迫による苦難を重ねるに從つて愈々深みを加え、キリスト教の基礎をなすところの幾多の預言書、文學、詩歌を生むに至つた。彼等のもつ終末觀は彼等が苦難の歴史を通つて來たにも拘らず著しく樂天的であつた。

キリスト教における終末觀にはこの預言者の終末觀が織り込まれている。しかしその中心をなすものは、十字架につけられ死してよみがえり給うたキリストであつた。神はキリストを降して此の世と人とを救い、これによつて世界創造を完成し給うと言う信仰は、世の終末とキリストの再臨の信仰とを生むに至つた。

**世の終末は何時來るか**　新約聖書に記された終末と再臨に就て大要を述べれば次の如くである。此の世の終りには大いなる天變地異がある。その時キリストは天使を率いて出現し、此の世を審き給う。既に死んだ者も、その時生存している者も等しく審判され、惡しき者は永遠の刑罰に、正しき者は永遠の生命に入れられる。キリストの恩寵によつて救われた者は死者も生者も完全な靈體を與えられる。これは復活のキリストの體の如くである。そして彼等は永遠にキリストと共に住むのである。キリストの再臨によつて惡魔は滅きれ、罪は絶滅し、キ



リストは天地萬物を己に從わせて神に之を引渡す。ここに神の國は完成するのである。以上はマタイ傳第二十四章、コリント前書第十五章二十四節以下に記されているところを要約したものである。これを如何に解釋するかはその人の知識や信仰の程度によつて異る。

世の終末とキリストの再臨の時期に就ては、パウロの時代より現代に至る迄樣々な考方があつた。パウロも初めは終末は彼の在世中に來ると信じていた。このことは『われらのうち主の來り給ふ時に至る迄生きて存れる者は既に眠れる者に決して先立たじ。』（テサロニケ前書四ノ一五）『汝らは主の日の盜人の夜來る如くに來ることを自ら詳細に知ればなり。』（同五ノ二）とあるのを見ればわかる。しかし後になつて終末はかくの如く早く來るものではないと考える樣になつたが、依然として『主は近し。』（ピリピ書四ノ五）と言うている。

數年前、我が國においてさえ或派の一部の人々は『主の再臨近し』と毎日業を休んで新しい白衣を着て待つていたことがあつた。又今から二十數年前、内村鑑三氏等がキリスト再臨運動を起したことがあつた。その時、内村氏は『かく私が宣べている瞬間、主は來りたまうかもしれぬ。或は明日、又は一年後、乃至は五年十年、百年千年後かもしれぬ。人間の考えをもつてしては測り知ることは出來ない。しかしその時機は何時でもよろしい。主イエス・キリスト來りたまうという再臨の信仰をわが家庭が、わが國が、わが社會が、わが民族が待望しつゝ主イエスの前に生活するものでありたい。この大いなる幻と希望を日本民族が子々孫々に傳え繼ぎたいものである』と云うた。

**我らの直面せる終末と再臨**　終末と再臨に就て純粋な靈的立場をとる人たちはこう考へる。終末とは歴史の有形的な終りを意味するものではなく、此の世界はその根柢において終末的であり、現在に於て私共は終末に直面しているのである。キリストは聖書に文字通り示された如き狀態において再臨されるのではなく、私共が生けるキリストに直面する時再臨があるのである。即ちキリストを信ずるまことの信仰はとりも直さず、終末と再臨とを意味するのである。

この様な純粋に靈的な立場を離れ、人類の今迄の歴史をキリストを中心として見て行くならば終末と再臨が理解出來るであろう。奴隷を使役したギリシヤ、ロマがキリストの福音がひろがることによつてその文化が審かれ宗教改革によつて封建制度の罪惡が審かれて人格の尊嚴と個人の自由が認められるに至つた。更に資本主義が發達して勞働者という新しい奴隷制度が生れると、キリスト教の精神がこれを解放した。軍國主義が力を揮う時はキリスト教はその審判者となる。

世界はまだ動亂と苦惱を經驗するであろうが遂かれ早かれ一つになり、人類は戰爭をやめ、愛をもつて結びつき惡の力は絶滅され、道義が正しく行われ、凡ての人々が相愛するような世界が來なければならぬ。それは不可能ではない。こうした世界を實現するものは神の審判とキリスト教の救の力である。これが實現した曉にはキリストは肉眼には見えないが人類に君臨しているのである。要するにキリスト教に於ては、世界の終末とは神の宇宙と人類創造の目的完成を意味する。神がその目的を完全になしとげた時が終末である。そして終末は神の此の世に對する審判、キリストの再臨となつて現われる。

初めてキリスト教の終末觀に接した人はその奇異なるに驚き、一應これを迷信であるかの如く考え易い。しかし深くこれを究める時、キリスト教の終末觀が如何に深遠な眞理を含んでいるかが解る。終末觀はキリスト教信仰の極致である。多くの場合一つの時代を導く思想は此の終末觀の上に立つているのである。

# 教會と禮典

## キリストの身体としての教会

教會と云えばキリスト信者が禮拜のため集まる場所にもとれるし、又或信者が屬している一地方の信者の團體を指すこともあるし、又一つの宗派に屬する數個の教會の集團、即ち教團を意味することもある。しかしほんとの意味における教會とは『キリストの身體』である。『汝らはキリストの身體にして各自その肢なり』（コリント前書一

この身體はイエス・キリストを首(かしら)とし、信者を肢體とする。『御子は萬の物より先にあり、萬の物は彼によりて保つことを得るなり。而して彼はその體なる教會の首なり』(コロサイ書一ノ一七―一八) とある通りである。この身體は永遠の生命をもち、既にこの世を去つた信者と、現在此世にある信者から成り、將來キリストを信ずる者を加えて行く。

**この身體にあつては、** キリストの惠みは四肢の末に迄行き渡る。つまり教會に屬している者はキリストの生命に連なり 罪の赦しを受け、その惠みにあずかる。又この身體をなしている各部分、つまり信者は、めいめいその能力、天分に從つて役目を持ち、教會のために働き かくて教會はキリストの意志を實現し 世界完成の目的を遂行して行くのである。パウロはこれについて『われらが有てる賜物はおのおの與えられし恩惠によりて異なる故に、或は預言あらば信仰の量にしたがひて預言をなし、或は務あらば務をなし、或は教へをなす者は教へをなし、或は勸めをなす者は勸めをなし、施す者はをしみなく施し、治むる者は心を盡して治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなすべし』(ロマ書一二ノ六―八) と言つている。

**聖徒の交りとしての教會** 教會に屬する信者はキリストを中心として交りをなす。この意味に於いて教會とは聖徒の交りである。キリストを信ずる者は、教會にあつて、世の常の關係以上の關係に於て結ばれている。教會のうちには聖靈がみち、教會員たる信者は聖靈のうちにあつて一致協力し、祈りを共にし、苦しみを共にし、慰め勵まし合うのである。

『信仰は一つ、バプテスマ(洗禮)は一つ、凡ての者の父なる神は一つなり』(エペソ書四ノ五) と云う信仰によつて結ばれた信者が、この世の肉親以上に深く、強い愛をもて結ばれ現世より來世にかけ永遠にかわらぬ交をなして行くのが教會である。『彼らは使徒達の教を受け、交際をなし、パンを擘き、祈禱をなすことを只管つとむ』(使徒行傳二ノ四二) 『もし神の光のうちに在すごとく光のうちを歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血すべての罪より我らを潔む』(ヨハネ第一書一ノ七) とある通りである。

キリストを信ずる者が教會から離れて獨立して存在することはあり得ない。信ずると言うことは教會に加わると云うことである。教會を離れて、自分ひとりで神を信じていると言うが如きは、まだ信仰の何たるかがわからないのである。信仰生活はキリストの身體の一部となつて生活して行くことであり、信者同志の靈的交りの中に生きることである。かくてこそ信仰は進み、救は與えられるのである。

**見ゆる教会と見えざる教会** 教會がキリストの身體である以上、それは全世界を通じ、又過去、現在、未來を通じて、一つでなければならぬのに、實際には宗派がいくつもあつてわかれているのはどう解釋すべきであろうか。

もともと教會はキリスト昇天後、福音が各地に傳えられるに從つて各地に出來たものであり、それが次第にまとまつてローマとコンスタンチノポリスの二つの教會を中心とするに至つたが、中世の宗教改革によりロマ教會

に對してプロテスタント教會(新教)が起り、又新教が各宗派にわかれたために、色々な派があり教會がいくつもある樣に見えるのである。しかしこれら見える教會は地上の教會であり、この地上の教會の奥に見えざる教會がある。見えざる教會は天にあり、キリストを中心とし、救われて天に昇つた聖徒より成つている。それは、過去、現在、未來を通じ唯一つであり、あらゆる民族、あらゆる國家、あらゆる階級を包容し、眞に普遍的なものである。

「神は時滿ちて經綸に從ひ、天に在るもの地に在るものを悉くキリストに在りて一つに歸せしめ給ふ」(エペソ書一ノ一〇)たのが、見えざる教會である。地上の見ゆる教會はこの見えざる教會の植民地であり、その生命は天上の教會より來るのである。

ロマ・カトリック派では、教會と言うものはロマ法皇を長とするロマ・カトリック教會を意味し、これが唯一の教會であり、その他に教會は存在しないと主張する。從つて見ゆる教會と見えざる教會とを區別しない。

教會がキリストの身體である以上、それは一つでなければならないから、地上の見ゆる諸教會も一つとなることが望ましいのである。

## 教会の起原



イエスは十二弟子を選ばれ救の事業を彼等に行わしめ給うた。(マタイ傳一〇ノ二以下) 教會の種はこの時に蒔かれたと云つてよい。福音書にはマタイ傳だけにイエスが教會と言う言葉を使われた箇所が二ケ所ある。(マタイ傳一六ノ一八、一八ノ一七)しかし後世の教會の樣な制度組織をもつたものはイエス在世中は存在しなかつた。

教會がはつきりした姿をとつて現れたのはイエス昇天後の五旬節(過越節より五十日目、收穫感謝祭)に於てゞあつた。即ちエルサレムに於て弟子たちが一ケ所に集つていた時、聖靈が降つて非常な感激にみたされ、ペテロが說教し三千の人々が洗禮を受け キリストの弟子となつた。信じた者は皆に居り生活を共同にした。かくてキリストの教會は誕生し、福音が地中海の沿岸にひろまると共に、各地に教會が建てられ、遂にロマに、次で歐洲に、そして世界各地に教會が組織されたのである。

## 洗礼と聖餐

プロテスタント教會(新教)に屬する教會には禮典として洗禮と聖餐とがある。洗禮は、キリストを接けその弟子とならうと決心した者が教會に加わるために受ける禮典である。

**受洗に必要な備え** 洗禮を受けるためには悔改と信仰告白とを必要とする。キリストを信ずる信仰をもち、

己が罪をはつきりと自覺し、今後の生活態度を改め、神中心の生活をなす、つまり新生に入らんとする決心が必要である。

洗禮は牧師によつて行われる。教派によつて受洗者の全身を水に浸す仕方あり、頭に水をそゝぐ仕方もあるが通例は牧師が受洗者の頭に水をそゝぎ『父と子と聖靈の御名によりて何某に洗禮を施す、アアメン』と宣べ牧師の祈禱、教會の長老の祈禱等が行われて式を終る。

洗禮は受洗者がキリストの弟子となり、罪の赦しを受けて新生活に入り、キリストの身體であり聖徒の交りである教會に受入れられることを意味する。

洗禮はキリスト以前に既に存在したもので異民族がユダヤ教に改宗する場合に行われたし、又バプテスマのヨハネは神の國の到來を預言して民衆にバプテスマを施した。キリスト教はこれをとつて悔改めと新生への印たる禮典とした。キリストは『人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入ること能はず』(ヨハネ傳三ノ五)と仰せられ又、『汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈の名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ』(マタイ傳二八ノ一九―二〇)と弟子達に命じ給うた。洗禮はこの御命令に基ずいて行われるのである。

**聖餐についての二つの見解** 聖餐は洗禮を受けて信者となつた者が守るところの禮典である。教派によつて仕方は異なるが、祈りを以てパンを食し葡萄酒を飲むのである。



キリストは敵の手に捕えられる夜、弟子たちと食を共にし給うに當り、パンをとり神に祈つて後、之を弟子たちに擘き與え、『これは汝等のための我が體なり。我が記念として之を行へ。』と仰せられた。又葡萄酒の杯をも前の如くして仰せられた。『この酒杯は我が血によれる新しき契約なり。飲むごとに我が記念としてこれを行へ。』(コリント前書一一ノ二三以下)

聖餐はこゝに據所をもつのであるが、そのパン及葡萄酒を如何に解釋するかによつて、教義の上に差異が生ずる。

ロマ・カトリック派に於ては、聖餐のパンはキリストの體そのものであり、葡萄酒はキリストの血であるとなし、信者がパンを食することを聖體拜領と呼ぶ。キリストの體を食することによつて人間のうちにある超自然的生命はその糧を與えられる。『我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食はゞ永遠に活くべし。我が與ふるパンは我が肉なり、世の生命のため之を與へん。』(ヨハネ傳六ノ五一)は意義通りに解せられ、聖餐のパンはキリストの肉そのものと信ぜられるのである。

プロテスタント各派は之とは見解を異にする。ルーテル派に於てはパンと葡萄酒とはキリストの肉となり血となるは變化しないが、パンと葡萄酒と共にキリストの肉及血は存在して、信者によつて受けられると信じ、その他の新教の多くの派では、パンと葡萄酒によつてキリストの肉と血とが象徴されるとなすのである。又クエーカー派や無教會主義に於ては聖餐式は執り行わない。

聖餐については種々な見解があるが、要するに信者は信仰を以て聖餐を頂くことによりキリストとの交りを一層深め、罪よりの潔めを經驗する。信者は之によつて主キリストと食卓の交りをなすのである。パンと葡萄酒とは信者にキリストの惠みを與える。又信者同志の聖徒の交りを深める。

パンと葡萄酒とを弟子たちに與え給うに當りキリストは『神の國にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものを飲まじ。』（マルコ傳一四ノ二五）と仰せられた。聖餐は神の國完成を待ち望んで行われるものである。

**その他の礼典**　プロテスタント教會に於ては禮典は洗禮と聖餐の二つであるが、ロマ・カトリック教會にはその他に五つの禮典がある。即ち堅振、悔悛、終油、品級、婚姻である。堅振とは司教が之を受ける者の上に手を延べて聖靈とその賜物とを神に懇願するものであり、信仰生活を強める爲のものである。悔悛とは信者が洗禮後に犯した罪を痛悔して、司祭の前に告白し、赦しを受けるものである。終油とは司祭が聖油を病人の體に塗布し、罪の赦しを祈り求め、病氣や死の苦しみに打勝つための恩寵を求めるものである。品級は聖職を叙する儀式であり、婚姻は結婚の式である。



## 教会の機能

キリストを信ずる者の信仰は教會によつて養われ、深められ、強められる。教會に於て最も大切なのは禮拜である。信者は集つて神を讃美し、神に奉仕し、神を拜む。萬物は神に創られ支配されているのに、神を拜むことをしない。獨り人間のみが神を知つている。而してキリスト信者のみが正しき意味に於て神を讃美し、神を拜むのである。禮拜をなすことに於て人は宇宙の祭司となる。萬物に代つて全宇宙の祭をとり行うのである。禮拜は人間生活の至高の行爲である。

新教各派にとつて禮拜に於て最も重要なのは説教である。説教は講演や演説ではなく、神を讃美し福音を傳え信仰を強めることであり、それは禮拜の中心をなすのである。聖餐を重んずるロマ・カトリック教會ではミサが禮拜に當る。ミサは聖體拜領（聖餐のパンを頂くこと）を中心とする儀式である。

教會は信者を訓練するところである。現代の人々は個人の自由を亂用しすぎて、ともすれば自己の氣分に安住し、獨りよがりの眞理探究をなし易い。過去現在にわたり生ける體として存在する教會に加わり　信徒の交りの中にあることによつて、人は正しく訓練され、誤りなき眞理を得、正しき信仰を養われる。この意味に於て教會は靈的學校であり、修道場である。

第三に教會はこの世を神の國となすべき使命をもつている。世界の全人類がキリストの弟子となり、全世界が一つの教會となることこそ神の御意である。然しながら教會の方は未だ全世界を完全に動かすに至つていない。殊に我國に於ては新舊兩教を併せても信者の數五十萬に滿たず、社會一般に對しその勢力は大きなものとは言え

16086

ない。それにも拘らず、教會は異教の世界における天國の植民地である。明治、大正の歴史を究める時、キリストの教會が如何に社會を淨化する力をもつていたかがわかる。

ギリシヤ、ローマの文明が人類を頽廢せしめた時、取るに足らぬと思われた初代キリスト教會は之を墮落から救う働きをなした。現代の頽廢より日本人を救うものは取るに足らぬと思われているキリストの教會の任務である。



## 教会の強化と罪悪との闘争

初代教會はローマ帝國の猛烈な迫害下に組織され發展した。初代キリスト教徒は地下穴の墓にもぐり此處を禮拜の場所とした。ネロ、ドミチアンを始めとし歴代の皇帝の迫害により無數の殉教者を出したにも拘らず福音は次第にひろまり、遂にローマ帝國はキリスト教を國教とし教會を公認せざるを得なくなつた。かくてキリストの教會はローマ文明のもつところの罪悪に勝利を得たのであつた。

現代の教會はこの氣魄をもたねばならぬ。殊に我國の教會はこの精神的、政治的危機に際して一層強力な闘爭を行い、天にある教會の光と生命とを地上に廣くもたらさねばならぬ。

之がため最も大切なことは教會の内側を固めることである。人の生くるは己れのためではなく神の榮光の爲なることを自覺し、教會員が團結して神の榮光を現すことに努め、貪欲、奢侈から潔められ、有てる物を神のため献ぐることが肝要である。殊に信者の間には自分たちがキリストを頭とする一つの體であり、各個人はその肢であるとの自覺をもち、一つの肢苦しまばもろもろの肢ともに苦しむ（コリント前書一二ノ二六）ことを知り、各自の個性を生かし、その能力を主の榮光のため發揮するに努むべきである。

殊に重要なのは生活の協同と相互扶助である。此點より見て現在の教會はその機能を十分發揮していない。キリストの體に屬する者の間には肉親の親子兄弟に勝るとも劣らぬ愛がなければならぬ。病氣、失業、災難等のため教會の兄弟姉妹が苦しむ時は互に扶け合わねばならぬ。信仰を一つにする者は生活をも共同にすることが理想的である。教會は靈の團體、祈りの團體であると同時に生活共同の團體である。生産、配給、消費の部面に於ても信者同志が一體となり助け合いたいものである。

共産主義或は社會主義は外部からする法律又は制度によつて生活を規律しようとするが、信仰による共同體たる教會は内より溢れ出ずる愛により、共産主義、社會主義の狙うもの以上のものを實現しなければならないし又實現し得るのである。

以上の如く教會の内部が固まるならば、外に向つての働きは強くなる。現代の自己中心、物質中心の思想と闘い得るし、この世に跋扈する罪悪と闘爭し之を屈伏し得る。迫害が加わつても初代教會の信者の如く信仰を貫き得るのである。

## 教勢の拡大と教会の合同

世界に永遠の平和と眞の幸福とをもたらすべき任務はキリストの教會にある。而してキリストの教會によらなければ永遠の平和と眞の幸福とは實現しない。之が爲には教會は神に反抗する勢力と闘い之を屈服せしめなければならない。神に反抗する勢力、即ち惡魔は、或は何々主義と云う思想の形をとり或は人間の肉の弱さにつけ込み、到るところに力を振つている。惡魔の手より人間を救うことは主キリストの恩寵によるより外に道はない。即ち教會は傳道の活動を展開して多くの魂を捉えキリストの體たる教會に加えることを要する。そこに教勢擴張の問題があるのである。

十六世紀以來分裂せる個々の教派はいづれもそれぞれの立場に立つて教勢擴張のため闘つて來た。しかし今や他の勢力例へば、共産主義も軍國主義も、全世界を動かす大きな勢力となり惡魔はこの勢力を利用しつゝある。この強大なる勢力と闘う爲、全世界の諸教派は此際合同し、天上の見えざる教會と地上の見ゆる教會とは完全に一つとなることを要するのである。

第十六世紀前半は教會分裂の世代であつたが第二十世紀後半は教會合同の時代でなければならぬ。全世界のキリスト信者が、宗派の別を棄てゝ大合同をなし、福音傳道の戰線を統一し、惡魔との闘爭に勝利を博する時、恒久的な平和は世界を訪れ、全人類は愛によつて結ばるゝに至るであらう。



# 信仰生活に就て

## 祈りの生活

キリストを信じ教會に加わつた者は新生に入つたのであるからその生活も信仰のない時とはちがつたものになる。信仰生活のうちで第一に大切なのは祈りである。

祈りは人間が神と語ることである。神は人に呼びかけ給い、人はこれに應答する。唯感傷的に自分の感想を述べたり思つていることを語るのは獨語であつて祈りではない。救主キリストを仰ぐ時、活ける神は我を呼び我に話しかけ給う。そこで我が魂は感動し祈りをなさざるを得ない。『我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みづから言ひ難き歎をもて執りなし給ふ。』(ロマ書八ノ二六) とある通りである。

祈りに於て私共は神を讃美する。又神に感謝する。或は己が罪咎を神の前に懺悔する。又神に請願をする。殊に人生の樣々な問題にぶつかる時その唯一の相談相手は天に在ます父なる神である。又、世の中にあつてあくせくと生活をした後、密室に於て神と語ることは無上の慰めである。悲哀、寂寥に堪え得ぬ時、我が心中を打明け

て、頼りすがるべき相手は神以外にはない。

**如何に祈るべきか**　祈りによつて私共の神に求むるものは、我意を通すことではない。神の御心を知り之に従いまつることである。イエスは十字架につけられる前夜、ゲツセマネの園に於て、『我が意のまゝにとにはあらず、御意のまゝになし給へ』と祈り給うた。（マタイ傳二六ノ三九）

祈りは自分の都合のよい様に物事を變化せしめることを目的とするのではなく、神の御心を知り、すべてを神にまかせまつることを念願するものである。

キリスト者の祈りがいかにあるべきかは、主の祈に示されている。（マタイ傳六ノ九）

『天にいます我らの父よ。願くは聖名のあがめられんことを。御國の來らんことを。聖意の天の如く地にも行はれんことを。我らの日用の糧を今日も與へ給へ。我らに負債ある者を我らが免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ。（國と權と榮とは限りなく汝のものなればなり）』

この祈りは悉く神を中心として居り自己中心のものは一つもない。先ず神を天にいます父なる神よ、と呼びかけ、神の聖なる御方であることを讃え、次で神の國の到來を請い求め、天國に於て神の御意が完全に行われる如く、この地上にも行われ、罪惡にみてる此の世が神の惠みによつて天國の如く成ります様にとお願いする。この様な大きなそして高い願いに次で祈る者自身のことに及ぶのであるが、日々必要な食糧を今日も與え給えと祈るのは、決して自己中心ではなく、この身は神のものである故に之を養い力を與え神の御用に立つ爲に、必要な食



物を與え給えとお願いするのである。私共は神の御意に従い奉らうとするが、惡の力に動かされて常に罪を犯し神に對して負債をもつ様になる。そこでこの罪の赦されんことを求むる。しかし私共は、他人が自分に對し犯した罪を赦すところの愛をもたねばならぬ。己れの罪は棚上げしておいて他人を責めてばかりいる様では、神に對し罪の赦しを求める資格はない。それ故私共に負債ある者を私共の赦したる如く私共の負債をも赦し給えゝ祈るのである。次に此の世には惡魔の力がはびこり、絶えず私共を誘う。私共は神を中心にして人を愛し善事を行つてゆこうと心掛けているのに、強い力が外から働いて私共を動かし惡をなさしめる。これからまぬがれんとせば自力だけでは駄目である。神の力を頼らねばならぬ。我らをこゝろみに遇せず、惡より救出し給えと言うのはこの願いである。最後に神の國と神の權力と神の榮光とを神に歸し、その限りなく存續すべきことを述べて、神を讃美するのである。

**或る宗教がどれだけの價値のあるものかは祈りの内容を調べて見ればわかる。**家内安全、商賣繁昌だけ祈り他人のこと世の中のことは顧みぬ祈りもあり、甚だしいのになると人を呪う祈りもある。

キリスト教が最高の宗教であり、絶對なものであることはその祈りを見ればわかるのである。

キリスト者の生活は祈りの生活でなければならない。教會に出席する時は勿論のこと、家にあつても職場にあつても、朝な夕な、又事あるごとに、一人で又は同信の友と共に、祈りをすることが大切である。祈りは神との交りであるから、之によつて私共の信仰は進み、人生のあらゆる問題に對處して神の御意に添う解決を得ること

が出來るのである。そして祈りによつて私共は神と交り永遠の生命に與り得るのである。

## 愛と奉仕の生活

律法のうちいづれの誡命が最も大きなものかと問われた時、キリストは二つを擧げ給うたことが聖書に記されている。（マタイ傳二二ノ三六以下）即ち『なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし』『汝おのれの如くたんぢの隣を愛すべし』

神を信仰し全身全靈を神に捧げまつることが即ち神への愛である。罪人である私共が信仰により神から罪を赦された時、私共は隣人に對し積極的に働きかけ之を愛せずにはいられない。かくて神への愛は隣人への愛となるのである。

キリスト者の生活は神を愛し神に仕えまつることであり、そのことは同時に人を愛し人に奉仕することゝなつて現れる。

わかり易く言えば、神は私共人間のお父様である。唯一人のお父様の下に暮している私共人間は皆兄弟姉妹である。信仰が進み、お父様の愛の深さがわかれば、人間同志が兄弟姉妹であることが一層よくわかり他人を愛せずにはいられなくなつて來る。殊に苦しみ惱む者を見ては、出來るだけのことをして之を助けてやりたいと思う。また自分を憎み自分に害を加えようとする人があつても、その人が神の下にあつて自分と兄弟であることがわかり、神はその人の魂を限りなく愛し給うことを悟るならば、その人を愛し、その人のため祈つてやらずにはいられない。こゝに敵を愛する愛の由て來るところがあるのである。（マタイ傳五ノ四四）

キリスト者が信仰生活を送るに付ては同信の者を愛するは勿論のこと、信仰のない人にも又己れを憎む者をも愛し、人のため世のため奉仕することが肝要である。殊に新教徒（プロテスタント）にとつては此の現實の人生そのものが修道院である。現實の人生から逃避することなく、罪惡にみちたこの世の中で、職場にあつて働きながら愛と奉仕の生活をなし、山上の垂訓（マタイ傳五章、六章、七章）を實踐して行くことが、神の御意を行う所以であり同時に己が人格を完成する道である。

『さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。』（マタイ傳五ノ四八）とは己が仇を愛せよとの主の教えにつゞいて仰せられた言葉である。コリント後書十三章に於てパウロは愛に付て驚くべき教を私共に與えている。

人間は道德を守り行わなければならぬが、道德を完全に守ることは普通の人にとつては中々の努力が要る。努力して道德を守つたなら安心出來るかと云うとそうでない。道德だけを目あてにしていたのでは道德そのものをも十分行い得ないし、救いも得られない。『律法の行爲によつては、一人だに神のまへに義とせられず』（ロマ書三ノ二）である。

しかし神への信仰と愛とが原動力となるならば道德は容易に行われる。善そのものために善を爲す、と言う意志は信仰によつて與えられるのである。キリスト者の日常生活に於ては、形に捉われた道義よりも、愛から發

しておのゝから道義を守るに至ると云う生活態度をとる。その爲虚禮虚飾は廢せられ、愛の發露としての誠實な行爲が重んぜられる樣になるのである。

## 感謝の生活と苦難の意義

罪深い我が身がキリストの贖いによつて救われたことがわかるとこんな有難いことはない。一度自分は死んでまたよみがえつたわけであるから、見るもの聞くもの悉く感謝であり、自分の身の上に又家族の身の上にどんなことが起つても、悉くこれを神の御意であるとして、感謝を以てこれを受けて行くのである。ここにキリスト者の感謝の生活がある。

日々の糧を頂き、自分も家族も何不自由なく暮せる時は勿論感謝である。更に進んで他人に奉仕できるならばこれ又感謝である。

しかし人間の生活には、此の世的に見てよいことばかりつゞくわけではない。病氣、災難、死別等の不幸が來る。よいことが續く時は神に感謝するが、不幸なことが來ると感謝しない。苦だしいのは神を呪うと言うことがまことの信仰をもたない人の態度となり易い。

ところが、キリスト者にとつては、此の世の不幸苦難に對しても、常に祈りを以て神の御心のあるところを知り、之を受けて堪え忍ぶことが出來るのである。否、寧ろ進んで苦難のうちにあつて神に感謝し喜びにみたされることが出來るのである。

人生の不幸のうち最も大きなものは死であるが、死を以て我が生の終りと思わず、よりよき世界である天國への出發であると信じ又死によつてキリストの許に到り、キリストと偕に居る光榮に浴し得ると云う信仰を持ているから、己れの死についても、又肉親の者が信仰をもつている限り、その死についても、感謝と希望をもつのである。

『我にとりて生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。されど肉體にて生くること、わが勤勞の果となるならば、孰れを選ぶべきか、我これを知らず。われはこの二つの間にはさまれたり。わが願は世を去りてキリストと共に居らんことなり　これ遙かに勝るなり。』（ピリピ書一ノ二一―二三）とパウロの言つた通りである。

わが願は世を去りてキリストと共に居らんことなり、と言う信仰を持つならば死は悲しむべきことでなく、感謝と希望とにみちたものとなる。

病氣、苦痛、苦難についても、信仰をもつてすれば解決がつき、それが取除かれなくとも尙その重荷を負うたまゝで、感謝と希望とをもつて生活して行くことが出來る。

一體苦しみについて深く考えるならば、そこに深い眞理がかくされていることがわかる。今最も單純な肉體的苦痛をとつて考えて見ても、人間の身體に傷とか病氣とかがある時、もし苦痛がなかつたならば、そのまゝ捨てゝおき、治るべきものも治らず、却て生命にかゝわることになるかも知れない。患部に苦しみがあつて、痛い痛いと感ぜられるので、その痛みを和げようとして手當をする爲、身體が助かるのである。肉體の苦痛は癒されん

ことを願う訴えであり、生命維持の爲必要かくべからざるものである。そこに我らは造化の妙を見るのである。木石には苦痛はない。苦痛の大きいことによつて人間の生命の價値の高さがわかる。

精神的苦痛は複雜であるから一概には言えぬが、精神が現在の狀態よりよりよき狀態に到らうとする時、苦痛がある。あるものとあるべきものとの相違が甚だしければそれだけ抵抗は大きく苦痛は深刻で、悲劇はそこから生れる。動物の社會には人生における如き悲劇はない。

苦痛は時として私共の人格を鍛える。祈りを以て苦痛に堪え、神の御意を知ろうと努める時、私共の信仰は進み、人格は高められる。苦痛は神が愛をもて私共を打ち給う鞭であることがある。

更に進んで苦痛は罪を贖う働きをもつ。常識から見ても、犯罪を行つた者がそのまゝで放任されていては、世間が承知しない。犯罪者は裁判され刑罰と云ふ苦痛を受けて初めて世の中は治まり、世人は納得し、又犯罪者自身も滿足する。苦痛は良心と關りをもつ。罪の贖いは苦痛によらねば出來ない。そこに苦痛の大きな意味があるのである。

最後に愛には必ず苦しみが伴う。それは人を愛する時はその人の苦しみを自分が負うからである。親は愛故に子の爲に苦しみ惱む。愛は苦しみを伴うて初めて全いと言い得る。苦痛の意味と價値とは愛との關係に於て最も高いものとなるのである。

キリストの十字架の御苦しみは神の義を全うすると共に神の愛を全うしたと言われる。そこに苦痛の秘義があるのである。

キリストを信ずる者は、世の常の人の如く苦痛、苦難を忌むべきものとして避けずにこの中に神の御意のあるを悟り、神が之を取り去り給わないならば、喜んで之を受け、十字架の上に苦しみ給うキリストを仰ぎ見て、神の御意志に從うべきである。

パウロは肉體に一つの病をもつて居り、之がために苦しんだ。彼は三度迄も神に祈つてこれを取去らんことを求めたが、神は言い給うた。『わが恩惠汝に足れり、わが能力は弱きうちに、全うせられるばなり。』（コリント後書一二ノ九）これがキリスト者の苦難に處する態度である。

## 教會生活

教會はキリストの御身體であり、キリストを信ずる者は教會の肢であるから、キリスト者は教會生活をすることによつてその信仰を保ち又之を深めて行くことが出來る。教會を離れる時、人は葡萄蔓が幹から切取られた樣に信仰的に枯れてしまうのである。

教會生活を全うするには先づ禮拜、祈禱會その他の集會に出席し、說教を聞き祈をなし、神を讃美し神に感謝し、己れの罪を神の前に懺悔し、又神より靈の糧を頂く樣にせねばならぬ。特に大切なのは信者同志の交りである。信者はキリストにより互に結ばれたのであるから、血緣以上の深い關係をもつて居り、互に愛し助け合い又

信仰の進む樣にはげみ合わねばならぬ。

『さらば汝ら愛せらるゝ子供の如く神に效ふ者となれ。又キリストの汝らを愛し、我らのために己をかうばしき香のさゝげ物とし犧牲として神にさゝげ給ひし如く、愛の中を歩め。』（エペソ書五ノ一）とある通りである。

『血は水よりも濃し』と云う諺のある通り、洗禮を受けてキリストにおける兄弟となつた關係よりも、肉親の親子兄弟關係の方が強い力をもち易いのであるが、まことの信仰に徹すれば、キリスト者の結び付は、此の世から來世にかけて永遠のものであるから、何物をもつても斷ち切れぬ深いものである。從て信仰の上ばかりでなく、此世の生活についても親身以上に助け合わねばならぬ。

『汝ら召されたる召に適ひて歩み、事毎に謙遜と柔和と寛容とを用ひ、愛をもて互に忍び、平和のつなぎのうちに勉めて御靈の賜ふ一致を守れ。體は一つ御靈は一つなり、汝らが召にかゝはる一つの望をもて召されたるが如し。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、すべてのものの父なる神は一つなり。』（エペソ書四ノ一―六）とパウロは私共に教えている。

**教会に負う信徒の義務**　使徒行傳第二章四十三節以下を見ると初代キリスト教徒の生活が次の樣に記されてあるが、これが現代においてもキリストの教會に屬する者の生活の理想でなければならない。

『信じたる者はみな偕に居りて凡ての物を共にし、資産と所有とを賣り各人の用に從ひて分け與へ日々心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき歡喜と眞心とをもて食事をなし神を讃美して凡ての民に悅ばる』



洗禮を受けて初めて教會員となつた者のうちには、教會と言うものが立つて行くためには、自分が應分の負擔をしなければならぬと言うことをよく辨えないものがある。教會が此の世に立つて行く以上はその財政的な基礎がしつかりせねばならぬ。教會の中には外國の傳道團から援助を受けているものもあるが、多くの教會は獨立のものであり會員各自の力によつて財的に支えられて行くのである。そこで教會員たる者は献金をせねばならぬ。

この献金が牧師の生活を支え、又教會が外部に向つて傳道をなす場合の資金となるのである。献金は租税とちがい、信者が自らの意志によつて金額を定めて、神に捧ぐるものであり、献金をすることは最も大切な宗教的行爲であり、神への禮拜の一部である。任意であると言うので、金額はいくら少額でもかまわぬと言うことは間違いで、自分の收入と教會の財政とを比較研付し、必要なだけのものを出來るだけ負擔せねばならぬ。

金錢のことを口にすると信者、求道者への躓きとなるから、牧師はこれを口に出せぬ故、教會員自らよく考えて責任をもつ樣にせねばならぬ。

献金には維持献金、禮拜献金、臨時献金、感謝献金等の別がある。維持献金と言うのは、教會員が月々定まつた額を献するものであり、禮拜献金とは禮拜の時に献げるものであり、臨時献金とは、クリスマスその他特別の機會に捧げるものであり、感謝献金とは洗禮を受けたとき、冠婚葬祭、卒業、就職、病氣全快、誕生日その他神の恵みに感謝する時献げるものである。

日本人にはお賽錢の思想があるため、禮拜献金などはこのインフレイションの時代に極く少額をしている樣で

あるが、この點は信者求道者の反省すべきことであらう。

## 傳道の生活

信仰により救われた者はまだキリストを知らぬ者にキリストを知らしめ、何とかして救にあづからせたいと思う。そこでキリスト者は傳道をせずにはいられなくなる。

殊に新教教會にあつては、信者一人一人が傳道者の意識をもつてキリストの福音を他人に傳え、之を救に導く使命と特權とをもつている。信仰生活を送るに當つては私共は未信者に道を傳え、一人でも多くの人を救に入れる樣努力する責任がある。

日本においては、まだ教會の勢力は強いとは言えない。教會はともすれば此の世の力に押され易い。しかし主により賴む者は力を合せてこの世の勢力と闘い、此の世を淨め、人類の文化を導いて行かねばならぬ。

『汝ら主によりて、其の大能の勢威によりて強かれ。惡魔の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふべし。』とパウロは教えている。(エペソ書六ノ一〇) 教會及キリスト者はこの世の經濟や文化の影響を受けるのではなくて、これらのものを正しく動かして行く樣信仰の力によりて働きかけねばならぬ。此の世の權威が惡に巣喰われている時、之と戰つて淨化する運動をなさねばならぬ。傳道はこゝに至つて闘爭となる。すべてのキリスト者は神の鎧をつけて、惡魔の軍勢と闘爭するのである。信仰生活は同時に傳道の爲の闘爭であらねばならぬ。



# 基督教概說

歷史篇

## キリスト教の歷史

### 十字架・復活・ペンテコステ

キリストの十字架につけられた時、弟子たちは絶望して散つたが、復活のキリストに會つて力づけられ、エルサレムを中心として傳道を開始した。

復活後五十日目のユダヤの祭の日に聖靈はかれらに臨み、かれらは非常な感激にみたされ、自分たちの知らぬ各國の言葉で語り出し、聞く人は驚異した。この時ペテロはイエスのキリストなることを宣言し聞く者に感激を與え、三千人の人はその場で悔い改めて洗禮を受け 信者は激增した。

こゝに於てユダヤ教の指導者たちによるキリスト教徒の大迫害が行われた。信者たちはエルサレムを逃れて各地に散つたため、キリスト教は小アジヤに次でヨーロツパに傳わるようになつた。殊にユダヤの北にあるスリヤの首都アンテオケやダマスコ、またエーゲ海に臨むエペソでは在住のユダヤ人の中に弘まり、さらに他の民族にも信ずる者が現われ、各地に教會が作られた。キリステアン（クリスチャン）という名稱は當時アンテオケから起つた。

タルソ（現今のトルコの東南部）の人パウロはきつすいのユダヤ人でロマ帝國の國籍をもつていたが、ユダヤ教に熱心のあまりキリスト教徒の迫害を始めユダヤ教の指導者の命を受けてダマスコにあるキリスト教徒を捕えるために出發し、その城門に近づいた時、イエス・キリストの幻が現われ、彼は地に伏した。パウロはキリストの幻を見、キリストに召された。キリスト教の迫害者は回心してキリストの使徒となり、全生涯を傳道に捧げるに至つた。パウロは地中海沿岸の諸都市に福音を傳え、文化の國ギリシヤに入つて復活のキリストを說き、最後に捕えられて囚人としてローマに送られ、こゝにあつて數年の間傳道した後殉教した。こうしてキリスト教は當時の世界を支配するロマ帝國の首都に入つた。

## ロマ帝國と初代教会

キリスト教がロマに入つて以來、歷代のロマ皇帝は迫害に終始し、その領土內に居住する信者たちは絕えず生命をおびやかされ、多くの者が殉教した。ロマ市內ではかれらは地下の墳墓（カタコーム）を集りの場所とし、禮拜を行つた。迫害の下にあつてキリスト教は次第に帝國內に弘まり、小アジヤ、ギリシヤ、ロマはもちろん地中海の對岸北アフリカにも及んだ。歷代皇帝の迫害もキリスト教を絕滅することが出來ず、かえつて之を根强いものとしたが遂に西曆紀元三一三年コンスタンチヌス皇帝が卽位すると、帝はキリスト教をロマ帝國の國教と定めるに至つた。かくて迫害の時代は去つて自由の時代は來り、キリスト教に關する制度、學問、理論の發達を見た。

當時問題となつたのはキリスト觀であつた。一つはキリストの人間性を强調し、キリストは人間として生れ、神の子となつたという說、もう一つは、キリストの神性を强調して、キリストは初めから神の子であり神性をもつていたとする說であつた。この時代にはシリヤのアンテオケを中心とする東方教會と、ロマを中心とする西方教會に勢力が分れていたからこの問題は東西兩教會の間のはげしい論爭となつたので、これを解決するために紀元前三二五年小アジヤのニカヤ（今のトルコ）で、コンスタンチヌス帝親臨の下に、キリスト教の歷史始つて以來の大宗教會議が開かれた。各地から代表が集つたが、今までの迫害のため殆んど皆かたわになつており滿足な身體をもつている者は少なかつた。最初はキリストの人間性を强調する論が有力であつたが、アレキサンドリヤ教會の執事アタナシウスの主張が通り、イエス・キリストは神と同質なりとの結論に達した。

**初代教会の動向**　初期地中海沿岸の諸都市に作られた教會は夫々獨立し互に助け合つていたのであつたが、キリスト教が全ロマ帝國內に弘まるにつれて、ロマ教會の西方教會に對する權力は次第に强くなつて來た。當時

各教會には監督があり、ババ(父)と呼ばれていたが、ロマ教會監督レオ一世はロマのババはペテロから天國を開く鍵を傳えられていると主張し　紀元四四五年皇帝ウアレンチアヌス三世は勅令を發し、ロマの監督は西方諸教會の元首なりと宣言した。ロマ法皇の制は此の時確立し、ババ(ポープ)は法皇を意味するに至つた。西方諸教會に權力を得たロマ教會に對し、コンスタンチノポリス(コンスタンチノープル)の教會は東方諸教會に勢を振うに至りかくて東西の二大勢力の對抗を見るに至つた。この時代の特色として修道院が發達した。信者は俗世を去つて修道院に入り、隱遁の生活を營む者が多くなつて來た。

キリスト教に於てパウロと並び稱せられる聖アウグスティヌスは此の時代の人物であり、北アフリカのタガステに生れた。その深い信仰と高い人格と懺悔錄(告白)その他多くの神學の著書によつて知られている。北ヨーロッパ諸民族は此の時代に入り南下し始め、ロマ帝國は北方民族の侵寇に苦しみ、紀元四七六年ロマを都とする西ロマ帝國はゲルマン人のために滅ぼされ、コンスタンチノポリスを都とする東ロマ帝國だけが、一五四三年トルコ人に滅ぼされるまで殘つた。西ロマ帝國の滅亡後、ロマの教會は教勢大いに振い、北方諸民族にキリストの福音を傳えてこれを教化した。かくてヨーロッパ諸民族は福音に浴し、蠻族とよばれた北歐諸民族は神の子キリストの救いにあずかるに至つた。

## 西方教会と東方教会

ロマ法皇グレゴリウス一世が紀元五九〇年即位するや、ロマ教會の教勢は益々發展し、ヨーロッパ各地にその教權を伸ばした。ゲルマン民族の長シャーレマン(カロロ)は信仰にあつい人物であつたが、ヨーロッパの大半を平定して領土とし、紀元八〇〇年ロマで皇帝の位についた。法皇レオ三世はかれの頭上に冠をのせて戴冠式を行い、かれをロマ皇帝と呼んだ。彼の帝國はキリスト教を國教としたため、神聖ロマ帝國とよばれた。これが分裂して後のドイツ、フランスとなつた。

第十世紀、第十一世紀はロマ教會の全盛時代である。ロマ法皇の勢力は皇帝以上で、皇帝でも法皇から破門されると諸侯の信を失い、權力を行えぬようになつた。法皇グレゴリウス七世が皇帝ヘンリイ四世を破門したのは此の時代の事件である。ロマ教會とコンスタンチノポリスの教會とは、第十世紀迄は互に關係を保つていたが、教義ト教權の爭いのために分裂し、一〇五二年になつて全く手を切つてしまつた。それから後ロマ教會はロマ・カトリック教會とよばれ　コンスタンチノポリス教會はギリシャ正教會とよばれる。このギリシャ正教會は後にロシヤに傳わつた。

當時多くの信者は聖地エルサレムに巡禮した。然るに第十一世紀に入るやトルコ人が聖地を侵すに至つた。トルコ人はマホメット教徒であつた。マホメット教は紀元六二二年アラビヤ人マホメットによつて始められたもので、ユダヤ教とキリスト教の教理を折衷し之に自己の所信を加えて出來上つた宗教であるが、アラビヤ人のうちに勢を得、中央アジヤを席巻し　さらにトルコ人のうちに擴がり、小アジヤを風靡した。遂にトルコ人はエルサ

レムを侵し、キリスト教徒の聖地巡禮を妨げた。こゝに於てロマ法皇ウルバヌス二世は全ヨーロッパに檄をとばして聖地恢復の軍を起させた。

**聖地恢復の十字軍**　ヨーロッパ各國はそれ〴〵軍隊を編成し、王侯貴族自ら軍に投じ、一〇九六年の第一回十字軍に始まり、一二七〇年の第七回十字軍に終る前後百七十年にわたる聖地遠征が行われた。十字軍參加の將兵はキリストのため身をさゝげ、死して來世の祝福を受けることを確信した。かれらは幾度も聖地を恢復して後またこれを失つた。結局はトルコ人のために、エルサレムは奪われてしまつたが、この十字軍は全ヨーロッパをおうところの大運動であり、中世紀のヨーロッパ人の信仰の熱烈さを物語つている。この時代に「蛆虫の」を「光明の谷」にかえた聖ベルナルドウス、托鉢教團を作り、一世を風化した聖フランチエスコその他の聖者が輩出した。

## 宗教改革の時代

中世紀に絶大な精神的勢力をヨーロッパ人の上に振つたロマ教會も、中世の末期には次第に教權の形式化を來し、一面内部の腐敗を見るに至つた。聖書はラテン語で記され、庶民はこれを讀むことが出來ない。聖書の翻譯をする者があれば、異端として死刑に處せられ、ロマ教會の教義に少しでも批判を加えれば處刑された。教會の墮落は甚しく、法皇の職は金錢で賣買される樣になつた。この頃、イタリーではギリシヤ、ロマの古典に歸る運動が起された。いわゆる文藝復興(ルネッサンス)である。聖書を各國語に譯し、誰でも讀むことが出來るようにしようとの運動も、時代の勢の然らしむるところで、原始キリスト教の時代に立ちかえつて、各人が直接イエス・キリストに接しようとする運動は各地に起つて來た。かくて第十四世紀から第十六世紀にかけて宗教改革が起つたのである。

**最初の改革者**　第十四世紀に現れたイギリスのウイクリフ、ドイツのボヘミヤのフス等は改革者であつた。フスは異端者としてロマ教會から火刑に處せられた。第十六世紀の初めロマ法皇は聖ペテロ寺院建立の資を得るため免罪符の發賣を始めたが一五一七年法皇レオ十三世は、これを大仕掛けにして、北歐諸國に之を買受ける樣制した。

免罪符と言うのは信仰の不完全な者は死後天國に行けず、煉獄に行つて苦しみを受けた後、はじめて救われるというロマ教會の教義から出たもので、人は免罪符というお札を買えば、その功德によつて煉獄の苦しみを免がれるというのである。ドイツのウイッテンベルグ大學神學教授マルチン・ルッター(ルーテル)はロマ教會のこの擧に反對し、九十五ケ條の論題を同大學教會堂の戸に掲げてロマ教會に挑戰した。

**ルッターの活動**　ルッターはロマ教會の壓迫に屈せず、所信をまげなかつた。人の救われるのは、信仰により義とされるためである。各人は皆神に近ずき得る司祭であり、ロマ法皇によらずに救いを得、また人生から隱遁しなくとも現實生活において信仰により義とされる。さらに權威はロマ教會にあるのではなくて聖書にある。聖書こそは神の言であると主張した。

ロマ・カトリック教會、即ち舊教とプロテスタント、即ち新教との別はこの時に生じた。プロテスタントとは抗議する者という意で、ロマ教會に對し抗議したことに由來する。

ドイツ皇帝カロロ五世は法皇を支持したので、ルツターやその同志の上には迫害が加わつたが、ルツターはサクソニヤ侯の保護によりワルトブルグの城にかくれ、聖書のドイツ語譯に從つた。その後政治情勢がかわり、一五三〇年アウグスブルグに國會が開かれ、新教と舊教との調停が試みられる樣になり、結局ドイツ内で新教は殆んどその主張を認められた。

**スイスの改革**　同じ頃スイスにはツウイングリおよびカルヴアン等の人傑が改革を唱えてロマ教會から獨立し、又改革の影響はオランダ、スコットランド、デンマーク、スエーデン、ノルウエーにおよび、これらの國はロマ教會の束縛をはなれた。

改革はフランスでも行われたが、新教徒は國王と法皇との迫害を受けたため獨立は實現しなかつた。

**英國の改革**　英國は宗教改革の波にまき込まれなかつたが、ロマ教會を離れて、英國獨自のキリスト教を立てようとし、一五五九年エリザベス女帝の時になつて實現した。英國々王は國の元首であるとともに宗教の首長となり、祈禱書や教會法典が制定された。聖公會は英國國教である。

各地に宗教改革の運動が起るに應じてロマ・カトリック教會内部にも改革の聲があがり、イグナチオ・ロヨラ其の他の大人物が現れて教會内部の改革を實現し、ロマ・カトリック教會はその力を盛りかえした。

## 旧新両教勢力の闘い

かくてヨーロッパは新教國と舊教國との二つに分れた。ドイツには新教を奉ずる者が多かつたが皇帝は舊教に味方した。そのため一六二〇年新教の中心地ボヘミヤから亂が起りこれがきつかけとなり、新舊兩教勢力は互に干戈を取つて立ち、皇帝は舊教國スペインの力を借りて新教徒と戰つた。

スエーデン王グスタフ・アドルフはドイツ新教徒を救うため兵を率いて南進し、皇帝又ワレンスタインを用いて戰い、戰爭は前後三十年に亘つたが、勝敗決せず、フランスのリシュリーの外交的活動によつて一六四八年に至つてウエストファーレンに講和會議が開かれ結局新教徒もその信仰を保つことが認められ、舊教の勢力をもつて新教を絶滅することも出來ないし、また新教が舊教を壓迫することも出來ぬこととなつた。この戰爭により中世の封建制はこわれ、近世が始まつたのである。

第十七世紀に入り、多くの哲學者、科學者が現われて新説を主張した。キリスト教に對する哲學的批判もまた各地に起つた。一方では宗教的敬虔を重んずる風潮も各方面にあつた。その中でも英國の清教徒（ピューリタン）は注目に値する。清教徒は生活の清淨を尊ぶキリスト教の一派で、スイスの改革派カルヴアンの流れを汲み第十七世紀初め英國に渡り、次第に勢力を増した。スチュアート王朝は清教徒を迫害したため彼等のある者はオランダに逃れ、そこから新大陸米國に渡つた。メイフラワー號に乘つて大西洋を越えたピルグリム・ファザース（巡

禮父祖）と呼ばれるのはこの人々で、米國開拓の祖であり、今日まで米國にはこの清教徒精神が傳わり國民を動かしている。

第十七世紀の中頃に至り、清教徒の勢力は英議會において強くなり、國王チャールス一世は王權の絶對性を主張して議會を壓迫し、こゝに議會と國王との衝突は始まつたが、清教徒の闘將クロムウエルは兵を率いて國王と戰い遂に國王を處刑して、自ら英國の統督となり、廿年の間英國を治め、ピューリタン精神に基ずく政治を行つたが、クロムウエル死して王政は復古した。

**プロテスタントの発達** かくて英國々教は再び勢を得たが、第十八世紀に入るや、社會の道德は頽廢し風俗は亂れた。この時ジョン・ウエスレーが現れて、高潔な人格と深い信仰とをもつてキリスト教の眞髓を傳え、一世を動した。メソヂスト教會の祖はウエスレーである。

クエーカー派の祖ジョン・フオツクスはまた英國の人、スエーデンの科學者で說教家スエーデンボルグもまたこの時代の人物であり、いずれも熱烈な信仰により時代を動かした。

第十七世紀の初めから米國植民は始まつたが、英國及びヨーロッパ大陸から、各宗派の人々が新大陸に渡つたため、米大陸においてはキリスト教は自由闊達な發達を遂げた。

第十八世紀末、フランス革命が起り、理性は尊重され、宗教は一時影をひそめたように見えた。又、第十九世紀に入りダーウインの進化論を初めとしていろ〳〵な科學的發見、發明がなされ、科學者は神秘の扉を開いて、キリスト教はその根抵をゆすぶられるかに見え、中にはキリスト教の信仰は無知から來る迷信と考える者さえ現われるに至つた。

しかしながら更に科學が發達し深遠なる研究がなされる現代においては、科學は宇宙の森羅萬象における統一と秩序とを明かにし、人をして神の創造と經綸に眼を開かしめ、却つて信仰に基礎を與えるに至つた。そして偉大な科學者のうちに信仰深い人物がぞく〳〵と現われた。

第十九世紀から第二十世紀にかけて米國及西歐の諸教會はアフリカ、印度、支那その他東洋各地に活潑な傳道を行つた。その結果福音は全世界に宣べ傳えられるに至つた。かくてキリスト教はあらゆる時代の變遷を通つて、その眞理を一層明かに人類に示し、人類の文明を導きつゝある。

## 日本の傳道の歴史

わが國にキリスト教の渡來したのは天文十八年、今から約四百年前である。最初渡來した宣教師はフランチエスコ・ザヴエリヨで、彼は武家たちに福音を傳え、豊臣秀吉の臣のうち多くの信者が出た。

ザヴエリヨはイグナチオ・ロヨラと共に舊教のイエズス會を興した人である。秀吉はキリスト教の勢力の大きくなるのを恐れ之を禁じたため、多くの信者が殉教した。徳川幕府もキリスト教を禁壓した。島原にこもつた信者は寛永十四年に亂を起し、幕府の征討軍とよく戰い、全員節を變ぜず殉教した。かくて我が國における天主教

は衰亡してしまつた。

嘉永六年のペルリ來航、安政三年のハリス來訪に次いで、米國宣教師は渡來して我が國に新教を傳えた。切支丹邪宗門禁制は明治六年に撤廢され、これより、新教、ロマ・カトリツク教會、ギリシヤ正教會、いずれも傳道を始めた。殊に新教には天下の人材が集まり、教會も各地に建てられ、外國宣教師をはなれ、日本獨自の教會を組織しようとする運動が起るに至つた。現在の日本基督教團は日本における新教各派の合同した教會である。

## 欧洲文明とキリスト教

ロマ帝國以後のヨーロツパの歴史はキリスト教の歴史である。キリスト教を離れては、今日の歐洲の文化はもちろんのこと政治、經濟、社會その他百般の事象を正しく理解することは出來ない。キリスト教を建國の精神とするアメリカについても同樣である。

神はイエス・キリストを降し、人類を導き給うた。人類は時に神に叛いた。しかし大きな立場から見るならば結局は神の導きに從つて動いてきた。歴史は實に神の經綸である。

ユダヤ民族より出たキリスト教は、まずギリシヤに入り、その哲學的天才と結びついた。キリスト教神學はその所產である。次いでロマに入り、ロマ人の政治的天才と結びついた。ロマ・カトリツク教會という强固な政治的組織はその結果であつた。キリスト教が敢爲の氣象に富むゲルマン人に入るや宗教改革となり、實行的なアン



グロサクソンに入るや、近代の世界的大傳道が展開された。

このように諸民族を通し、その特色をとらえ、又之を發展せしめ、遂に日本民族に入つたキリスト教は、今後如何なるものを此國において創り出すであらうか。

キリスト教は日本人を捉え、その特質を生かしつゝ、これに新しき生命を與えると共にまた日本人のよさを吸收して、そこに未だかつてなき何物かを生み出し、人類の歴史を動かす力となるであろう。

## キリスト教の諸宗派

キリスト教の宗派を大別すると三つになる。ロマ・カトリツク教會（旧教又は天主公教）ギリシヤ正教會及び新教（プロテスタント又は福音主義キリスト教）である。

**ロマカトリツク教会**は正式には神聖公同使徒的ロマ教會と呼び、キリストの弟子聖ペテロに源を發する。ペテロはキリストから天國の鍵を與えられた。（マタイ傳一六ノ九）ペテロの後繼者はロマ法皇であり。ロマ法皇を元首として作られたキリストの教會は即ちロマ・カトリツク教會である。その主張によれば世界には教會は一つあつて二なく、唯一の教會は天主公教である。又ロマ法皇は最高絶對の宗教上の權限をもち、無謬である。そしてこの教會は全人類に普遍の教會であるというのである。（カトリツクとは一般的又は普遍の意）世界各國に組織と信徒をも

つ。信徒數は約三億である。日本に於ける信者は約十一萬人である。

**ギリシヤ正教**は正確には『神聖にして正統なる公同の使徒的東方教會』と云う。ロマ教會が西方諸教會の上に力を振つていた時、ギリシヤ、小アジヤの諸教會は思想教義に重きをおき、コンスタンチノポリスの教會を中心として結びつき、玆にロマ教會に對しギリシヤ正教會を組織したが、第十五世紀にトルコ軍に侵入されて亡びその教義はロシヤに傳わり、ロシヤに於ける教會がギリシヤ正教會の本山となつた。現在ギリシヤ、トルコ、ロシヤ、セルビヤ、ルーマニア、ブルガリアその他の各國に信徒があり、その數約一億五千萬あり、わが國には約一萬四千の信徒がある。東京神田のニコライ堂はこの宗派に屬する。

**新教**は第十六世紀の初め、ドイツのマルテイン・ルッターがロマ教會に反對し、ロマ法皇によらずして、人はイエス・キリストへの信仰により救われると唱えたことに源を發する。この時代にはスイスに於ても英國に於ても宗教改革が行われた。そして今は新教と云えばロマ教會より獨立したすべての教會の總稱となつている。今日新教の信徒は二億六百萬あり全世界に行き渡つている。我が國に於ける信徒は約廿萬である。新教は又各派に分れている。この中**聖公会**は新教といつても特別なもので、英國々教である。英國王ヘンリーがロマ教會と爭つた結果英國教會はロマ教會から獨立した。この獨立は信仰的であるよりも政治的であつた。國王は同時に宗教上の首長となり、この制度は第十六世紀の中頃エリザベス女王時代に至つて完成した。その他の新教の流れを擧げるならば、ルーテル派、バプテスト派、メソヂスト派、長老派、會衆派(コングリゲーショナルチャーチ)、改



革派(リフオームドチャーチ)、クエーカー派等がある。ルーテル派はルッターの流れを、バプテスト派、會衆派はカルヴァンの流れを傳え、長老派はツウイングリーの精神に立つている。

**ルーテル派**はドイツに起り、北歐に發展しアメリカに傳わつている。**バプテスト派**はオランダにいた英人牧師スミスにより始められ、英國に渡り、更に米國に渡つた。幼兒の洗禮を否認し浸禮(洗禮の時全身を水にひたす)を主張する。**長老派**は最初ツイングリによつてスイスに起り、次でスコットランドに渡り、ジョンノックスにより確立され、新大陸米國に渡つた。監督制によらず、選ばれた長老の制度により教會を治めて行くのが特色である。同じ長老主義でもオランダに發達しアメリカに渡つたものは改革派と呼ばれる。

**会衆派**は新大陸開拓の祖として英國から渡つたピルグリム・ファザース(巡禮父祖)に源を發し、米國に起つたものであり、信條、政治等各教會が個々に定め、各教會は獨立するも助け合う。

**クエーカー派**は第十七世紀後半、英國に於てジョージ・フオックスにより創められたもので、內的な光を重んじ、禮拜はプログラムなくして行い、集まるものは友の關係にある。信仰に熱狂して身體のふるえることからクエーカー(ふるえる者)という名が出た。

**メソヂスト派**は英國のジョン・ウエスレーを始祖とする。第十八世紀の初めウエスレーを中心として作つた神聖クラブ員の生活の方法が規則正しかつたから、メソヂスト(メソッドは方法の意)と呼ばれた。メソヂストは新生と聖潔を重んずる。

**日本基督教團**　我が國に於ては昭和十六年新教各派が合同して日本基督教團を組織した。その各派については別項『基督教各派の現況』（一八〇―一九〇ページ）及『解說篇』（二〇四ページ）に說明してある。

今參考のため合同前の重要各派について說明すれば、日本基督教會は長老派の制度精神をもつてをり、日本メソヂスト教會及日本美普教會はメソヂスト派、日本組合教會は會衆派、日本バプテスト、日本ルーテル教會はそれ〴〵その名の示す派に屬する。日本聖公會は英國々教派である。なおホーリネス教會と云うのは、アメリカから日本に渡つた東洋宣教會から發展したもので、稱義、聖化、再臨、神癒という四重の福音を說く。救世軍は鄒十九世紀の終ウイリアム・ブースにより英國に始められたもので、軍隊組織の下に傳道及社會事業をなすところの團體である。我が國には日本救世軍が組織され、日本基督教團設立によつて他教會と合同し最近再び獨立した。

戰後になつて、日本基督教團を離脫して獨立する教派が現われたがその實情は別項『基督教各派の現況』に詳述してある。

キリスト教の信仰によれば教會はキリストの體である。從つて教會が多數に分れて獨立していることは間違つている樣に見えるが、見えざる教會は一つでありそれが實際の働きをするとき、宗派に別れたのである。出來る事なら全世界の教會が一見ゆる教會」として一つとなる事が望ましいのである。

# 聖書の由來

## 旧約聖書と新約聖書との關係

聖書は舊約聖書と新約聖書から成る。『舊約聖書』は三十九卷あり、その內容はイスラエル人の律法、歷史、預言、文學である。

『新約聖書』は二十七卷あり、その內容は四つの福音書、卽ちキリストの人格、事業、教訓を傳えたもの、使徒行傳卽ち弟子たちの傳道の記錄、並にキリストの弟子たちの教會又は個人への書簡、並に默示錄である。

キリスト教の權威は新約聖書にある。舊約聖書は新約聖書を基礎付けるものである。イスラエル人は唯一の神ヤーウエ（エホバ）を信じていた。彼等はキリスト出現前千五百年の間、異民族及びその大國に挾まれて深刻な苦難を經驗したが、苦難を重ねれば重ねるほど神に對する信仰は益々强く深くなつて行つた。人類の歷史において彼等ほど深い信仰をもつた民族はなかつた。

彼等は、神よりかれらの踏み行うべき掟と神を祭る儀式とを示され、これを記錄した。これが律法である。彼等が腐敗墮落し、異民族の偶像を拜む樣になつた時は預言者が現われて警告を發し、彼等の信仰を取戻そうとした。又苦難のうちにある時、預言者が現われて救主について預言した。預言者の信仰と言葉とを記したものが預

言である。又次々に起つた出來事を神を中心にして記錚したのが歴史であり、神への讃美を美しい表現を以て記したものは文學詩歌である。

舊約聖書の最古の部分は三千年前も前に記されたもので、時代時代に記されたものが、結集され今日に傳わつている。これはみなヘブライ語で書かれた。

イエス・キリストはこの民族のうちに生れこの信仰とこの經典のうちに育くまれた。キリスト教はユダヤ教の苗床のうちに育ち、世界各地に移し植えられた。從つてキリスト教と舊約聖書とは切つても切れぬ關係があり、新約聖書と舊約聖書とも同樣である。これが舊約聖書がキリスト教の經典になつている理由である。

## 新約聖書は何時出來たか

新約聖書は多くの筆者により記されたものであるが、その原本は現存しない。私共に傳わつているのは寫本である。最も古い寫本は西曆紀元二百年代、即ち第三世紀に屬し、ナイル河に生ずる葦から作つたパピルスという紙にギリシャ語の大文字で筆寫されたものであり主にエヂプトから發掘された斷片である。新約聖書としてまとまつたものは、第四世紀頃の獸皮紙寫本で、主に羊の皮で作つた紙にギリシャ語の大文字で記したものである。最古のものはシナイ寫本、アレキサンドリヤ寫本、ヴァチカン寫本等である。

シナイ寫本は第十九世紀の中頃、テイッシエンドルフ博士がアラビヤのシナイ山の僧院から發見したもので、內容は殆んど今日のものと同じである。博士はロシヤ皇帝の援助を受けてこれを發見したので、この寫本を皇帝に獻上したため、これは初めペテルブルグにあつたが、ソ聯政府はこれを英國に賣り、今は大英博物館に保存されている。

アレキサンドリヤ寫本は第五世紀頃、英國に渡つたもので、これ亦大英博物館にある。ヴァチカン寫本はローマ法王廳に保存されている。その他第四—五世紀の寫本は何種類も發見されている。

初めてキリスト教を公認したローマ皇帝コンスタンチヌスは第四世紀の半頃に五十部の聖書を作らせ、領土內の教會に贈つたことが歴史に記されている。

**結集は第四世紀に** 聖書は何時記されたかと云うと多くの、學者たちがこれらの寫本やその他の歴史の史料を研究した結果、結論は新約聖書の記された時代は各卷によつて違うが凡そ西曆紀元五十年から百五十年までの間と云う事になつている。當時は今の聖書の各卷以外にも他の福音書とか書簡があり、新約聖書としてまとまつたものゝ中で、今のと較べるとある書が缺けていたり、餘計に入つていたりして、まち〳〵であつた。今の新約聖書とほゞ同じ樣な內容のものが出來たのは第四世紀であるといわれる。新約聖書の原本はギリシャ語で記されたのであるが、それが初めてラテン語即ちローマの言葉に譯されたのは第四世紀で、このラテン語聖書はローマ教會の經典となつた。宗教改革の大立物ルッター(ルーテル)は第十六世紀の初、新約聖書をドイッ語に譯し、それまで聖書を讀むことの出來なかつたドイッの民衆に初めて聖書を讀ませた。英語聖書の一番初めはルーテルよ

り少し前の時代のウイクリツフにより作られ、次いでルツターと同時代に、英國のチンデルも聖書を英譯し、これを出版した。兩名共このため異端者として處刑された。初めはロマ教會は聖書の翻譯を神聖冒瀆であるとなし翻譯者を處刑したが、宗教改革後は大勢を阻止することが出來ず、聖書は各國語に翻譯される樣になつた。

**日本語譯の歴史**　新約聖書の日本語に譯されたのは、文政十年である。ギュツラフというドイツ人がヨハネ傳を譯した。それから英國人ウイリアムス、ベツテルハイム、米國人ゴーブル等が聖書の日本語譯を試みた。明治五年、在日各派宣教師は聖書委員會を組織し、聖書の日本語譯に着手した。中心人物はブラウン、ヘボン、グリーン等で、日本人では奥野昌綱、松山高吉その他が之を助け、五年餘りの歳月を費して日本語譯を完成した。その後明治四十二年にその改譯に着手し、外國宣教師や、日本人牧師等が集つて研究努力し、大正六年にこれを完成して現在行われている聖書が出來上つたのである。

聖書は現在千八十の言葉に翻譯され、英國聖書協會は創立以來、百五十年間に約五億萬冊、米國聖書協會は百三十五年間に約三億萬冊の聖書を頒布している。終戰後、わが國において日本聖書協會の頒布した新約聖書は約百五十萬冊であり、これはアメリカのキリスト信者から贈られたものである。

## 新約聖書は誰によつて書かれたか

新約聖書の内容は、四福音書、使徒行傳、使徒の書簡、默示錄の順序である。四福音書はマタイ傳、マルコ傳、ルカ傳、ヨハネ傳である。これはマタイによる福音、マルコによる神の子キリストの福音と云う風に原本には記されている。マタイ傳は紀元七十年代から八十年頃に記されたもので著者はキリストの弟子取税人マタイと傳えられているが學者の研究の結果、マタイが直接に書いたものではなく、別にマタイが作つたイエス教訓集があり、これを基としてマルコ傳の内容をも取り入れて他の何人かが編纂したものではないかと云われている。

**マタイ傳**　はユダヤ人に讀ませるために記され、イエスは預言されたメシヤ卽ちキリストなることを示すを主旨としている。舊約聖書を六十五回も引用して、所々に『預言の成就せんがためなり』と記してあるのはこう云うわけからである。開卷の初めに複雜な系圖があり初めて讀む人を困らせるが、これはイエスが預言の通りダビデ王の子孫から出たメシヤであることを示そうとしたものであり、この世の王國ならぬ精神的王國の建設が全卷を通じて强調されている。又イエスの教訓に重きをおいてをり、マルコ傳がイエスの行動を克明に書いているのに對してマタイ傳はイエスの言葉を詳しく記してある。

**マルコ傳**　はキリストの弟子ペテロの秘書兼通譯であつたマルコの記したものである。年代は紀元六十五、六年頃で、マルコはローマにおいてペテロからイエスのことを詳しく聞き、ペテロがローマで傳道した時、ロマ人向に記したものと言われる。ユダヤ人の習慣やアラム語（ユダヤ人の日常語）の單語の意義を説明しており、また時々ラテン語を用いている。マルコ傳の特色はイエス・キリストの言行の叙述が克明なことにある。ヨハネ傳はイエスの内面に主力をおいているのに對し、マルコ傳はイエスの外面に力を入れてをり、活畫的なキリスト傳である。

**ルカ傳**　の作者はアンテオケ（シリヤの首府）の醫者ルカである。ルカは使徒パウロの弟子となつて大傳道旅行に從い、パウロを助けた。各方面から得た史料により、彼は最も綜合的なキリスト傳を編纂しようとした。書かれた年代は紀元八十年前後である。冒頭に『テオピロ閣下よ』と呼びかけているが、これはロマの高官らしい。ルカはこの書をロマ高官の求道者に献げたものである。文章叙述はいずれも美しく整然としており、理智的なギリシヤ人、ロマ人に向いてをり、視野が廣く、綜合的であると同時に、キリストの救いは全人類に及ぶべきものであり、かつ無條件であることを強調している。

**ヨハネ傳**　の著者については諸說紛々である。キリストの十二弟子の一人ヨハネによつて記されたとされているが、エペソ教會の長老ヨハネが使徒ヨハネから聞いたところを基にして記したと言う說もある。紀元九十年頃の作で、場所はエペソであるといわれている。

使徒ヨハネはペテロ、ヤコブとともにイエスに最も近くいた弟子で、十字架の際にも彼は現狀を見てをり、その後エルサレムに、又エペソにあつて福音を傳え、紀元九十年ロマ皇帝ドミチアヌスの迫害でパトモス島に流され再びエペソに歸り、九十四才の高齡を保つたと傳えられている。キリストに最も近くあつた弟子がイエスが神の子であることを證ししようとして書いたものがヨハネ傳で、イエスの言語、動作、事件などを生き〳〵と描寫しながらイエスの內面生活を驚くべき信仰と洞察力とを以て書いている。これは靈的福音書と呼ばれている。

ヨハネ傳は神の子が肉體となつて人類のうちに降り給うたこと、即ち、父なる神は御子を人類に下し給うたこと、この御子を信ずることによつて人は救われるものであること、人はキリストによつて父なる神を知ることが出來、靈魂に働く聖靈によつてイエス・キリストを知ることが出來る。そしてこの二つの事がわかれば、永遠の生命、即ち救いは與えられる、と說くのである。

**使徒行傳**　の作者は、ルカ傳の作者と同一で年代は紀元九十年頃である。これはキリストの復活から使徒パウロの第一回ローマ入獄前までの間における使徒たちの傳道記錄であり、ことに前半はペテロの傳道、後半はパウロの傳道について詳しく述べてある。これは使徒の傳記ではなく、キリストの福音がエルサレムから發して地中海沿岸に傳えられ、ついにロマに至つた歷史を語つたものである。

**使徒の書簡**　は皆で廿一ある。ロマ書からピレモン書に至る十三は、キリストの使徒パウロの作であると考えられて來たが、その中の或るものはパウロの作ではなく、他の何人かがパウロの思想信仰を記したものであるともいわれている。ヘブル書はパウロが記したという說もあるが、作者に定說はない。その他ヤコブ書、ペテロ書ヨハネ書、ユダ書等は昔はそれ〳〵の名の人の作と考えられたが、今は學者がいろ〳〵研究の結果、問題のあるものもある。しかし、いずれも初代教會の使徒たちの信仰を記したもので、重要な經典である。末尾の**ヨハネ默示錄**の作者は使徒ヨハネであるとも、長老ヨハネであるともいわれている。默示とは神が人間に眞理を示し給うことを意味する。默示錄はその記錄であり、異象がめまぐるしく展開する。その內容については諸說があるがロマ帝國の迫害下にあつて樣々な象徵を以て、言わんとするところを傳えたもので、迫害に苦しむキリスト教信

者を激勵し、迫害者は必ず滅びて、神の御旨は實現し、神の國は打ち建てられるであらうと說いたものである。

## 聖書の價値

前後六十六卷より成る舊約、新約聖書は樣々な人々によつて二千年の間に記されたものである。しかし、これを貫くところの信仰、眞理は一つである。神は人間を創造し、これを愛し導き給う、そして最後に御子イエス・キリストを人間に下し、信ずる者を救い給うというにある。聖書の作者は小說家が小說を書き、詩人が詩を作るが如く記したのであろうか。普通の文學や詩でも靈感があつてこそよいものが出來るのである。まして信仰に根ざす文學、詩歌、さらに選民の歷史、律法、進んでイエス・キリストの人格とキリストへの信仰となると、神の啓示、靈感によらなければ、記され得ない。神は人間に御自身を示し給い人間は神の靈感を受けてこれを記した。これが聖書である。

新約聖書を初めて讀む者は、時々不合理なことにぶつかり、これは何人かの揑造か或は神話傳說であると思うにちがいない。しかしイエス・キリストと言う他に類例のない大人物がもし存在しなかつたとすれば、とうていこんな書物は出來るわけがない。人間の想像で記し得ることは、自分の經驗の範圍から出ることは出來ない。聖書は實に神の言葉である。

聖書は人類の生活に大きな感化を及ぼした。詩歌、文學、美術をはじめとし、政治、經濟、社會に與えた影響ははかり知れない。聖書を知らずして歐洲の歷史と近代の文化とを理解することは出來ない。今世界人類のうち聖書を魂の糧としている人は七億あり、世界人口の四割を占めている。




日本協同組合新聞

日本協同組合同盟會長 賀川豐彥著
★新協同組合要論 B6判・一三六頁 三〇圓・〒一〇圓

元東大教授・經濟學博士 本位田祥男著
★生活協同組合 B6判・一三六頁 四〇圓・〒一〇圓

月二回發行 閱讀料格安 一年一二五圓（含送料） 我國及び海外協同組合運動の情報網收錄

發行 東京都豐島區高田南町三の八〇三 日本協同組合同盟出版部

残照 田中正造原著 鈴木二郎編著
幾代の義人田中正造翁の傳記と手記
B6一一〇頁・上質紙使用 定價三〇圓・送料 一〇圓

東洋思想の再吟味
—宗教的道德心理よりの分析—
著者が三十數年の長きに亘りそのうん蓄を傾けて日本、支那、印度の諸思想に忌憚なき批判と綜討を加へた金字塔！
近刊 B6版二五〇頁・定價未定

東京都世田谷區上馬町1—827
一燈書房

造製劑油維繊ュ並綿石用業工維繊

共栄社油脂化学工業株式会社

代表取締役專務 片岡勝吉

大阪市東區淀生町一丁目五三番地

記錄篇

# 平和回復後の世界教界

## ——協力強化から再一致への歩み——

### 世界教会連盟発足す

第二次世界大戦の勃発によりキリスト教の世界的活動は著しく抑圧され、人類の罪の所産である戦争の防止に対し、キリスト教会の余りにも無力であつた事が指導者の深い反省を招いた。この事は必然的に、最後、全世界教会の協力強化の動きから更に一歩進んで教会再一致（レユニオン）への要望と実践に現われて来つゝある。

**國際宣教連盟活動再開**　國際宣教連盟（インターナショナル・ミシヨナリー・カウンシル）は平和恢復後直ちに活動を開始、一九四六年（昭和二十一年）二月スイスのジユネーブに、又一九四七年七月五日から廿四日に亘りカナダ、オンタリオのホイツトビーに実行委員会総会を開催、『宣教運動の根本原理』の再検討に重点を置き、平和と安全を保証された國際社会の実現に力強い一歩を進めた。

連盟傘下の各地区別大会も、アフリカの中央地区協議会が一九四六年七月レオンポルドビルで、西部地区は同年九月ゴールド・コーストのアチモトで、東部南部亜地区は夫々一九四七年初頭に開催。インドは一九四七年インド連盟総会を、中華民國は一九四六年に全國大会を、近東地方は同年五月総会を夫々開催した。極東地区では一九四八年二月フイリツピンのマニラにおいて連盟並びに世界教会連盟の合同会議が開かれ、次回は一九四九年十月中國の琉州に開くことを決議している。

**世界教会連盟への進展**　國際宣教連盟のかゝる活動は一方において、多年要望されていた世界教会連盟の発足を容易ならしめ、宣教運動と、戦前エキユメニカル・ムーヴメントを背負うた信仰職制世界会議並に基督教生活世界会議を打つて一丸とした世界教会連盟がこゝに誕生を見るに至つた。

世界教会連盟は一九四八年八月廿四日から九月五日まで二週間オランダのアムステルダムに第一回世界大会を開くべく、着々準備を進め、日本教界に対しても日本基督教團、日本聖公会等に対し代表の派遣を熱心に勧奨して来ている。

このため本年初頭世界教会会議研究部長、英國聖公会主教ステイヴン・ニイル師は極東会議を了えて日本へ立寄り、國際宣教連盟幹事ヘンリー・ヴ・デツカー博士も東亞教界視察の途次日本を訪れて教界有力者と懇談した。世界教会連盟では初の世界会議開催に当つて出来るだけ多くの指導的ポストを後進教会に開く方針を取つて居り、両氏の極東訪問もこの線に沿つて計画されたものであるが、恰かも進駐軍総司令部では日本人の海外渡航を制限付で緩和する旨発表、同時に日本聖公会の八代斌助、柳原貞次郎、藤田茂の三主教が七月ロンドンのラムベス宮殿に開かれるラムベス会議に出席する旨渡外局より発表された。

三主教はラムベス会議終了後アムステルダムの世界教会会議へ赴く予定であり、尚、日本基督教團の小崎道雄氏の出席も予想されるので戦後初の世界会議における日本代表の発言は大いに期待されるものがある。

**世界教会会議準備進む**　会議の期日は八月廿四日から九月四日までの二週間、主題は『人の苦難と神の経綸』で、英・佛・独語を正式用語とすることになつている。予定されている代表数は四百五十名、その内当ぼ英、米の教会が各百五十、欧州大陸諸國の教会から百十、その他四十となつて居り、これに加えて会議への公式傍聞者は六百名を超えるものと見られ一大偉観を予想されている。

会議について、各國教会の指導者は次の如く述べている。

バンデユーセン博士（米國ユニオン神学校長）今回の世界会議では教会の直面する中心問題の目標が明示されるであろう。総会の大半の時間は信仰と使命の問題に費されるであろうと思われる。

ヘンリー・スミス・レーパー博士（世界教会連盟協力主事）連盟に新しく参加した六教会は正教会系統で、二教会はアジアの新教派であつた。これらの事実は一九四八年の会議がある一種のキリスト教々理や社会秩序によつて支配されるものでないことを明かに示している……過去における國家的教会及び教派的教会の発展は、キリスト教をある特殊の社会秩序の侍女とした嫌がある。この事は神学的に容認出来ぬばかりか教会に取り返れぬ損傷を與えた。色々な社会秩序の中から出て来た色々なタイプの教会により構成されている世界教会連盟が、特殊の社会秩序を基礎とする精神的一致を建設し、その原理を総ての社会秩序に適用するように熱望して已まない。

サムエル・マツクリア・カヴアート氏（全米教会連盟）アムステルダム大会は基督教会の新時代を來らせるであろう……全世界の諸教会の間の、永続的且つ組織的友交の出発となることを期待する。

**世界連盟に参加相次ぐ**　一九四七年十二月末ニユーヨークに開かれた連盟委員会での報告によれば、同年中に新しく加盟した教派は巨

十四で、これで同盟加入教派は三十六ケ國一二七（カトリックとプロテスタント）を数えるに至つた。この中には各國のギリシヤ正教会をはじめインドネシヤ・プロテスタント教会、朝鮮長老教会等の新しい教派、ニュージーランド、スコットランド等の合同教会を含んで居り、文字通り世界教界の縮図である。尚、理事当局の見込みでは会議開催までに更に十余教派の参加が予想されている。

## 教会再一致への歩み

一九四七年九月廿七日、マドラスにおいて発足した南印度合同教会は英国教会と聖書主義自由教会との最初の合同として全世界教会の注目を浴びた。同教会は相せめぐ二つの宗教哲学ヒンズウとパキスタンの中にあつて教義を守りぬくためにインド、ビルマ、セイロンの英國聖公会、南印度の英國系メソヂスト教会及び南印度合同教会（組合派、長老派、改革派の合同教会）が一になつて出來たものであるが、外部的情勢が促進させたとはいえ、合同熱が起つて以來廿七年ぶりに結晶したこの合同教会のキリスト教史上に持つ意義は大きいものがある。

『一つの世界』を実現するためには『一つの教会』を再現することが先決問題であることは、〃主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ〃……〃平和のつなぎのうちに勉めて聖霊の四う一致を守れ〃と教えた聖パウロの教えに明らかである。

世界教会は正にこの目標に沿つて教会再一致への歩を踏み出しつゝあるのだ。アメリカのプロテスタント教界に力強い指導力を持つメソヂスト教会ニューヨーク監督G・フロムレイ・オクスナム博士は、アメリカ・プロテスタント教会の中で全会員の八〇%を占める十二大教派の合同は向う十年以内に実現し得ると主張し、更に歩を進めてローマ・カトリックとプロテスタントの指導者が円卓会議を開いて再一致を検討せよと提言した。オ博士の主張乃至提言に対しての反響は未だ明らかでないが、アメリカ諸教会の合同実績乃至合同への準備は博士の主張を裏書きするものというべく、甚目に値するものである。

### 合同促進を大多數支持

一九四六年十二月シヤトル市に開かれた米國キリスト教連合会総会に組合派から合同促進案が提案されユナイテッド・ルーテル派を除き聖公会その他大多数の教派がこの案を支持した。これとは別に教派相互の合同は着々進められて居り、一九三九年にメソヂスト三派が合同したのを初めとして、翌四十年に北米の福音派大会と改革派教会が合同して福音改革派教会を結成、その後アメリカのクエーカー派（基督友会）は百十九年に亘る分派併立を解消した。

一九四六年十一月には福音兄弟團教会―アメリカ合同兄弟團教会（ユナイテッド・ブレズレン派）と福音教会（エヴアンヅエリカル・チヤーチ派）の合同―が会員七十一万四千人を有するアメリカ第十三番目の教会として発足した。両教会はその組織並に歴史上多分に共通性を持つが、合同達成を見るまでには三十年の年月を要している。

長老派の南北両教会は合同協定を進めているが、同じく他方に進行している長老派と聖公会の合同については、聖公会の大多数が賛成であるにも拘らずはかばかしい進捗を見せていない。むしろ『聖公会とメソヂストの合同が先決である。この合同は両教会にとつて根本的立場や信條を変更することなくして行われ得よう。……われ〳〵は之を即時実行に移すべきである』とクリスチヤン・センチユリイ誌上で論じたメソヂスト教会牧師C・スタンレイ・ロウエル氏の意見が正しいかも知れない。

又、一九四七年九月末ニューヨーク州カントン市に開かれた同仁教会（ユニヴアサリスト）の隔年総会はアメリカ統一教会（ユニテリアン）及びその他の自由派との完全合同に進むことを決議、米國組合派教会も福音改革派教会との合同問題に関して各地方大会毎に投票を開始しているが、既に二州では五対一の割合で賛成を表明、又地方大会の過半投票も賛成廿二、反対皆無（但し投票率は賛成五、反対一の割合）である。この投票の傾向は両派合同実現を促進させる原動力となるものとして注目されている。

### 各國教会の合同氣運

翻じて他の諸國教会の再一致への歩みを見るならば、前記南印度合同教会の成立を始め、豪州、ニュージーランド、ドイツ、イタリー等における活発な動きがある。一九四一年（昭和十六年）末成立した日本基督教團は日本の新教教会のほとんど全部を網羅した点において世界に類例のない大合同であつた。

豪州のメソヂスト派、組合派、長老派の合同問題は本年開かれる三教派連合大会で決せられる筈である。長老派を除く二派は強く合同を要望しているが、長老派の勇力の強いニュー・サウスウエルスとヴイクトリアの二州の教会が合同計画に賛意を表すれば他の諸州の教会も之に追随するだろうと言われている。

ニュージーランドでも長老、メソヂスト、組合三派の合同論があるが、ここでは長老派側に『三教会の合同の実現は極めて熟慮すべき状態にある』という意見が行われて居り、豪州と共に合同実現は間近いものと見られる。

敗戦の混乱した社会の中に起上つたドイツの教界は、一九四七年十一月プロテスタント教会指導者の会合で國民教会と称する大教派と自由派を標榜する小教派との間に合同氣運が抬頭し各教派において具体案作成に着手した。いわゆる國民教会側はドイツ福音派教会連盟で、自由派はバプテスト、古カトリック、自由組合派、メンノオ派、メソヂスト、同胞派の諸教会である。

尚、一方地域的に合同する計画が一部に実現し、マルチン・ニーメラー牧師がその教会の総理に推された。これはヘツセ、フランクフルト、ナツソウの三地区の教会が合同したもので、ヘツセのアメリカ軍政部宗教部長デュモント・ケネイ氏と一カトリック教徒とはこの合同を称揚し『この発展は戦後今日までのドイツ・プロテスタント教会における最も意義深いことで、ヘツセ地方の福音派教会の興隆的社会活動に一新時期を画するものである』といつている。

尚、他の一般的傾向としては、カトリックとプロテスタントの提携の深まつていることが指摘される。会堂を失つた両派の教会が同一の会堂を交互に礼拝に使用して何の摩擦も起らない。これはナチの弾圧に対し、信條、神学に意見の相違はあろうともキリストの教会であるという点で異るものでないとの見解で提携して以來、今日まで続いて來ている。

イタリーでは一九四六年九月アメリカ系のメソヂスト福音教会とイギリス系ウエスレアン・メソヂスト教会が合同してイタリー合同メソヂスト教会を

組織、次いでこの合同教会とプルドー派が一九四七年春合同してイタリー最大のプロテスタント教團イタリー福音教会となつた。ワルドー派は神学と教会政治を長老派に倣い、改革派とも交友関係にあつたので今後長老派との合同に有力な媒介となるものと見られ、又バプテスト派とも合同の希望を持つている。とも角もカトリックの國イタリーで新教勢力を統一して活動せんとする新教團の将來には大きな期待がかけられている。

## 一つの世界実現へ

戦後、世界教界の関心は全き平和のシムボルとしての『一つの世界』実現と、新たなる人類の恐怖『原子力』の管理問題、これに伴い一つの教会の意義につながる戦災國教会の復興救援であつた。

### 平和完成目指す二会議

一九四六年八月、英國ケンブリッヂ・ガートン大学に催された教会指導者國際会議は、戦争なき世界実現への教会の努力を示す意義深い里程標であつた。この会議は世界教会運動と國際宣教運動の共同主催になり、十五ケ國から六十人の代表が出席、教会の誇すべき平和運動の方向を検討した。

会議は次の声明を発表した。

『今日の政治的、経済的相こくを離脱して、相互の信頼と安定せる平和を持つところの秩序に到達するまでにどの位の時が人類に與えられるかは何人も知つていない。然しながら我々は知つている。若し諸國が國際関係を調整すべき新しき道を発見しないならば我々は互に破壊し合うべき運命に陥いつている事を』……。然して『天における彼の國は動かぬ。キリストにおいて、教会において、彼が地上に始め給うた尊き仕事は遂に中道にして終ることはない』と宣言した。

会議は、共同の行動計画を作るために國際委員会を設け、ニユ：ヨークに本部を置いた。この委員会の目的はいゆる観点から紛争を除去するに必要な処置を研究し、前記両運動傘下の教会、諸会議に対し、國際問題についての知識を提供すると共に、世界平和完成への重大なる役割を果す点にある。

同じ夏、オツクスフオードで世界最初のキリスト教とユダヤ教の連合協議会が開かれた。これには英、米、加及びドイツを含む十四ケ國の両教徒代表が参集、『自由、正義及び責任』を主題として協議したが、その結果反ユダヤ人問題を研究のため小委員会を設けるに至つた。この会議を契機として今後、基督両教の間に完全な理解と協力が実現するならば六億一千百一万八百名の両教教徒、即ち世界宗教界の三割の勢力が打つて一丸となる訳である。

## 世界に差伸べる愛の手

米國のプロテスタント教会は戦後直ちに教会世界奉仕團を結成、全教派合同の大募金運動を開始した。総額一億一千八百万弗、これに対しメソヂスト教会は一年間で目標を突破二千七百万ドルという好成績を挙げ、聖公会は十三ケ月で分担額を完了、北部長老派は三年計画で二千七百万ドルの募金を目指している。

この資金は戦災國教会の会堂再建、牧師信徒の再起に役立たせようというもので、終戦開始後第一年度に欧洲廿九ケ國の教会に衣食と物資で一千五百万弗を送つた。この中四百六十万弗は中國へ、四百万弗が日本を含めた東亞の諸國の救援に当てられている。

尚、教派別の救済運動も活発で、兄弟團教会の如きは仔牛、トラクター等の物資を中國その他七ケ國へ、又、ルーテル教会はドイツに新聞用紙三百トンを送つて文事啓蒙の再開を援けている。クエーカー教徒の活動は特に目覚ましく、ドイツに一千二百万弗、食衣料にして二百万ポンドを送つて難民救済に活動、フランスでは一千六百の町の再建に援助し、イタリーでは住宅難に苦しむ人々に七千の部屋を提供している。

聖書、讃美歌等による傳道運動盛援も活発である。我國に対しても既に二百余万册の聖書、十万册の讃美歌、百余の組立式教会堂、牧師の生活増産のため食糧衣料の救援が届いているが、ドイツに対しては、八十一万册の聖書廿六万册の讃美歌が送られ、ドイツのソ連占領地区、ソ連本國の正教会等に対してもアメリカから聖語の聖書が送られ、偉大な國際博愛の実行を側所にクリスチヤンのみに縛ずる暖かい友交の手が延伸べられている。

カトリツクも、教皇の指令の下に戦災各國の援助と教会再建に努力して居り、その成果は見るべきものが多い。

## 対峙する二つの思想戦線

世界の関心は鋭く対立する米ソ両國の動向に注がれている。ギヤラツプ世論調査所が一九四七年春英、米、佛、蘭、加、ノルウエーの諸國について同時調査を行つた結果は、『一國又は数ケ國が世界を支配しようと企図している』と確信する者、最高が和蘭の八四％、最低がノルウエーの五二％、各國平均では七〇％を占め、『何れの國が世界支配を企図しているか』については各國の世論は凡てソ連を指同し、その率は英國で五〇％、フランスで三六％、米國で六〇％となつている。

かゝる情勢は、必然的にソ連を主軸とする共産主義國家一特に共産党と、民主主義の基調となつているキリスト教主義一教会との対立をもたらすものとなつた。この傾向は東欧と西欧を隔てるいわゆる鉄のカーテンの内外において、又極東では華北、満州における中共軍のカトリツク迫害となつて現れている。

### 教皇反共十字軍を提唱

一九四六年度に行われた西欧諸國ーフランス、イタリー、オランダ、南ドイツ等ーの選挙ではカトリツク政治團体が最強の勢力を占めたが、共産党の勢力は少しも衰えず、その後の政情は次第に共産党の進出を見る結果となつた。

一九四六年六月、教皇ピオ十二世は、佛、伊両國の総選挙の前夜を期してラジオを通じて全世界のカトリツク教徒に呼びかけ反共十字軍の結成を要望したのである。以来共産主義國家乃至共産党勢力の優勢な地方では、カトリツク教会への圧迫が急激に加わつて来た。

ユーゴスラヴイアにおけるステピナツク大司教に対する人民裁判、西ウクライナのガリチヤ、プレミスミヤ、スタリアスラオポリ三地方におけるカトリツク司教、司祭の追放、北華のカトリツク教会團員、華北、満州における中共軍の相次ぐカトリツク司祭殺害事件等はその一例である。

カトリツク國イタリアの共産党は、一九四七年の議会で新憲法草案にカトリツク教を國教と認める條項を可決したが、その後の両者の關係は必ずしも良好とはいへず、一時欧州に教皇廳の移轉説が取沙汰されるに至つた。

かゝる共産党の攻勢に対し教皇廳は、カトリツク労働組合の育成とその團結統一に努力している。四十ケ國余の組織労働者六千六百万人を包含する世界労働組合連盟の中には、二千六百万を有するソヴエト労働組合が中心的勢力となつているが、これに対しフランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグのキリスト教労働組合を含む國際キリスト労働組合連合は、以上諸國だけで百五十万の人員を擁しているといわれて居り、更にヴアチカンはカトリツク教徒の勢力の強いアメリカ産業労働組合の動向に対し注目を拂い、欧州との陣営統一に努めている。思想のみによらず実践によるカトリツクとマルキシズムの闘争は、今後の課題の一つであろう。

**新教も對共産鬪爭へ**　目下の処プロテスタント教会に対する共産党の圧迫はさして表面化していない。鉄のカーテンの内部チエコスロヴアキヤ、ユーゴスラヴイア等においても比較的平靜が保たれているが、キリスト教そのものは唯物論的共産主義と相容れぬことは勿論で、各國教会とも対共産党闘爭方針について研究しているが、北米外國傳道協会の一九四七年度年次大会では、『共産党の宣傳に思想的に対抗し得るキリスト教主義闘爭計画を樹立する』決議案を採択、研究を開始している。

## 起ち上りつゝある青年

戰勝國と敗戰國とを問わず各國青年の表情は暗い。戰時中に指導者から與えられたイデオロギーは消滅しそれに代る新しい指標は未だ與えられないというのが実情である。

**世界基督教青年大会開く**　かゝる実情に対処しキリスト教青年運動は活発に開始された。世界的な規模を持つものでは、一九四七年七月卅日から八月九日まで十日間ノルウエーのオスロー市に開かれた世界基督教青年大会、同年十月十五日から中國杭州に開かれた世界基督教女子青年会（YWCA）の國際会議、教派関係の國際集会では、同年六年米國ウイスコンシン州ミルウオーキーにおける青年ルーテル連盟及び福音ルーテル教会合唱連盟の第十二回國際大会、十二月クリーヴランドにおけるメソヂスト青年大会、又、一九四六年夏世界宗教々育連盟主催でテキサス、コロラド、ネバタ、ニユー・ハンプシヤイヤーの諸州六ケ所に分れて開かれた全米青年協議会等が挙げられる。

ノルウエーのオスロー市における世界基督教青年大会は世界教会連盟、YMCA、YWCA、世界基督教学生連盟（WSCF）が共同主催し、各國から一千二百名の代表が参集『イエス・キリストは主なり』の主題の下に

自由と秩序、世俗的環境における基督者の負担、世界秩序、共同社会における家庭、世界に対する教会、等

九つの命題に基ずいて討議を行つた。この会議は今後の世界における若き世代の担い且つ厳かい取るべき世界の人々の幸福と眞理の正道を開拓せる大会として重要な意義を持つものであり、我國からも十余名の青年代表が参加する予定であつたが不幸実現を見るに至らなかつた。

この年の十月、中國杭州において世界YWCA会議が開かれ、『進み行かしめよ』の主題の下に今後四年間の、女子青年会の進路が検討された。

これに続いて十一月十五日、同会議代員中九ケ國十五代表の日本立寄りを機に日比谷公会堂で開かれた世界婦人円卓会議は規模こそ小さいが、海外との自由交通を未だ許されぬ日本における初の國際的色彩を持つ会議として注目に價する。日本側からは労働省少年局長山川菊栄女史と世界YW副会長に推された植村環女史、外國代表は新に世界YW会長に推されたリレス・R・パーンズ夫人、同総幹事ヘレン・ロバート女史ら十五女史で、『新建設への婦人の役割』について討議、黎明期の日本婦人運動に大きな激励を與えた。

**アジアで二大青年会議**　将来の計画の中には本年七月十五日から廿六日までビルマのラングーンで開かれる世界学生救済連盟（WSR）の第二回会議、十二月廿日から二週間インドのセイロンに開く世界基督教学生連盟（WSCF）主催のアジア学生会議がある。

# 各國教會の現狀展望

## ――世界救済に乗出す米國教会――

### 世界を貫く動き

米國の年鑑『サ・ワールド・オールマナツク』一九四七年版によれば、世界のキリスト教徒の数は五億九千五百廿九万七千百七十九名と報告されている。この数はマホメツト教、佛教その他の宗教の総計に対し約四割に相当するものである。

聖書は世界基督教学生連盟、カトリツク系のパツクス・ロマーナ、國際学生奉仕團（ISS）國際連合奉仕團（IUS）の四團体から成り、大戰中は連合諸國学生の救済のため活動してきたが、最後日本及ドイツの学生にも救済の手を延伸べるに至つたもの。この準備のため世界基督教学生連盟主事ベング・ホフマン博士は二月中旬來朝、学生の実情を調査、且つ日本における同事業の受入態勢として日本学生救済委員会の結成を提唱した。この会議に域日本から教授、学生各一名の参加を望まれている。

アジア学生会議は日本を含むアジア十ケ國の学生代表参加の下に

一つなる救世主、一つなる教会、一つなる主、一つなる眞理

それに『十字架へのつまづきと基督教学生運動の証し』が協議題目として準備されている。世界の他の地域における基督教学生運動に比しアジアのそれが遅れているため、リーダーの訓練を行つことを主目的とするこの会議の成果は期待されて良かろう。

カトリック（天主公教）は三億二千九百七十七万五千余、オーソドックス（正教）は一億二千七百六十二万九千余、新教諸派（プロテスタント）の合計は一億三千七百八十九万一千余となつている。地域的に見ると三教共欧州が一番多く、続いてはカトリックは南米、北米の順、オーソドックスはアジア、アフリカの順、新教は北米、太洋州の順である。（詳細別表）

## 聖書頒布の協力機関生る

この新教徒一億三千八百万の要求に応じるために、戦後数年間は三千万冊の聖書を印刷しなくてはなるまいといわれている。

かゝる情勢に対処するため一九四六年五月ロンドンにアメリカ、イギリス及びドイツを含む十一カ国の聖書協会の代表が参集、新しき世界の情勢に適応し敏速なる連合的活動を行うために国際聖書協会連合会の結成を行つた。

この本部はロンドンにおかれ、設立会議に出席し得なかつた他の諸国に参加を呼びかけると共に、聖書の普及徹底方策についての調査研究、聖書不足に対する対策等を主なる任務としている。

尚、現在聖書の訳された国語は一千八十種に達したと報ぜられ、その頒布高は英米両聖書協会のみでも一千五百万冊を超し（一九四五年度）。その中米国が千二百万冊、英国は三百万冊

（1947年度）

| マホメット | 其の他 |
|---|---|
| 1,400 | 79,020,577 |
| — | 22,134,007 |
| 5,672,225 | 137,931,535 |
| 118,299,144 | 956,007,018 |
| 55,538,211 | 76,301,961 |
| 21,467,868 | 46,868,506 |
| 200,978,848 | 1,318,914,254 |

を個宅している。

一九四六年における聖書協会の大きな事業の一つは新約聖書の標準改訳がアメリカで出版された事であろう。これはジェイムス王訳（一六一一）英国改正訳（一八一一）アメリカ標準訳（一九〇一）の公認改訳で、国際宗教教育連盟が公認しアメリカ及びカナダのプロテスタント四十大教派が協力して完成したものである。

改訳に着手したのは一九二九年、ジェイムス・モファット、エドガー・J・グッドスピード、ルーサー・A・ワイクル博士ら十五名が延日数百四十五日、三十五回にわたり委員会を開いて一九四三年八月に完成を見た。

旧約の改訳も現在御行中で遠からず刊行されることになろう。

## 四大教派の世界大会

メソヂスト教会では一九四一年開催の予定を延期していた世界大会を一九四七年九月下旬から十月初旬にかけ米国マサチユセツツ州スプリングフイルドに開催した。

大会には十六ケ国から四百名の代表が出席当面の世界情勢に対する教会の方針を討議したが、共産主義に対しては『基督教の世俗的対立者』として攻撃しつゝも、ロシアとの戦争については反対の意志を表明した。

又、神学問題については、『最近の神学が人の罪性を高調し強調する』点を批判し『罪性をのみ力説せず絶望のドン底に向つて突進している世界の狀勢を食い止めることに力を傾さねばならぬ時である』と結論している。

ルーテル派では同年六月末から七月初旬にかけスエーデンのルンド市に世界大会を開催した。この大会は五年目毎に開催されて来たが戦争のため中絶十二年ぶりのもので、各国から四百名の代表が参集した。日本代表は都合で



参加出来なかつたが、中国から二名、印度から三名の代表が出席している。

この会議での最大の收穫は、ルンドのアンヨルス・ニグレン教授の命になる現代ルーテル神学に関する宣言を採択したことである、と米国アウグスタス大学、同神学校長コンラッド・ベルグンドルフ博士は述べ、ナショナル・ル・サラン誌上で『スエーデンの思想家達は唯物論や一統派の疑獄な論爭を止めて、人類を救う聖書の力の最も優れた理解をルーテルの聖書論に見出している。……彼等は単にドイツ観念論の尨大な書やパルトの逆説に見るよりも、更に明確、純粋な基督教の本質についての説明を

## 世界宗教地区別一覽

| | カトリック | オーソドクス | プロテスタント | ユダヤ教 |
|---|---|---|---|---|
| 北米 | 47,056,724 | 1,208,157 | 41,943,104 | 4,971,261 |
| 南米 | 60,836,143 | — | 657,481 | 236,958 |
| 欧州 | 263,914,823 | 112,447,669 | 81,767,054 | 9,372,666 |
| アジア | 9,213,413 | 84,106,071 | 4,422,777 | 572,930 |
| アフリカ | 6,866,072 | 5,868,089 | 2,728,864 | 542,869 |
| 太洋州 | 1,858,488 | — | 6,372,250 | 26,954 |
| 合計 | 329,775,663 | 127,629,986 | 137,931,530 | 15,713,638 |

力強く現代神学の核心に注ぎ入れるばかりでなく更に進んで神の愛を『純』教義の極に達して置くことが出来ると信じていた古典的主知主義からルーテル神学を解放したのである』と称賛している。

カンタベリー大主教フイツシヤー博士は全世界の聖公会主教に第八回ラムベス会議への招請狀を発した。この会議は一八六七年ロングレイ大主教により主催されて以来、十年目毎に時のカンタベリー大主教が、ロンドン公園であるラムベス宮殿に、全主教を招待して開く慣わしになつていた。第七回会議は一九三〇年に開かれ、日本聖公会から初めて邦人主教宍井米太郎師が出席、その後戦爭のため今日まで延期されていた。会議の決議は何らの拘束力を持たないが、この会議が全世界の聖公会を結ぶ唯一の世界会議であることからして各国の聖公会に與える影響力は尠くない。

今回の会議は七月一日から八月八日まで四十日間で、『社会上歴史上の人間』『教会とその一致の本質』『聖公会（アングリカン・コンミユニオン）』『聖公会の成長』『教会の倫理的標準』の五つの主題につき総会と分科会で討議することになつている。

特に注目されることは、五つの主題中三つまでが、教会再一致と教会全体運動に関連していることで、世界教会の一般的風潮となりつゝある教会再一致への歩みについて如何なる指針を見出すかは興味を持たれる点である。

尚、日本からは日本聖公会総裁主教八代斌助、同大阪教区主教柳原眞次郎同東京教区主教横田誠の三師が出席することに決定した。

組合教会も又、一九四九年九月米国ウエルズレイ大学においては世界大会を開くべく準備を進めている。大会は一九三〇年以来のもので、大会準備事務所をロンドンに設け、その主事に元英国組合教会連盟主事ジドニー・ペリー

氏が歸任した。暗殺された主觀は『キリストを通しての自由と友愛』である。

**道德再武裝運動の進展**　最後に、戰後急速に抬頭した道德再武裝（モーラル・リアーマメント＝MRA）の運動がある。この運動は二十七年前オックスフォード大學の一學生で、フランク・N・D・ブックマン博士が罪を告白し合うことによつてキリスト教の兄弟愛を促進しようとの原理を提唱したのに始まり、以來オックスフォード・グループ・ムーヴメントとして非常な發展を示し、一九三八年に至つて『道德再武裝』の名を以て呼ばれるようになつた。

『正直、純潔、無我及び愛の絶對的標準』をモットーとし、個人がより良き生活に入るためには公の告白がなされねばならぬと强調している。

戰後、ブックマン博士は、スイス、ヴネバ湖畔のコウにある七〇〇室を有する豪壯なパレス・ホテルを二十五万弗で買收、之を本部として全欧州にMRAの再建運動を開始した。

この本部には常に七百名からのグループが詰めかけ常時大会を開いているかの觀を呈しているが、その後無名の士の寄附を得てロンドン市内目貫のウエストミンスター劇場を五十二万八千弗で買取り、同運動の宣傳劇を公開している。

本年一月にはアメリカのヴァジニア州リッチモンドで世界大会を開催、正式に招待を受けた者だけで一千人、その他の訪問者は無數であつた。教派と人種を問わずグループに迎え入れるこの運動は、欧州各國の指導者をも多數獲いている。

ブックマン博士は運動の將來のプログラムとして『平和な家庭、生産の協同、精神的一致、國際的一致』の実現をあげているが、『神に導されて我々為てる』精神こそ『世界を改變するキリストの十字架によつて常に最大の革新を促進する』ものとなるであろう。



## アメリカ教会の活躍

アメリカ人の九六%は神の存在を信じ、七六%は死後の生命を信じている（ギャラップ世論調査所一九四七年八月発表）という。今アメリカの教会の教勢はどういう數字を示しているであろうか。一九四七年発行の『アメリカの必需品及び資源』の中に出ている一九三〇年から四〇年に至る宗教統計では、人口との比例において、信徒數、牧師數、献金額の率が何れも低調している。即ちプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の全会員數の人口に対する比例は千人に対する五百卅四人から五百七人に低下、一九〇〇年には十万人の市民に二百卅七人の割合で牧師がいたが、今では一百四人に低下している。献金額についても政府始め公私諸團体が社会福祉のため力を尽すようになつてから、教会の社会事業に対する出資は減少し、一方一九二九—四一年に國民の收入が一億ドル増加しているのに反し教会及び社会事業團体の寄付金は一千五百万弗から一千二百万弗に減少している。

一九二六年から四二年に至る期間最も会員の増加數の高いのはカトリック教会で四百三十万、之に次いでメソヂスト、南部バプテスト、ユダヤ教の順である。しかしパーセンテージで見た場合プロテスタント四十三教派の増加率二四%に対しカトリックは二三・三%で新教が優勢である。

アメリカの学生の世論は、教会が現在の調子のまゝで行けば今後二十年間に衰亡の一路をたどるであろうと警告している。これはピツツバーグの第一ユニテリアン教会ツエファアーソン倶楽部が、ピツツバーグ大学、カーネギー科学研究所とペンシルヴァニア女子大学の学生五百名に対して行つた世論調査の結論である。『教会はその運営方針を修正する必要ありや』との問には『有り』が八九・七%、『今後二十年間の教会の状態』については、現状のまゝで行けば衰えるという答えが八四・三%であつた。

**躍進目覚しい新教諸派**　メソヂスト教会は一九四六年の会員増加率の首位を占め百二万一千二百十人の新会員を得た。この數は同教会ニューヨーク聯會ブロムレイ・オクスナム博士が『米國の歴史において如何なる教派、如何なる年においてもこの様な会員の大増加は見られない』と述べている如く正に驚異的なレコードである。これにより会員総數は略々九百万に達んとしている。

長老教会は一九四七年度において十一万一千九百五十二名を得て会員數二百二十三万四千七百九十八名となつた。この会員増加數は同教会がアメリカに開教して以來二百四十一年間に未だかつてなかつた記録であるといわれている。日曜学校生徒は五万名を増加して百卅一万二千卅四名に、献金は一人当り三一・七六弗から三六・一五弗に増加し七千八百五十六万七千三百六十八弗に達した。

聖書改革教会の所属教会數は、合同以來最初の統計で七十万八千三百八十二名を算えた。日曜学校生徒の増加は一万余名で総數四万三千四百十名、出席平均は六三%献金も一人当り二〇・七〇弗から二三・一四弗に増え、総計一千六百三十九万六千六百十四弗となつている。

聖公会は過去半世紀に会員數約三倍に増加した。即ち五十年前の信徒數六十六万四千から百六十一万二千九百に、献金は千二百七十一万四千百四十一弗から五千九百十三万五千四十八弗と約五倍の増加を示している。

ルーテル系は正統派、中庸派、自由派と三大派に分れ更に少數派が存在するが、最大のものは自由派アメリカ合同ルーテル教会で、会員數百八十一万七十六名、次いで正統派＝ミズリイ大会が百四十六万九千二百十三名、中庸派アメリカ・ルーテル教会が六十二万四千七百十四名と報告されている。

**カトリック教会の教勢**　一九四七年六月P・J・ケネディ書店から刊行された『公認カトリック信徒録』によれば全米＝アラスカ、ハワイ諸島を含むーの教区數は一万四千七百四十二、現在信徒數二千五百二十六万八千百七十三名となつている。

この數字は百廿五年前ニューヨークで刊行された『我らの主の一八二二年のカトリック教会信徒録』の統計に比べて教区數において百十八倍の飛躍を示している。

セブンスデー・アドベンチスト（安息日再臨教團）は世界を通じて五十一万四千七百名（一九四五年）の信者を有するが、その中數は六万五千百人は米國教会の所属である。世界総会はワシントン市タコマパークに本部を置き総理はマケルヘニー氏。総会の下には北米、中米、南米、濠、支、極東、南欧、中欧、北欧、南亞、北亞の十一支部を有している。

アメリカ・フレンド協会（クエーカー）は世界の会員數十四万、その中十二万がアメリカ人である。しかしこの小さい群は、一九一七年第一次大戰に、

アメリカが參戰して以來今日まで三十年の間に六千万弗の資金と一千万弗に相当する物資により廿二ケ國六百万の民衆を救濟した。ルウフス・M・ジョーンズ博士は一九一七年以來アメリカ・フレンド協会長として活動を續けて來ているが、博士が第一次大戰後、自身及び全協会員の信仰を表明し、その中でクエーカー教徒に與える言として、

今から二百年たてば世人は諸君の名をすら忘れてしまうであろう。……だが、諸君のやつているこの愛の業は決してすたることはない。何となれば諸君が愛を生活に實現する時、又いと小さき奉仕において神の器となる時何者もそれを損ない得ないからである。

と述べている言葉は最も良くフレンド精神を表現しているものである。

アメリカでその内容の最良なことによつて知られている日刊新聞『クリスチャン・サイエンス・モニター』の母体、クリスチャン・サイエンス教團は現在二千八百の教会を有して活動している。この教團は神癒即ち医藥の力によらず信仰の力により病氣を癒すことを中心教義としメリイ・ベーカー・エディ夫人（一九一〇年歿）の創始にかゝる。

一九四七年六月より九月にかけ盛大な百年祭を挙行したモルモン教團は、別名を『ユタ末日聖徒のイエス・キリストの教会』と呼び、一種のキリスト教的共産主義の教團である。創立者は米國ヴアモント州生れのジヨセフ・スミス、彼はアメリカに旧教の祭司の職を再現すべき啟示を受けたと称して一八三一年オハイオ州カートランドに『一致教團』という教派を設立、その後ミズリイ州西部、イリノイ州ナウヴウに夫々聖都を設けて教徒一致の理想國家を建設しようとしたが、禮神の制度であるとして他派の迫害を受け、遂に



離れ果てたけい谷の地ソートレーク（ユタ州）に赴いた。その後百年で同教徒達は、この地を西部商業取引の中心地、人口十八万三千の近代都市に作り上げた。今は多妻主義を捨て新國家建設の政治運動もやめた。信徒は全世界に百万、ユタ州では全人口六十五万の七割を占めている。若い男女青年宣教師三千五百人は洗礼者ヨハネを自任し傳道してをり、信徒は凡て本部に十分の一献金を実行している。

教会は百貨店、ホテル、日刊紙、放送局、銀行、信託会社、生命保險会社を経営し、生産方面では製糖会社、牧場、氣山、製劇工場を持つている。

その教團はとも角として、百年の間に荒野に近代都市を作り上げ、凡ゆる事業が信仰の力で運営され、全教徒が理想の生活を送つているキリスト教共産主義教團のこの成果は注目されて良かろう。

## 基督教誌の販賣高激增

アメリカでは現在八百種以上の基督教新聞、雜誌が発行されている。宗教ニュース通信社ではこれら新聞雜誌の中プロテスタント及びカトリックの代表的なもの七十種について過去七年間の購読状況を調査した結果を次のように報じている。

一九四七年九月十日現在で、七十種の中の五十七種は一〇％から五〇％の購読者増加を示し、その一九四〇年の総購読部數は二百六十二万九千であつたが、今日では四百廿二万五千を超えている。その首位にあるのはニューヨークの國際月刊紙である聖書協会月報で一九四〇年の五倍以上に増え、現在読者數廿万。カトリックの月刊紙エクステンション・マガジンは七年間に廿五万八千の増加、また全米カトリック週刊新聞サンデイ・ヴイジターは約廿万の新読者を得ている。警名なものの中では福公会週刊紙リ

ヴイング・エヤーチとニューヨークのジエスイツト派週刊紙アメリカがそれぞれ五千と一万二千の読者増加を示している。

これらの刊行物の読者増加の原因としては興味ある宗教ニュースが数多く提供されていることと、戰後に著しい宗教心のたい頭、読者獲得運動の成功等があげられている。

## キリスト教病院の進展

全米教会連盟は一九三七年十月宗教と保健とに関する使命を主とする働きを開始したが、今日では全米に四百五十のプロテスタント経営の病院、診療所が生れ、キリスト教精神に最も相應しく目つ意義ある奉仕を行つている。

一九四七年の夏には二百人以上の神学生が廿一カ所の訓練所で臨床診療法の訓練を受けている。キリスト教信仰が人間の全生活に関するものであるならば、牧師は病氣治療についての訓練を受けて、心靈と身体両方面の保健に力を尽さねばならないということが最近の米國教会の大きな関心事となつてをり、教会のこの方面への進出は今後益々活発化するものと見られる。

## 切実な悩み―人種問題

アメリカの南部の教会で常に問題の種となるのは人種問題である。一九四七年八月コペンハーゲンにおいて世界バプテスト連盟大会が開かれ、次の様な決議を行つた。

人種、国籍、性別、宗教などに関りなく全人類に良心の權利を拡大することはわれわれの第一の義務である。

ところが全米バプテスト大会外國傳道部長マーシヤル・L・シエパード博士から抗議が出た。ニグロの代表はこの決議に何の感銘も覚えない、何故かならある白人代表者達が彼らと同じホテルに宿泊するのに不平を鳴えている若しこの事について弁明が行われなければアメリカ・バプテストに属するニグロ信徒四百万人は連盟を脱退するであろう、というのである。

この問題は結局、新しく連盟会長に就任したO・オスカー・ジョンソン博士からシ博士に対し〃凡ては無解に外ならない〃旨釈明してケリがついた。

同じ年の九月、今度はカトリック教会に問題が勃発した。セントルイス教区のジヨセフ・E・リツター大司教が、黒人教区学校が超満員のため、黒人生徒の白人教区学校への入学を許可した事からである。激怒した白人生徒の父兄七百名は対策委員会を組織して黒人生徒の登校禁止を要求しようとしたが、大司教はこの計画を抑え、九月廿一日の日曜日に大衆の前で公開状を読んだ。大司教は神の前には万人は平等であると力説し『教会の權威者への服従』を要求、若し父兄が要求計画を実行に移すならば破門にすると警告した。

委員会は実行運動を中止、同時にアメリカ駐在の教皇使節アメルト・チコニアニ大司教に上告したが、結局〃大司教の權威を尊重しその方針に従へ〃ということで十月五日落着を見た。

この種の事件は特に珍しいことではなくアメリカ南部の教会にとつて人種問題は大きな悩みの種となつている。

## 〃青年を基督へ〃運動

ユース・フオア・クライスト（青年を基督へ）は、戰後のアメリカ教界においてオツクスフオード・グループ・ムーヴメントに対比する大運動として世人に驚異の眼をみはらせている。創始者ツヤツク・ウイルツエンは今年卅五才、十八才の時痛切な回心を経験、街頭婦道の一隅に加わつてニューヨーク・ブルツクリン街の角に立つたが、彼は『人者レキリストにあらば新に造られたるなり』と聖句を唱えただけで

コソ〳〵人陰に隠れてしまった。

ところが十余年後の今日、彼がマヂソン・スクエア・ガーデンの壇上に超つ時二万の青年男女が立錐の余地なく詰めかけ更に数千人が入れずに場外にひしめくという有さまである。

彼はニューヨーク市をめぐる二百五十マイルの範囲に『生命の書』をモットーとする大集会場を二百五十余ケ所持ち、シカゴでは三千、フイラデルフイアで四千、ボストンで五千の会衆が集るが、更に随時随所に開く実幕傳道には幾千の会衆があるか測り知れない。

彼はほとんど学歴を持たない。中等学校を中途で止め保険の勧誘員になつて、書は保険証書を書き夜はダンスホールのオーケストラを指揮していた。その後軍隊生活の面白さを聞かされて騎兵軍楽隊に入隊トロンボン吹きとなつたが、同じ隊員のジヨージ・シリングという青年が回心しウエルツエンに聖書を與え無関心な彼にヨハネ傳を說き、更にYMCAの傳道集会に導いた。

これがウイルツエンの回心の動機となつたのである。彼は傳道を開始するに当り教会の集会に甚だ芳えないよう土曜日の夜を選んだ、また彼は『生命の書』の放送を開始し今日ではWHKの『生命の書！　放送開始！』のアナウンスを待つ青年男女は数千数万に上つている。

戰後この運動は進駐軍將兵の中のメンバーによつて日本へも持ち來らされ現在埼玉縣豊岡をはじめ東京、神戸の各地で盛んな運動が興つている。

## メキシコ新舊教会の対立

メキシコのカトリック教徒は二千万、プロテスタントは十八万であるが、その間の反目葛藤は相も変らず続いている。プロテスタントはインデアンに聖書を教え文化的教育を施すが『カトリックは聖書をインデアンに與えたり、教育したりするのを喜ばない知識的啓蒙がインデアンをロマ教会から遠ざけることを恐れるからである』と神のプロテスタント教会監督デヴイド・ルエスガ氏は述べている。一方カトリックのある司祭は、プロテスタントの宣教師が薬品や衣類を土民に與えた事について『彼は一八四七年のアイルランドの飢饉の時のイングランド宣教師と同じく、スープでカトリック教徒の靈魂を買つたものだ』と嘲じている。この対立の解決は容易には出來そうにもない。

**ブラジルの新教徒優勢**　ブラヂルの新教徒は一百七万四千八百五十七名であるが、著名なカトリック評論家アテイド氏は最近の著書でプロテスタントを評して、『プロテスタントは強力な少数派を構成しているが、それは総ての教養あるブラヂル國民に尊敬される優秀分子によつて組織されているからである』と述べている。

新教十一教派の教職の組織する委員会は、ポルトガル語聖書の改訳に着手し一九四八年末までに完成を期している。

# 欧州諸教会の現状

イギリスの著名な世論調査機関マツス・オヴザアウエヨン（大衆観察）が戰後ロンドン近郊の市民五百人に対して行つた宗教調査によると男子の約三分の二、婦人の約四分の三が神の存在を信ずると答え、男子の三分の一、婦人の五分の一は明瞭に神の存在を疑うと答えたという。

**英國はキリスト教國か**　イギリス國教会（聖公会）は戰後英國民の道徳頽廢に悩んでいる。家庭生活は崩れ、離婚事件と少年犯罪は増加した。一九四七年度の調査では教会と俗接な関係を持つ國民は一割乃至一割五分で、二割五分乃至三割はクリスマスその他の特別な催しの日だけ教会へ行き、四割五分乃至五割は教会に好意を持ちクリスチヤンを自認するが概して教会生活には無関心な連中で、他の一割乃至二割は教会に対して敵意を持つているといわれている。又、教会に出席している者必ずしも眞のクリスチヤンとはいえないというのが通論で、家庭の傳統から自然に教会へ出入するようになつた青少年に対しては特に信仰の教育が必要であるとされている。

教役者の生活も楽ではない。加えて戰時中からの活動による疲労が沈滞の度を深めていることも事実である。

かゝる状態に対して旅國國教会では富裕な教会生活を勧奨する一方、映画、新聞、廣告等近代的手段による傳道、レイマンス・エバンゾエリズム（平信徒傳道）の活動等を促進している。平信徒傳道は六週間の講習会を開き、経験者の体験を聞き祈を共にし、一定の訓練を経て活動するが、一ケ所の講習会場には六、七十人宛集つている。

判明している現在受洗者は約百万。

尙、以上の悲観的事実の中にも徐々に光明は見出されつゝある——。瓜邦出席者は減つたが然し熱心な信者が選別され、活動の原動力となつている。大部分の教役者はインフレと苦闘しつゝ熱心に働いている。宣教の熱意は衰えず海外傳道費の寄附金額は壬辰しつゝある。

神学的には純理・正統宗教（オーソドツクス・クリスチヤニテイ）への復帰の途をたどりつゝある。

以上は教勢から見た國教会の悩みであるが他にもう一つの困難が生じて來ている。

それは『大英帝國の全体主義的傾向』である。ヨークの大主教ツリル・F・ガーベツト師はこの問題について新著『英國教会の主張』で教權の自由を叫び『國家が主教や執事の任命權を持ち諸種の保護政策を行うことにより教会を國家自体の家のまゝに統轄することが可能である』と述べ、議会が次の様な要求を容れることを希望している。

（一）議会の承認を経ずして國王が礼拜様式の変更に同意出來るような慣習を設けること（二）教会関係事項を扱る特別法廷を設け、その判決については行政処分事項の外は民間法廷に控訴する權を認めないこと（三）教会の教職任命に関しては教会と協議すること（四）カンタベリイとヨークとの主教会議に新しい教会法典施行の權能を認めること

この要求をカンタベリイ大主教デヨフレイ・F・フイツシヤー師も全面的に支持した。國家と教会の問題は多年國教会の首脳者の憂慮の的となつていたものであるが、國家統制が最近强化の傾向にあるのに対して新しい関心事となつて來ているものである。

**ソ連は信教自由の國？**　唯物主義の國ソ連に対して信教の自由があるかどうかという疑問は誰しもが持つところであろう。

一九四六年米國を訪問したロシア正教会アレキセイ大主教はこの疑問に答えて『ソヴエツト聯邦における教会はソヴエツト政府の干渉から自由の立場にある。反対に民衆の思想と希望を表現する教会は政府の尊敬と信頼とに満

足している。暴虐は恐怖からではなく、心の底から忠実にして献身的ソヴエツト市民たる義務を感ずるものである』と全米各派代表の前で述べている。

ソ連に二百万の会員を有する米國南部バプテスト教会大会議長ニユートン、メソヂスト教会牧師ソツクマン氏ら七名の米國新教諸教会代表とベルリンのロシア正教会大主教アレキサンダー・ネモロフスキー、同大司祭セルギー・トロエウスキー師ら三名はソ連政府の要請に應じ一九四六年前國、夫々その印象を報告しているが、同者の報告によればソ連教会の現状は次の如くである。

△モスコーからハバロウスクに至る地方にソ連政府が公認している宗教團体はギリシヤ正教、アラビヤ教、ユダヤ教であつたが、一九四六年に至り米國バプテスト系の教会も之に加えられた。バプテストの信徒数は約二百万である。

ニユートン牧師は『ロシアのバプテスト教会は一週間の七日を全く会堂を開放して宗教指導や一般的教養や体育、娯楽などのために用い一日も空しくしていない。バプテスト独自の自由の精神は多くのロシア青年を動かしつゝある。戦災孤児救済や公共衛生施設のような社会事業にソ連政府とよく協力している。ロシアは我々の良き協力者だ』と謂つている。

又、ソツクマン博士は正教会について、聖日の礼拝には会衆が極館の列をなしている、然し会衆の中には青年の姿は余り見えず、之は教会の非科学的教説よりも非社会的態度に対する反感に起因していると述べ、又、ロシア人が教会に頻繁していろ一例として、村の司祭でも月額三千乃至六千ルーブルの收入があり勤労者と比較し又アメリカの教師の收入に比して少ないものでない、と教職者の経済的地位の高いことをあげている。

△一方ベルリンからの正教会使節団は一九四二年スターリン首相とモスコー大主教の神士協約以來、ロシア各地の聖堂が多数修繕され、大主教の權威も復興、神学校の設立も認可されて数百人の神学生が勉学していると報じ、更に無神論の攻撃を廿年にわたり出版して來たペツボツンク出版所が閉鎖され代つて教会出版所が認可されたこと、教会に対する経済的保護も幾分に行われていることを認めている。

然レセルギー大司祭はロシア教会の将來について『スターリン首相は戰争中の民心收らんのために教会を重んずるかのような政策を採つたに過ぎないのであつて政府要人の無神論、宗教否定は頑として捨てべからざるものがある。近き将來には教会を圧迫しロシア人の宗教心を根絶する方策に出る事必定である』と悲観的観測を下し、ネモロフスキー大主教は反対に、ソ連政府は教会と何時迄でも友交関係を保つてゆくと楽観的に見ている。

△尚、この年ロシアの宗教紙プラツキー・ウエストニクは、ロシアにおける新教二千の教会の礼拝出席者数は戰前の約四倍に増加したと報じている。

**ソ連政府の新宗教政策**　ソ連は現在東欧、中欧諸國において共産党勢力を拡大、ソ連を中心とするスラブ諸國民の大同團結に鋭々努めているが、かゝる政治的行動と平行して、宗教の分野におけるスラブ諸國民の一致をも企図しているものようである。即ちロシア正教会の保護育成について、ソ連政府は前記の如き政策を執る一方、既に一九一七年以來ソ連國立博物館と化していたモスコーの北四十マイルにある聖セルギウスのトリニテイ修道院を、修道院として用いることを許可、且つモスコー大主教の主教



補として指定した。この外今後七年間に教会堂修理の費用として二千百万ルーブル（米貨約四百万弗）の國庫支出を承認している。

この様なソ連政府の行為について、ある観察者は、ロシア人の間に深く根ざした宗教感情の現れと見、他の観察者は諸外國人に対しソ連が信教の自由を認めていることを示し、宗教政策に対する疑惑を解く目的でなされたものと観ている。ところが、その後に至りかゝる対教会政策は、宗教による汎スラブ運動への利用を目的とするのではないかと見られるような節がある。

即ち一九四七年の秋ロシア正教会は、モスコーに欧州各國殊にバルカンのギリシヤ正教会の指導者を集めて正教会大会を開いた。この大会の第一の目的は、帝政時代においてモスコー大主教がバルカン諸國の正教会に対して有していた權威を、今度はソ連のために恢復せんとの意図に基ずくものと解されている。元來ロシア正教会はソヴエト政權樹立以來その対外活動及び帝政時代の如き汎スラブ運動を禁止されていたのであるが、大戰以來再びこの種の活動を行うことを許されたもので、現に戰時中の功績によりモスコー大主教をはじめ教会指導者達は勞働赤旗勲章を授與されている。

モスコー大会にはブルガリヤ、ルーマニヤ、ユーゴスラヴィヤ、アルバニヤの諸國の正教会の代表者は参加、ギリシヤ及び中東の教会の指導者達は参加しなかつた模様である。

かつて宗教を阿片と断じたソ連政府も、結局宗教―殊にロシヤ正教が傳統的に國民の精神を支配していた力を認めざるを得なくなつたと同時に、この力を利用して汎スラブ運動への利用を試みたという見方は少々うがち過ぎた見解かも知れないが、ソ連における信教の自由は依然一種の制限の下に置かれている自由であることは認めざるを得ない。

**再起するドイツ教会**　ドイツ教会の再出発は、一九四五年十月、第二次大戰における『罪の連帶責任』とそのざん悔の宣言に始まる。ドイツの降伏後教團にして結成されたドイツ福音教会連盟は合同ルーテル教会と改革派教会を中軸とするプロテスタントの連合で、四千万の会員を有し（ドイツの総人口は約七千万）マルチン・ニーメラー、テオフイラス・ウルム、オイゲン・ゲルシユテン・マイエル氏らが幹部に立つて活動している。

元來ドイツでは教会の社会的活動を排撃する傾向にあつたが、今日では基督教の信仰は個人に対すると同様に社会に対しても連帶責任を有するという立場に立ち、國民生活の再建のため全教派が協同して積極的救済運動を行つている。從來かゝる協力はドイツ教界にあつて見られなかつたものである。

救済事業團体の中でも指導的地位にあるのが、ヒルシユヴエルクで、ドイツ福音教会連盟を中心に×ソヂスト、自由福音派、自由ルーテル、古カトリツク、救世軍等の諸教派も協力、更に六千の教会を背景に持つ國内傳道團も之を支持している。

もう一つの著しい傾向は教会と勞働運動との提携である。一九四七年五月カルルスルウテで開かれたパツド・ボール協会の大会では教会と勞働運動との関係について數日にわたり活潑な論議が行われた。この大会でテオフイラス・ウルム監督は過去における教会と社会主義者双方の過誤を指摘し『今日両者の間の隔壁は除かれ、新しい基礎が据えられている。社会主義はその実現にキリスト教信仰のみから來る態度を必要とする』と述べている。

國民の信仰への復帰は活潑とはいえない。ボン大学のデーン教授の調査で

は、最近ベルリンにおけるプロテスタントの礼拝出席者は在籍数の〇・七五%に過ぎないという。一八六九年の調査では一・八%であつた。当時ベルリン大聖堂は二千三百人、聖マタイ教会は一千五百人の会衆を引きつけていたが、礼拝不振の原因は主として牧師の説教が信徒の関心をひかなくなつたからだといわれている。

会堂再建も困難な事情にある。ハノヴアーの市街には戦前卅七のプロテスタント教会と十四のカトリック教会があつたが、戦時中新教は十三の教会を喪失、九教会が大破、カトリックは三教会を喪失、三教会が大破した。会堂の再建乃至修理は世界的工場再建の後におかれているので前途遼遠である。

プロテスタントの定期刊行物は一九二九年に一千九百廿八種あり、一千七百万の読者を有つていたが、今日出版を許可されているのはアメリカ軍政地区で六十四種、読者数六十四万二千、イギリス地区で十六種十万、フランス地区八種、十三万七千、ロシア地区十種十一万二千、計九十八種、読者数九十九万一千に過ぎない。しかしその内容においては一般出版物に比し極めて高い程度を示しているといわれている。

一九四八年秋ヴツペルタールで開ドイツ基督教青年大会が開かれることになりその準備が進められている。米国軍政部青年運動部長L・E・ノリイ氏の報告によれば米、英両軍政地区のキリスト教青年運動は著しく活潑化して来ている。即ち米軍地区では青年諸団体の会員数百五十万人の中の四三%、英軍地区では八千万人の中の六〇%がキリスト教青年諸団体の会員で、その中でドイツYMCAが最も有力な活動を行つている。

最近、ドイツ福音教会と自由派の小教派との間に協調気運が起りその具体化が進められているが、敗戦の苦難の中にも、ドイツ教会の将来には希望の光りがさしそめて来ているといえよう。

## 教皇ローマを去るか！

ヴアチカンの戦後の動きは対共産党との闘争に集中されている。一九四七年八月ピオ十二世とトルーマン大統領との親書交換、ラヂオを通じての世界信徒への呼びかけ、教書の発表等において教皇の主張する問題は常に共産主義排撃であり、このため反共十字軍を結成せんとまで極言している。教皇庁の悩みはイタリーに共産主義勢力の増大を見るに至るような事態の生ずることである。このためヴアチカン政庁の他国への移轉説まで一時風説されるに至つた。併し西欧列強の世論は、例令共産政府が樹立されても、ラテラン條約が破りんされ、安全を保証され難くなつた場合、且つ全世界のカトリック教徒が憤慨を表するに非ずばローマを去るべきではないとの意見を表明している。

イタリーのプロテスタントは約八万の会員を有するが、その活動は著しく自由を欠いている。戦争末期米軍は少数のプロテスタントのグループに放送施設を許可した。その反響は大きく、多数のプロテスタント団体に関する報道の要求が殺到した。ところが一九四六年末頃からこの放送の約束は著しく圧迫を受けるようになつた。過去において第十二世紀のプロテスタントとして著名なピイター・ワルドーの派に属する者は、六百五十年間渓谷に閉じこめられ一日に百五十人焼き殺された苦難の歴史を持つ。イタリーにおける新教の将来は尚多難ないばらの途であると見られる。

カトリック教国スペインの新教も同じ悩みを悩んでいる。最近マドリッドにおいて聞公会の会堂が反プロテスタントの暴徒の襲撃を受け損害を蒙つた又、マドリッドのカトリック庁道部機関紙『エクレシア』は今後フランコ政府は愈々プロテスタントを抑圧しようとしている、と断言している。圧迫の原因はスペインのプロテスタントがフランコ政権に反対したことによると見られている。尚、スペインの総人口二千七百万の中新教徒は僅か二万五千、それも主として外国人であるといわれている。

オランダ教会は戦後復興の精神的指標たることを期して『教会と世界』運動（ケルケ・エン・ウエレルド）を展開している。指導者はエイクマン博士本部をユトレヒドリーベルゲルに置き、医療、科学、政治、文化等凡ゆる分野の復興の諸問題にキリスト教を啓蒙しようというもの。運動方法としては事業主と被傭者、ツヤーナリスト、政治家等各種の協議会を開催する一方、新しい指導者養成のための講座を本部に設け、国内の神学者及び各種教育界の権威が指導に当つている。

尚、教会費の戦災復興費は二千万弗を要すると見られているが、その費用は半額政府が負担することになつて、着々再建の計画が進められている。

ハンガリーでは、国民の七〇%を占めるカトリック教会が、言論出版の不自由を訴えているが、これはハンガリー政府の宗教平等方針が、国教会であるカトリックの不満を買い教会弾圧の宣伝となつて現れたと観されている。ハンガリーの新宗教政策は国教プ默認教会ーパプテスト、メソヂスト、再臨派、ブリマス兄弟団、エホバの証人派など新教諸教会との差別を撤廃し、新教の合法性を認め之に国庫補助金を交付しようというもので、之に対しカトリック側では『政府の新方針はハンガリー人の公認された信仰を弱体化させ、宗教的傾向をまん延させることである』といつて攻撃している。

チエコスロヴアキヤでは一九四七年夏教会軍閥が結成された。参加教会はユニテリアンとチエコスロヴアキヤ教会を除く全教派で、チエコ兄弟同盟教会、スロヴアキヤルーテル教会、改革派シレジア教会、メソヂスト、バプテスト、モラヴイア教会兄弟連盟、古カトリックの諸教会と救世軍から成つている。会長にはチエコ兄弟同盟会長ヨセフ・クレネツク氏が就任した。

## 北欧諸國の教会現勢

デンマークは人口四百四万一千六百四十六で、ルーテル派の会員が二千二百四十二、牧師が一千七百五十三名、五人の神学者が国会に議席を占めている。

スエーデンでは人口六百五十九万七千三百四十八の中六百十八万九千四百九がルーテル派国教会に属している。他はバプテスト四万一千、救世軍三万九千九百七十六、メソヂスト一万二千三百四十一、ロマ・カトリック四千百末日聖書派三千二百、スエーデン賞教協会十万六千二百六十六、ペンテコステ運動十万、となつて居り、ユダヤ教も一万の信徒を有している。

ノールウエイでは人口二百八十一万四千百九十四の中、七万一千六十二の外は全部国教に属する。メソヂスト一万二千二百七、バプテスト七千七百八十八、ロマ・カトリック二千八百廿七、ユダヤ教一千四百五十七といつた順である。

フインランドはやはりルーテル派が圧倒的で三百七十七万九千百六十六、それに次いでは正教会の七万五百四十二、自由教会の五千八百十七、メソヂストの二千百六十二、バプテストの一千九百七、ロマ・カトリックの一千五十となつて居り、他にユダヤ教一千四百六十七、マホメツト教百十九がある。

# 黎明期のアジア教界

中國における教会の動きは各ミッションの傳道事業再開と華北、滿州における官教師一般にカトリック司祭一に対する迫害の二つがクローズアップされる。

## 対華傳道・教育に重點

中國に対する傳道はカトリックが一五五二年、新教が一八〇七年に口火を切つて以來、各ミッションとも布教に際して学校、医療事業、婦育院、救貧事業などの社会事業を伴うのが慣例になつている。この中教育事業に最も重点が置かれ、カトリックは主として小中学校経営により中國人大衆の教育に、新教は中学校以上の経営により中國人知識階級の養成に貢献して來ている。

從つて戰後の各ミッションの対華傳道方針の重点が教育事業の再建に指向されている事も当然であるといえよう。

ニューヨークに本部を置く中華民國キリスト教大学協力理事会は一九四六年の第十四回年次総会において從來十三あつた大学を九つにきとめその内容、学的水準を高めることに方針を決定した。これは特別調査委員会を設けニケ年に亘つて調査研究した結果に基ずくもので、この案によれば九個の大学に四十三の学部乃至学科が存在することになり、学科別に見ると

科学部九、文学部八、教学部四、看護婦養成部四、農学部二、公民教育学部、工学部、高等経営、法学部各一、神学部六、農業可科学部二、研究科三

となる。尚、一九四八年二月十四日のUP電は中國キリスト教教育協会の発表として、現在米國人経営のキリスト教諸学校に在学する学生は一九三六年当時に比し著しく増加した。十三のキリスト教大学の中、在学生の数の減じたのは二校のみで、その理由は戰時中学生が戰禍を避けて各地に移住したためである。総数においては戰前の六千名が現在二万二千五百名に増加している。と報じている。

中華カトリック教会では同じ二月十五日に上海でカトリック教育理事会全國会議を開催小学から大学に至る七千の学校とその学生生徒卅六万名の將來に関する今後の教育計画について協議した。会議の内容は詳かでないが、干斌大司教がその開幕の中で『われわれの教育活動は中國の文化運動と歩調を合すべきである……そのため先ず小学校及び中学校の増加を必要とする』と述べた事実は、從來カトリック教会の執り來つた方針と合せて今後の方針の中軸として取上げられていると見て間違いなかろう。尚、この会議に対して國府教育部長朱家驊氏は祝辞のような メッセージを寄せ、その貢献を賞讃している。

戰時中、中國のあらゆる分野でカトリック信者の果した役割は目覚ましいものがあつた。また一般に中國の学生間に顕著の原動がみられる今日、カトリック系の諸学校にある学生達は、特殊に選ばれる学徒として中國学生のよき模範となつている。洪水の永い間教会は西欧の科学技術を必要とする中國に西欧文明の長ちよい要素を導入すると共に中國文化をも西欧に紹介した。

セブンスデー・アドヴェンチスト派（安息日再臨教團）の中國派遣員J・S・ストレール博士は〝今日の中國は從來に比べて最も宣教師の來訪を歓迎



している〟と語つてミッションの活発な活動を促している。

同派では一九四七年度に百五十万弗、四八年度にも同額の資金を中國の復興援助に提供する事を決定、他に百万弗の資金で、中國に有する学校、病院教会等の諸施設の復興を急いでいる。現在同派の手で復興されつゝある建物は十六であるが、戰前の五十四の施設が遠く復興する日も遠くはないと見られている。

## 中國内戰による影響多大

一九四七年の末から一九四八年上期にかけて外電はしばしば中共軍のカトリック司祭迫害を傳え、列挙せるものだけでも、ペイピン附近におけるラザール教團所属中國人宣教師二名の射殺。チヤハル省年家坪の修道院における修道士（フランス人三、カナダ人一、ドイツ人一を含む）廿五名の虐殺事件。河北における米、仏、伯、中國人等修道士三十名、修道女五十名の逮捕等。又、新教関係では同胞教会派とメノナイト派に対する中共軍の布教禁止令。河南省柳河で米國人婦人宣教師、山西省内城におけるスエーデン婦人宣教師殺害事件等があげられる。

かの様な情勢を見て米國務省は一九四七年中華中地区の宣教師引揚を勧告したが、一方カトリックではるい次の迫害事件にも拘らず断固教線を守り抜く決意を固め、田耕蕃主教はこれに関し前記カトリック教育理事会の席上で次のように語つている。

中共はカトリック教会の教師を迫害しているので、華北の中共地区における布教は極めて困難であり、最近では三千名以上のカトリック信徒が中共地区から離脱した程だが、教会としては何地区からの撤退は計画して居らず、困難が加われば加わる程その聖命力と闘う信念を高めている。

中共軍の四名の三はクリースチャンである

中共の教師軍隊を評して曰く

一方、中共軍のため布教を禁ぜられた同胞教会派とメノナイト派の宣教師は独自の活動地を失つた結果、メソヂスト派の傳道に熱心な協力を示している。これについて米國メソヂスト教会傳道部極東主事フランク・T・カートライト博士は『右の如き例は教会活動の在り方を示唆すると共に、組織的な計画による宣教師の交流を可能にするばかりでなくその周囲によい影響を及ぼす事を示すものである。キリスト教傳道の重要な問題は傳道の重複ということではなく、弊害はむしろ各派の孤立と、その結果生ずる宣教師の個性並びに傳道方式の内向である』と語つている。

兎に角、各國の宣教師が中國における布教上の特権を獲得するため苦難な歴史を経験してきたものである以上、彼等が革命途上にある今日の中國にあつて、特に土地改革問題などの点で今後も中共側と摩擦を生ずるであろうことは想像に難くない。

フイリツピンでは聖書の印刷を開始する手始めとして、インドではビルマ、セイロン地区を含む南印度合同教会が発足した。沖縄においては一九四七年四月沖縄キリスト教連盟が結成され、当山正昭氏が理事長に就任した教会の集会は読んで、石川市（終戰後出來た市）の石川教会の如き年年ほどで四、五十名が百二、三十人の出席平均に躍進したと報ぜられている。朝鮮の事情は明かでないが、北鮮ではキリスト教の將來は悲観的に見られている。即ち一九四七年九月末UP電は確実な米軍筋からの情報として

ソ連当局は北鮮ソ連占領地域のキリスト教の絶滅に乗出そうとして居り、北鮮のキリスト教徒は地下運動に追いとまれる虞れがある……つい近頃の平壌新聞は「南鮮米軍占領地域のキリスト教徒は愛國的政治指導者の暗殺

に責任がある』と攻撃しているが、これは宣教師の影響で多くが親米的な朝鮮キリスト教徒に対する絶滅工作の攻撃開始の企図であると見られる。と報じている。いづれにせよ北鮮のキリスト教徒にとつて多難な将來が予想されることは疑くない。

## 世界神学界の動向

原子爆弾の登場によつて終止符を打たれた第二次世界大戦、それはキリスト教神学界にも大きな影響を與えた。

カール・バルトが戦後ドイツへ帰國を許可され、ボン大学に再び教鞭を執つているのを始めとして、各國の神学者は夫々著述に、講壇に目覚しく活動している。

### 新しい神学者の抬頭

ドイツに帰つてからのバルトの活動については明かでないが、チューリヒの教授エミール・ブルンナーは社会的秩序に関する著書を出し、一九四六年の暮には米國プリンストン神学校で『三位一体と啓示』と題して講演している。エディンバラ大学のジョン・ベイリー教授は『巡礼への招き』の一書を出し、スコットランド長老教会の議長として活躍している。

米國の神学界は戦争の打撃を直接に蒙らず出版その他の條件にも最も恵まれているので多彩な動きを見せている。パウル・テイリッヒ、ラインホルド・ニーバー、マッカイ、ヴァン・デューセン、ステイヤ、シエラー、アウブリー、トーマス、グリーン、ノックス、トルーブラッド師の著書乃至論文は進駐軍牧師や宣教師の手を通じて我國にも傳わつて来り、尚、ペネット、カルフーン、ホルトン、ハークネス、フエレバウク等新しい神学者が旺んに活動している。

カトリック教会の神学者九十余名により一九四六年九月カトリック神学者協会が組織された。この会は会員相互の連絡協調の増進、神学と時局問題の関連その他についての研究調査を目的としている。会長はワシントン大学総長フランシス・J・コンネル博士、副会長カナダ・モントリオール、グランデ神学校G・エール、書記カトリック大学J・C・フエントン、会計ニューヨーク聖ヨゼフ神学校J・E・リーの諸氏である。

米國の神学界の新しい動きは社会的に進出を見せている点で、例へば原子爆弾の問題の研究に哲学者と神学者が自然科学者の中に交つて合同協議会を開いたり、現代の社会と文化からの挑戦に対して神学者とキリスト教思想家が協同して『キリストの應答』と題する研究を発表、又、プリンストン神学校では世界の神学者、キリスト教思想家二百名に対して、自然法の問題についての解答を求めるなど活潑である。一般に個人の救の完成を目指す神学から、社会救済の観念に立つ神学への轉換が戦後の大きな現象として見られる。

### 新しき指導者ニーバー

ドイツではバルト、英國ではジョン・ベイリー、米國ではパウル・テイリヒ、ニーバー等が神学界の中心をなしているが、その中でも注目をひくのはニーバーの活躍であろう。

ラインホルド・ニーバーは一八九二年ミズリー州に生れ、エール大学神学部に学び一九二八年ユニオン神学校の助教授となつた。エールではB・DとM・Aの学位を得ている。現在ユニオンでは実践神学を講じているが、彼が



一九三九年ギフオード講演の講師に選ばれエディンバラで講じた『人の本質とその運命』は後に出版されて世界神学界に波紋を投じた。一ところ世界を風靡したバルトの危機神学に代つて今やニーバーの新正統派神学がクローズアップされて來たのである。

米國の週刊誌『タイム』は一九四八年三月発行の廿五周年記念号の表紙をニーバーの写真で飾り、その誌面では四頁に亘り彼の主張を紹介している。『人の本質とその運命』に説かれているニーバーの主張は、現代の楽天的な人力万能思想を排し、人間の本質的罪性を力説し、『人間が自己の完全、万能を意識する時こそ最も罪性の高まつている時である……この意味において人生は必然的に悲劇的性格をその本性とするものであり、今や人類は精進潔斎の慎しみの時代に直面している』というのだ。

ラインホルド・ニーバー

プロテスタントの正統派神学の傳える所は、人の不可避的罪性、アダムの原罪の分與、信仰のみによる救、贖き主は救の決定的要素ではない事、原罪は神の賜物であること、宥和はキリストの受肉による贖罪の力と苦難と死とによること、歴史の終末は最後の審判である事などであるが、ニーバーの新正統派神学は、これを知的に整理したもの、換言すれば唯理論、自由主義、マルキシズム、ファシズム、理想主義、進歩主義などの諸傾向の支配している時代に対して正統派神学を再検討したものである。

ニーバーの方法はバルトと同じく弁証法的であり、その力説する『霊魂の永遠の危機』とキエルケゴールの説く『神と人との無限の本質的相違』については一致した見解を持つている。

人は何であるか……人は自然の一部であるが常に自然と理性とを超ゆる存在である。この優越性は人が神を予感する所にある。聖なる神の創造にかゝる人の世は悪ではない。人は神の創造によるものであるから悪でない。然らば何故人は罪を犯すのであるか？何故人の罪性を認めねばならないのであるか？……それは『不安』が罪の内的予件である。『不安』は自由と有限との背反から來る人の不可避的な精神状態である。あらゆる宗教がこの背反を問題にしているが、他の宗教が背反そのものを問題としているのに対して、キリスト教はこの背反による罪を問題にするのである。ここにはいたいする不安は人の自由と有限とによつては解決に導かれない。どうしても人類の歴史以前の領域に立ち帰らねばならない。併しそれだけでは何にもならない。信仰と希望と愛とを以て安易な楽天主義を克服しなければならない。

これがニーバーの主張である。

### 世界の終末は近いか

原子爆弾の出現は人類に世界終末の新しい恐怖を與えた。この問題について神学者、哲学者の間に多くの論議が起されているが、一九四七年度の、ニューヨーク刊行神学誌『キリスト教と社会』で、ローレンス大学の宗教学教授W・バーネット・イーストン博士、『ニオン神学校教授ロージア・L・シンの両氏、又、フランスの雑誌『エスプリ』主筆エマヌエル・ムニエル氏らはこの問題を次の様に論じている。

**イーストン** 聖書と歴史上の事実は、凡ゆる文明が最後の審判に晒されており、世界の終末は必ず來ることを示している。……教会は社会を救わなかつたが人々を救つた。教会人が現代社会を救うということは保証出來ないが、現代人を救うことは間違いなく出來る。……神は人間が発見し得るまで（例へば原子力を）発見させ給わない。それが世界の終をもたらすものとなるか、新しい時代の創造となるかは我々には判らない事である。たゞ我々が断言し得ることは、神は意図し給うことを必ず成し遂げ給うのであり神の目的は必ず無且つ変なることである。

**ロージア・シン** 聖書の預言及び默示には、神がその絶対主権の行使の一として世界の歴史に終止符をうち給うと教えられてある。しかるに人間は自己の力を誇つて事ごとに自分の運命を自分で拾めるといいながら自己を滅い世界を滅亡に導いている。これは創造者を侮み侮ることをしようとしない人間の傲かべきでう優であり、自ら神たり得ると考える人間の極致的な罪である。人間に原子力を使用させる神の計画が実行に移されるとか、神はこれを創造的にか破壊的にか何れかのため具えてその意図を遂行し給うとか說くのは甚だ危険極まることである。神は過るべき権力を持つ反キリストのサタンと戦い給うという歴史解釈の方がキリスト教の終末論にとつては現実性が大きい……若し人が原子力を人間の滅亡に用いるならば矢張りそれは人間の悪意に帰せねばならないものである。

**エマヌエル・ムニエル** 神が世界に終末を來らせる事と人が世界を滅ぼすことは本質的に全く違うことで、太陽を輝かすことと、ローソクに点火することとの相違と同じである。九四七年に千年期の終が近づいた時も人類は世界の終滅が來ると思つた。……人が無秩序を煽り立てたことを認めるよりも、默示録について調つたり神秘学等をひもとく方がたやすい。それで今日の欧州の混乱を默示録に書いてある終末の実現とするのであるが、これでは默示録の書かれた目的を示していない。余は人類が創造と終末期との中間期の終にあたる動乱の中にあるということを聖書によつて認めざるを得ない。

### 教会と國家問題亟燃！

教会と國家の問題はイギリス、スペイン、ハンガリー等國教を有する国々、政教分離の憲法にやつアメリカ等において多くの問題を蔵している。イギリスでは國家統制の弱化に対する原因、スペインでは新教の進出に対する國教（カトリック）の信仰擁護、ハンガリーでも同様な意味での事件があり、アメリカでは、政教分離の線上からも線側のツアチカン神使派遣に対するプロテスタントの抗議となつて現われている。この問題についてエール大学神学部長ルーサー・A・ワイグル博士は『ソシアル・アクション』誌上で次の様に述べている。

アメリカにおける政教分離は宗教を抑圧する為でなく、自由に発達せしめる為であり、信仰を軽んずるからでなく、重んずるからである。國家が神を無視し、神が國民と個人とに要求し給う正義を無視しているからではない。両者の分離はそれ自身十分なものではない。イギリスのように両者が結合していて最高の信教自由のある國もあるし、ロシアのように両者が分離していて國民の信教自由が十分に確保されていない國もある。この問題は理性と良心との十分な協調による高潔な原理と精神とによつて検討されねばならない。そこに必ず適切な解決の鍵が開かれることを信じて疑わない。

### 神学生の增加に新記録

全米教会連盟教授者委員の一九四七年度の発表によると、現在主要なプロテスタント神学校は百十九校、生徒総数一万四千一名（四月現在）で、その二五％三千四百廿七名は復員軍人である。復員者の数は今後も增加の一路をたどるものと見られている。因に以上の任意総数は一九四〇年に比し四四％の增加となつている。

# 終戰後の日本教界

## ——日本民主化と基督教への期待

同年秋のエール大学神学部の新学年は新入生九十六名、全学生数三百廿一名で開校以來の記録を示した。尚、全学生数の中復員者の数は四一・七％百廿四名に上つている。

同じ年の十二月中旬シカゴに開かれたシカゴ神学教授同盟の第六十一回年会では、シカゴの神学校に学ぶ生徒総数は一千五百四十八名、その中生徒数の多い学校は北部バプテスト神学校の三百廿五人、ギャレット神学校の三百十七人、長老派のマコーミック神学校百九十三人である。この外シカゴ大学神学部と関係を持つ四神学校の生徒は百九十三人ある、と報告されている。

米軍占領治下のドイツでは一九四六年の夏までにカトリック系十四、プロテスタント七、合計廿一の神学校が開校し学生の数は二千五百廿七名に達した。

## 宗教團体法廃止のその後

聯合軍の本十御註、ポツダム宣言の厳行に依る新法律の改廃に伴ない、戦時中宗教の自由を阻んでいた宗教團体法は、昭和二十年十月廃止され、教界は久しぶりに自由の空氣を吸うに至つた。これによつて日本の宗教界は俄然活発な動きを見せ分派独立、單立教会のそく生が一種の流行の如くになつた。

即ち連合軍最高司令部覚書『政治的、社会的及び宗教的自由に対する制限除去』により宗教團体法は即時に廃止されたが、このため一時的に空白を生じ、一部に複雑な問題を惹起するに至つた。そこで宗教團体法に代るべき法令として宗教法人令が制定を見るに至つた。

## 宗教法人令制定さる

この宗教法人令は單に法人たる宗教團体（教・宗派、教團、寺院、教会並にその他の宗教結社）のみに関する制則で、法人でない宗教團体は対象とされていないので、法人でない宗派・教團・寺院・教会の設立、合併、解散などは自由となり、また宗教法人についても、團体法に比し廣範囲の自由を認め、新たに分派選元、別派独立、新教團、寺院、教会の設立、主管者の就任を行う場合などについても官廳の許可を要せず、法人は会社の登記と同様に設立の登記で成立、負担、課税などの保護特典は従來通り賦與されている。即ち主として宗教團体の財産管理を目的として作られたこの法令は、必然的に既成宗團の分派解体、新興宗教のそく生を促すに至つたのである。

## 終戦一年のキリスト教界

キリスト教の場合においては日本天主公教会が教區から教区連盟へ還元したのを始め、戦時中單立教会として教廳教團を停止していた日本聖公会が再建に着手し日本基督教團に加入した自派教会に復帰を勧奨、救世軍またロンドンの万國本営からの特使デビドソン中佐を迎えて再建、その外小教派乃至單立教会にして日本基督教團を離脱するもの、新たに教團を組織するもの相次ぎ、終戦後一年にして教派、教團の数は十一を数えるに至つた。この間日本基督教團内部においても反省と革新の叫びがあげられ、昭和二十一年六月七、八日東京富士見町教会において臨時総会が開かれるに至つた。この総会で峻厳の陳辞を一新、教團の單一教会性確定を期した。一方之に先立つて祝辞に來朝した米國ミッション代表も教團の統一を援助する事を約し、世界に類例のない多教派の合同による日本基督教團は依然日本プロテスタントの代表的勢力として活潑な傳道戦線を、敗戦に打ちひしがれた國民の間に展開する事になつたのである。

廿一年春、信徒の間に起つた日本再建のための傳道待望の祈りは漸次具体化を見、館記日本基督教團臨時総会に引続いて、渋谷緑ケ岡の青山学院に全國基督教大会を開催、更に教團の傳道計画と結びついて三ケ年計画による新日本建設キリスト運動の火蓋を切るに至つた。

聖公会も又、同年四月日比谷公会堂に大合同祝拝を、九月—十一月の三ケ月間全國一斉に『輝く一人に明け行く聖霊』を標語として秋季大傳道を実施し、尚、廿二年には総会において救國三年傳道の実施を決議し着々戦線拡張に努めている。

## 植村女史全米を巡回

昭和廿一年の大きな出來事の一つは邦人に対する終戦後初の海外渡航がクリスチャン女性に許された事である。日本基督教女子青年会（YWCA）会長植村環女史は、北米長老教会婦人大会より招きを受け四月三十日渡米の途につき廿二年四月十二日帰朝した。女史は日本における長老派（元日本基督教会—現在は日基教團）の婦人指導者として招かれたもので、出発に先立つて天皇、皇后両陛下に拝謁、トルーマン大統領へのメッセージその他を託され、帰國に際しては大統領より陛下への贈り物—聖書—をお授けする光栄を担つた。

女史は五月中旬、グランド・ラピッツに開かれた婦人大会に出席後、ケール夫人を團長とする東亞親善視察團の一員として、中國シャン・ホーメイ、比律賓ジョセフ・イラノ両女史と共に全米各地を巡回講演し、日本人の誤意を披瀝、誤れる対日感の是正に努めたが、女史の眞情は聴衆は勿論、日本に対する深刻な憎悪感を抱いていた比律賓、中國代表の感情をも和らげ完全な友愛をもたらすに至つた。七月十二日より十四日までスイスのジエネバで開かれた世界YWCA常議員会に出席した外は、毎週三、四ケ所、一ケ所平均三回の集会に臨んで延人員百万人に講演、國民使節として日米親善のため奮した。初め親善使節團長として女史とニケ月余に亘り行を共にしたケール夫人はその働きを賞讃して「かつて日本が米國に送つた女性の中で最も顕著な功績を納めた人」と述べている。米國の対日世論の好轉の陰には女史の働きが見えざる大きな力となつていることは争われぬ事実で、その功績偉大なものがある。

## 基督教連合会誕生

日本宗教界の自治的連絡機構として戦時中設けられた日本宗教会は情勢の変更に應じ廿一年五月下旬理事会を開いて協議の結果、神道、佛教、キリスト教は独自の立場で連合会を組織し、宗教会は一旦解散し、三教の連絡機関として新発足することになり、六月一日、日本宗教連盟が誕生した。これと同時に日本基督教團、日本聖公会、日本天主公教会、日本正教会の四教團によりキリスト教連合会が設立され、今泉真幸氏を理事長として発足した。連合会は各教團の連絡、協力を目的とするもので、宗教連盟において神道、佛教の連合会と結びつき、後進の宗教平和会議、國民道義振興運動等に活潑に活動している。

## キリスト教界の現勢

現在日本におけるキリスト教諸派の現状は、プロテスタントでは会員数十三万三千五十七の日本基督教團を筆頭に四万五千九百九の日本聖公会、一千八百八十九の日本聖書ルーテル教会、千六百廿九の日本ナザレン教團、二千四百八十二の活水基督教團、一千二百の聖イエス会、一千四百九十の基督兄弟團、以下インマヌエル綜合傳道團、東洋宣教会きよめ教会、安息日再臨教團、國際基督教團、万國福音教團、日本基督改革派教会、基督友会日本年会日本バプテスト連盟、救世軍等がある。救世軍は三千二百卅一、日本バプテスト連盟は一千六百九十一、他は四百から千内外の会員数を擁している。

他に在日本朝鮮基督教連合会、沖縄キリスト教團、横浜福音医療宣教團、スカンヂナビアン・アライアンス・ミッション等の活躍がある。

いわゆる旧教に属する日本天主公教会は信徒数十一万一千二百九、日本正教会は一万四千六十三である。

独立教会も次第に数を増し、判明している限りでは教会数十八、信徒数合計九百八十に達している。

教会を組織せず、独立傳道に従事しているいわゆる無教会主義の人々では一定の集会場によつて公開聖書講義を行い且つ聖書研究誌を出している塚本虎二、矢内原忠雄、黒崎幸吉の三氏が居り、聖書研究誌十五がある。鈴木俊郎、矢内原忠雄氏らはラジオのキリスト教の時間や総合雑誌で活動して居り

## 日本基督教團教職生活実態調査（昭22・7・30現在）

| | 牧會專任者 | | | | 副業從事者 | | 牧會者一人平均不足額 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 收入平均額 | 同最高額 | 同最低額 | 人數 | 牧會兼副業 | 副業專 | |
| | 圓 | 圓 | 圓 | 名 | 名 | 名 | 圓 |
| 北海道教區 | 425 | 600 | 200 | 4 | 7 | 0 | 488 |
| 東北〃 | 540 | 1,200 | 50 | 15 | 35 | 0 | 532 |
| 關東〃 | 627 | 1,600 | 120 | 6 | 38 | 3 | 675 |
| 東京〃 | 700 | 2,500 | 200 | 51 | 90 | 23 | 724 |
| 神奈川〃 | 490 | 1,000 | 300 | 8 | 17 | 2 | 700 |
| 東海〃 | 492 | 1,200 | 55 | 25 | 19 | 4 | 536 |
| 中部〃 | 530 | 900 | 300 | 10 | 25 | 4 | 753 |
| 北陸〃 | 800 | 800 | — | 1 | 10 | 0 | 670 |
| 京都〃 | 800 | 2,600 | 300 | 16 | 53 | 9 | 673 |
| 大阪〃 | 1,005 | 2,500 | 300 | 22 | 32 | 4 | 771 |
| 兵庫〃 | 831 | 2,500 | 150 | 16 | 48 | 10 | 792 |
| 西中國〃 | 754 | 1,400 | 100 | 11 | 29 | 3 | 819 |
| 四國〃 | 521 | 1,000 | 50 | 12 | 26 | 2 | 776 |
| 北九州〃 | 634 | 1,500 | 100 | 9 | 34 | 8 | 769 |

備考　調査提出者の全國平均家族數は「教團」は4.2人。聖公會は4.8人
最高は（教團）10人。（聖公會）10人。

### 日本聖公会教職生活実態調査

（昭二二・八・三〇現在）

| | 牧師收入總額平均 | 教會負擔率 | 俸給最高額 | 同最低額 | 報告提出者數 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 圓 | % | 圓 | 圓 | 名 |
| 東京教區 | 1,868 | 50 | 3,905 | 700 | 20 |
| 北關東〃 | 1,493 | 14 | 3,200 | 300 | 23 |
| 龍東京〃 | 1,473 | 20 | 2,850 | 150 | 18 |
| 中部〃 | 842 | 50 | 2,350 | 150 | 17 |
| 京都〃 | 1,687 | 22 | 4,500 | 290 | 21 |
| 大阪〃 | 1,422 | 72 | 3,000 | 900 | 11 |
| 神戸〃 | — | — | — | — | — |
| 九州〃 | 1,865 | 15 | 3,600 | 437 | 12 |
| 東北〃 | 1,355 | 30 | 2,500 | 230 | 13 |
| 北海道〃 | 1,023 | 36 | 2,800 | 600 | 9 |

日本基督教團中部教区が実施した愛知、岐阜、三重三縣下の牧師の生活実態調査の結果は、三十二名の回答者の平均家族數四・八名、俸給平均一四四・六円、副業收入を併せても三一四円となつている。牧師給は最高五百円、最低十五円だが、この數字は、廿二年八月教團本部で行つた調査によれば、教

又、樂会、難聾停を持たないがジヤーナリズムの網で活躍している人々に南原繁、大塚久雄、松田智雄氏らがいる。

## インフレと苦闘する牧師

戦後の教会の当面する問題は戦災教会復興、傳道用資材の不足と共にインフレと闘う牧師の生活問題が大きな課題として挙げられる。教会よりの謝礼のみを以てしては生計を支え切れない牧師諸は嘗い学校教師、官公吏、会社員等副業に従事するのを已むなきに至り、教勢は振け、垂綱は利鞘を待てる傳道の好機に臨し、教界は優秀人の不足を訴える状態となつている。

昭和二十一年十月



高九百円、最低三百円、俸給平均五百卅円となつているが、平均不足額七百五十三円、即ち一四二%の不足という數字は牧師の生活上の苦悶を物語つて余りあろう。以上は主として中小都市と農村の教会の場合だが、廿二年八月乃至九月現在における日本基督教團と日本聖公会の教職の生活実態調査（別表参照）によつて見ても、一般社会の賃金水準に比べて遙かに低位にある。

即ち日本基督教團調査によれば副業を持たぬ牧師の最高俸給額は二千六百円（京都）最低額は五十円（東北、中國）で、全國の一人当り平均額は六百六十九円にしか当らない。この調査に際し教團では、七大都市月一千五百円以上、他の都市一千円以上、町村七百円以上を上とし、以下を下として教職者の收入（副業收入を含む）を大別しているが、これによると、『上』に該当するもの三百五十名で、報告提出者全体の四六・六%にしか達しない。

因みに七大都市別最高牧師給は大阪、神戸の二千五百円、東京の一千六百円、京都の一千五百円、福岡の一千三百円、横浜の一千円、名古屋の六百円という順。最低の方では東京、神戸の二十円、京都の廿五円、横浜、名古屋大阪の五十円というのがあり、福岡は五百円と飛び抜けているがこれ以下の教職からの報告がなかつたためかも知れない。

聖公会の例で見ると收入平均額の多いのは東京、九州の各一千八百六十円台であるが、東京はその五〇%即ち九百卅円が教会の謝礼で賄われているのに対し、九州は一五%二百八十円程度しか保証されず、他は全部副業收入によるものであつて、生活の苦しさを如的に物語つている。最高額、最低額共に教團の調査に比べて高位にあるが、これは凡て副業收入を含んでいるものであり、一千円以下の收入で生活する牧師の実態を思う時、教会員としての責任の自覚が強く喚起されるのである。

## 牧師を充分に働かせよ

牧師の生活補助は今日傳道の急務の叫ばれる折柄先ず第一に解決されねばならぬ問題であり、海外教界においてもこの点に留意し、日本基督教團に対しては北米外國傳道協会から先に十万弗の見舞金が送られ、聖公会に対しても主教、神学教授等の俸給の全額乃至半額補助を目的に三年間約二万弗の補助が米國聖公会から送られ、一般教職者に対してはCMS（英國聖公会宣教協会）より一万三千円の見舞金が贈いた。

本年に至り、全教界の牧師並にミッション関係のキリスト教事業従事者とその家族六千名に対し米國教会から一ケ年二十万弗分の食糧を送付する旨発表があり、その第一回二万五千弗、食糧にして約六万五千ポンドが二月末到着、全國に配布された。これらの補助は苦闘する牧師家庭に大きな慰めとなつているが、根本的解決は依然國内信徒の奮起に俟たねばならぬのは当然である。

## 低すぎる教会の獻金率

本社の昭和廿二年十二月末現在調査によれば、各教会の日曜礼拝献金の出席者一人当り平均額は概ね三円乃至三円五十錢程度、維持献金は捧込者一人当り三十五円平均となつている。この数字では仮に出席平均百名、維持献金捧込者五十名としても三千余円に過ぎず、教会を維持して行くこと不可能なるは明かである。礼拝献金平均十円維持献金平均百円が実現してこそ、牧師をして後顧の憂なく活動せしめ得られ、同時に教勢の進展も期し得られるのではあるまいか。

# 國民道義再建の中軸に

敗戰に伴う國民道義の頽廢は識者の眼を覆わしめるものがあり、政府はかゝる情勢に対処し、宗教による國民道義の昂揚を計るべく廿一年十二月十六日、時の吉田首相は各教宗派、教團の主管者を官邸に招いて教、宗派、教團主管者協議会を開催した。協議会にはキリスト教、佛教、神道の各派主管者百余名が参集、宗教團体の総力を結集して教化活動を展開すべく次の決議を行なつた。

全國教・宗派、教團主管者協議会開催を契機に、我らはその使命と社会の情勢に鑑み國民の宗教的情操教育の普及徹底に邁進し以て敗戰日本の復興に寄與し、進んで世界の平和と人類の福祉に貢献せんことを期す。

## 全日本宗教平和会議開く

去る廿二年五月、新憲法発布の祝賀行事に湧き立つ東京において五、六の二日間築地本願寺を会場として全日本宗教平和会議が開催された。参加代表はキリスト教四教團、佛教五十三派、神道十三派、神社本廳等選出の協議員及び文化関係の協議員合計六百余名で、姉崎正治博士を議長に推し、先ず無力にして戦争を防止し得ざりし宗教人の責任につき懺悔を表明、次いで『世界平和に対する宗教的理念と方法』『平和興隆の普及育成に関する宗教的方策』『平和國家建設に関連する宗教の社会的任務』の三部会に分れて二日間にわたり実施具体策を協議した。

第二日午後の総会においては三部会の決議、宗教平和宣言、國連、ローマ教皇庁ほか各國宗教團体に送るメッセージを可決、歴史的会議の幕を閉じた。翌七日朝には宮城前廣場に約五千の宗教家、学徒が参集、築地本願寺まで宗教平和大行進を、同日午後は同じく本願寺で宗教平和國民大会が催された。

尚、会議の決議に基ずき九月より十一月にかけ地区毎の宗教平和会議が開かれ、平和興隆の普及徹底、宗教團体相互の親睦提携を強化するところあつた。〔写真は宗教平和会議開会式・壇上は吉田首相〕

## 新日本建設國民運動

昭和廿二年五月廿四日、新國会は初の首相選挙に社会党の片山哲氏を指命、社会・民主・國協三党の連立内閣が こゝに誕生するに至つた。新首相片山氏は夫妻共日本基督教團富士見町教会に祥和するクリスチャンで閣僚の中にも多数クリスチャンが参加した。文部大臣に就任した森戸辰男氏も興公会シオン教会の会員であり、新内閣は施政方針の一環に國民道義高揚対策を取上げ、これを新日本建設國民運動要綱としてまとめ、宗教團体についてもその協力を求めて来た。

七月二十三日首相官邸において開かれた宗教協議会には、キリスト教四教團、神道十三派及神社本廳、佛教三十七派の外宗教連盟、神道、佛教、キリスト教各連合会の代表約六十名が参集、政府側から片山首相、森戸文相、芦田



森國務相が出席し、小崎日基教團総会議長を座長に推して協議を行つたが、佛教、神道の発言者の多くは宗教團体に対する政府の保護育成を要望するに止まり、宗教界より盛上る國民運動展開の意欲は見られなかつた。

## 宗教への國民的関心

### 信仰を有つ者七割に増加

顧つて國民の宗教に持つ関心の程度は如何なるものであるか？時事通信社が昭和廿一年と廿二年の八月に行つた『日本民主化』の世論調査の中で宗教に触れている部分を抽出して見ると廿一年の信仰を有する者五六・四％は廿二年に七一・二％に増加、その中キリスト教は数的に未だ低いが一・三％から六％へと約四・五倍の増加率を示している。

これを性別と年齢（第一表参照）に関して見ると女子は男子よりも信仰的であり、若い世代ほど『信じていない』ことが明かにされている。佛教は高年代が多く、キリスト教は若年代が多い。神道は若年代が最も多くついで五十才以上のものとなつているが、興味のある現象である。

職能別（第二表参照）では水産業従事者に信じない者が多く、労働者、事

（第一表）

性別と年齢の信仰についての関連

| △男女年齢別 | （廿一―卅歳）（卅一―四〇歳）（四一―五〇歳）（五一歳以上） |
|---|---|
| 信ずる | （男）四九・三％　六四・四％　六九・九％　七八・一％ |
| | （女）七二・六％　六六・〇％　八四・六％　八二・一％ |
| 信じない | （男）五〇・七　三五・六　三〇・一　二一・九 |
| | （女）二七・四　三四・〇　一五・四　一七・九 |
| △宗派別（信ずるもの） | |
| 佛教 | 四二・〇　四七・一　五九・九　六七・〇 |
| 神道 | 七・三　六・三　六・五　六・八 |
| 基督教 | 八・九　五・八　五・七　八・一 |
| その他 | 三・五　五・〇　五・〇　三・二 |

（第二表）

職業と信仰の関連

| △職能別 | 信ずる | 信じない | 佛教 | 神道 | 基督教 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 農 | 七六・九 | 二三・〇 | 五四・〇 | 六九・三 | 三〇・七 | 四九・五 |
| 林 | 二三・〇 | 五九・四 | 三〇・六 | 五一・八 | 四一・九 | 三二・七 |
| 水産 | 五五・一 | 四四・九 | 五一・五 | 四四・八 | 五八・九 | 四四・〇 |
| 商 | 六五・八 | 三四・二 | 四二・五 | 三五・三 | 三九・六 | 五三・八 |
| 工 | 二四・〇 | 七六・〇 | 四二・〇 | 三五・三 | 三九・六 | 五三・八 |
| 小商工 | 五九・一 | 四一・九 | 六・一 | 八・六 | 三・九 | 九・二 |
| 事業経営 | 四九・五 | 五〇・五 | 六・〇 | 一一・五 | 二〇・〇 | 一〇・一 |
| 労働 | 三二・七 | 六七・三 | 四二・〇 | 三五・三 | 三九・六 | 五三・八 |
| 給料生活 | 二四・〇 | 七六・〇 | 六・一 | 八・六 | 三・九 | 九・二 |
| 官公吏 | 四九・九 | 五〇・一 | 七・八 | 一一・五 | 二〇・〇 | 一〇・一 |
| 教員学生 | 三二・七 | 六七・三 | 四二・〇 | 三五・三 | 三九・六 | 五三・八 |
| 自由 | 四四・二 | 五五・八 | 六・一 | 八・六 | 三・九 | 九・二 |
| その他 | 三四・二 | 六五・八 | 七・八 | 一一・五 | 二〇・〇 | 一〇・一 |
| な し | 七九・三 | 二〇・七 | 八〇・八 | 九・二 | 八・八 | 三・七 |

## 都市と郡部の信仰への關心

（表三）

△都市郡部別

| | （男）—都市—（女） | （男）—郡部—（女） |
|---|---|---|
| 信ずる | 六〇・九　七〇・五 | 六八・〇　七九・〇 |
| 信じない | 三九・一　二九・五 | 三二・〇　二一・〇 |

業経営者が之に次ぎ、信ずる者では、その他、自由業、無業、農林業等が多い方である。信ずる者を宗派別に見ると、佛教は農林業の六五・八％が最も多く、神道はその他の一〇・四％、キリスト教は教員学生の二〇％、官公吏その他の各一一・五％、車業経営の一〇・六％と知識階級の層に多い。

都市と郡部（前三表参照）では郡部の方が『信じる者』が多く、躊躇と混乱の中にある都市と、戰火の被害殆ない農村との対照を示して居り、宗派別に見ると

| | （都市） | （郡部） |
|---|---|---|
| △佛　教 | 四三・八 | 五八・九 |
| △神　道 | 七・四 | 六・五 |
| △キリスト教 | 一〇・四 | 四・二 |
| △そ の 他 | 四・〇 | 四・一 |

となつて佛教信者が農村に多く、キリスト教信者は都会に多いのも、農村の保守性と、キリスト教教勢の在り方を示している。

戰災者、引揚復員者等の間では戰災者三〇・四％、引揚復員者四一・二％と信じない者が相当高率を示し、信ずる者を宗派別に見ると

| | （戰災者） | （引揚復員） | （その他一般） |
|---|---|---|---|
| △佛　教 | 四五・二 | 二三・五 | 五九・〇 |
| △神　道 | 七・五 | 八・六 | 六・四 |
| △基督教 | 九・五 | 一四・七 | 四・七 |
| △そ の 他 | 七・三 | 一二・三 | 二・七 |

となる。この統計は勿論世論の一斷面に過ぎず、一方に新興宗教がそく生し靈光尊事件、市川の『お助け爺さん』の繁昌、その他、病氣治療を目的とする陰宗教團体、街頭易者の増加等は拠り処を失つた世相人心と國民の宗教的知識の低さを物語つているが、この事は戰後最も活動分野に惠まれているキリスト教徒にとつて尚一層傳道の努力を要請されるものである。

### 神道・佛教の現勢

宗教團体令廢止により、一旦合同した神道、佛教の各教・宗派は活潑な解体復旧運動をつゞけ、終戰後一年にして教派神道は廿三、佛教は眞言宗が十三派に分れたのを始め天台宗八派、臨済宗十三派、日蓮宗五派、このほか七派の独立を見、このため一時文部省は一週一派の割合で教團設立の受付に忙殺されるという珍現象を呈するに至つた。

現在では八万六千四百の神社が神社本廳の下に結束している外、神道が六十三教團、教会、布教所が二万九千百六十、佛教が七十二宗派、寺院、教会が七万七千五百となつている。尚、神道系で教会布教所百以上を有する教派は十三、佛教系で千以上の寺院教会を有するもの十二、百以上を有するもの廿五である。尚、教会寺院の數の多いのは神道系では神社本廳、天理教、御嶽教、金光教、神理教、佛教系では曹洞宗、眞宗大谷派、同本願寺派、淨土宗、日蓮宗の順となつている。

## 総選挙とキリスト教界

昭和廿二年四月には新憲法による初の参・衆両議員選挙と共に知事、市区町村長等地方自治体の初公選が行われた。

### 参議院議員に十氏當選

貴族院に代つて新たに生れた参議院の議員選挙は初選挙であること殊に全國区と地方区という二つの投票区に分れたため各候補者も選挙運動には困難を極めた。キリスト教関係からは二十氏が全國地方夫々の地盤を背負つて出馬、教職者では全國区から阿部義宗久布白落実（東京）駿河義隆（西宮）の三氏、YM関係で泰準次郎（横浜）その他福島区神原茂、富山区海老名一雄氏らが田中耕太郎、奥むめお、小泉秀吉氏らと共に奮戰したが、結局、高良、田中、木内、小泉氏等十氏が当選教職者は全部惜敗した。

### 基督者代議士廿一名進出

廿一年六月終戰後初の総選挙で二十名の基督者を議会へ送り出したキリスト教界はその後公職追放その他で數氏を失つたが、新國会には再び廿一氏の当選を見るに至つた。これは立候補者數に比し八〇％以上の当選率に当つている。当選者を党派別に見ると社会党所属が十六名で圧倒的多數を占め、國民協同党二、自由党二、民主党一名の順となつている。

これと前後して行われた地方自治体の首長公選では山形、愛知、福岡の各縣知事にクリスチャンの当選を見たのを始め、市長に三名、町長に四名、村長に四名、縣会議員二、市会議員二、区会二、町会三、村会二と少數ながらクリスチャン議員の進出を見、國家再建は先ず郷土の復興からと、明るい道義政治の実現目指して活躍している。

### 衆議院議員氏名一覧

| （投票区） | （氏名） | （年齢・職業） | （所属党派・現職） | （所属教会） |
|---|---|---|---|---|
| 東京1 | 松岡駒吉 | 60 | 團体会長 | 社 |
| 同 5 | 田川大吉郎 | 79 | 著述業 | 同（衆議院議長）（二二・一〇・九死去） |
| 同 6 | 山口シヅエ | 31 | 会社員 | 同 |
| 神奈川 | 片山哲 | 61 | 弁護士 | 同 |
| 青森2 | 笹森順造 | 62 | 著述業 | 日基・富士見町 |
| 福島1 | 榊原千代 | 50 | 無 | 社 |
| 同 2 | 鈴木義男 | 54 | 弁護士 | 同 |
| 同 | 山崎道子 | 48 | 無 | 同 |
| 静岡2 | 植村甲午郎 | 51 | 弁護士 | 同 |
| 新潟4 | 植田甲子七 | 50 | 大臣 | 自 |
| 長野4 | 増田甲子七 | 50 | 大臣 | 自 |
| 京都1 | 水谷長三郎 | 51 | 弁護士 | 社 |
| 大阪1 | 大谷省三 | 55 | 党役員 | 無教会 |
| 兵庫1 | 松沢俊人 | 50 | 同 | 同 |
| 同 2 | 米窪満亮 | 69 | 著述業 | 同 |
| 同 3 | 河合義一 | 66 | 農業 | 同 |
| 岡山2 | 星島二郎 | 61 | 弁護士 | 自 |
| 広島1 | 松本滝蔵 | 47 | 明大教授 | 國 |
| 同 3 | 森戸辰男 | 60 | 著述業 | 社 |
| 長崎2 | 北村徳太郎 | 62 | 銀行頭取 | 民 |
| 宮崎2 | 石井啓吾 | 41 | 党支部役員 | 社 |
| 兵庫 | 永江一夫 | | | 日基・本郷 |
| 同 | 鈴木茂三郎 | | | 日基・豊南坂 |
| 同 | 西尾末広 | | | 聖公・シオン |
| 岩手2 | 千葉三郎 | | | 日基・新宿鎮座 |

### 参議院議員氏名一覧

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 全國 | 高良とみ | 52 | 党役員 | 民 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 同 | 國 | 木内キヨウ | 64 | 民 |
| 同 | 同 | 小泉 秀吉 | 69 | 組合長 社 |
| 同 | 同 | 市來 乙彦 | 76 | 無 |
| 同 | 同 | 奥 むめお | 53 | 党役員 國 |
| 同 | 同 | 藤 桂之助 | 68 | 前安本長官 無 |
| 同 | 同 | 田中耕太郎 | 58 | 大臣 同 |
| 東 | 京 | 櫻内 辰郎 | 62 | 会社重役 民 |
| 京 | 都 | 波多野林一 | | 会社々長 |
| 高 | 知 | 西山 亀七 | 66 | 社長 自 |
| 愛 | 媛 | 中平常太郎 | 69 | 社会事業 |

## 公選首長と自治体議員

△知事

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 山形縣 | 村山 道雄 | 46 | 前知事 | 無 |
| 愛知縣 | 青柳 秀夫 | 51 | 前知事 | 教会 |
| 福岡縣 | 杉本 勝次 | 53 | 学校長 | 社 日基・前橋 パプテスト |

△市長

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 豊川市 | 福山 政一 | 51 | 前中央社事協会主事 | 聖公会 |
| 高槻市 | 古田誠一郎 | 51 | 社会事業 | |
| 伊勢崎市 | 斎藤彌三郎 | | 医師 | |

△町長

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 東京都下、保谷町 | 山本 一司 | 44 | | 日基・目黒行人坂 |
| 埼玉縣入間川町 | 石川 求助 | 51 | | 日基・豊岡 |
| 福島縣伊達町 | 増田 栄吉 | | | 日基・伊達 |
| 北海道八雲町 | 眞野 万禧 | | | 日基・八雲 |

△村長

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 岩手縣新堀村 | 荒川 省三 | 元図書出版 | | 日基・下谷 |
| 山梨縣福坂村 | 佐藤 元重 | 保護代理業 | | 日基・新宮 |
| 和歌山縣小口村 | 中村文左衛門 | | | 日基・新宮 |
| 同 御船村 | 向井 威夫 | | | |

△自治体（縣会、市区会、町会、村会）各議員

| | | | |
|---|---|---|---|
| 埼玉縣入間川町（縣） | 石川 求助 | | 日基・豊岡 |
| 岡山縣二川村（縣） | 永井 政一 | | |
| 和歌山縣新宮市（市） | 土山 清郎 | | 日基・新宮 |
| 宮崎縣都城市（市） | 永吉 実光 | | 同・都城虹橋塲 |
| 東京都世田谷区（区） | 玉置 桂一 | 社会事業 | |
| 大阪市北区（区） | 古野 しく | | |
| 埼玉縣入間川町（町） | 野村 勝 | 牧師 | 日基・豊岡 |
| 同（町） | 藤田 正武 | | 日基・豊岡 |
| 東京都保谷町（町） | 皆川 きみ | 無 | カトリック |
| 東京都久留米村（村） | 佐藤 瑞彦 | 教育家 | |
| 新潟縣八幡村（村） | 加藤 タカ | | |

## クリスチャン首相登場

総選挙の結果、自由党内閣の退陣となり、第一党を占めた社会党は衆議院議長に松岡駒吉氏を送り出し、更に首相の議員公選で片山哲氏の首相指名を見た。松岡氏は日基教團霊南教会会員、クリスチャン議長としては中島信行、島田三郎、片岡健吉氏に次いで第四代目である。片山氏は一家を挙げて日基教團富士見町教会に属し清廉を以て知られている。新國法実施後初の國会に臨む政府の首脳者として社会党委員長でありクリスチャンである氏の登場は海外諸國からも好感を以て迎えられ、マッカーサー元帥またクリスチャン首相の施政に期待する旨声明して新内閣を激励した。

この内閣には片山首相はじめ、水谷長三郎、栄養國亮、森戸辰男、征森順造、鈴木魔男、後には北村善太郎氏も加わり正にクリスチャン内閣の観を呈した。〔写真は片山氏と初登壇の松岡議長〕

## 宗教議員倶樂部生る

新國会では以上のクリスチャン議員の外神、佛各界選出の議員を合せると参・衆両院を通じて宗教関係議員は五十余名を算えるに至つたが、この勢力を結集、國会に宗教精神を反映させ、道義理想政治の実現を期さうと超党派的立場に立つ宗教議員倶樂部が結成されるに至つた。

発会式は廿二年十月十日午後四時國会内議員食堂において行われ、片山首相、森戸文相、松岡衆議院議長、田中耕太郎氏らが祝辞を述べた。事務所は築地本願寺、日本宗教連盟内に置かれ、毎月一回國会内で会合、〃國会に宗教的雰囲気を醸成すると共に、國民の宗教的信仰の昂揚に力を致す〃べく努力している。

## 文化平和問題懇談会

一方クリスチャン衆・参両院議員とキリスト教文化協会、同平和塲会、宣教師團の間で文化平和問題懇談会が組織され、キリスト教界の意見を國会へ、議員の意見を教團へ、教團の意見を総司令部へ夫々交流の機会を作ることになつた。廿二年十月十四日には首相官邸で第二回懇談会を開催

平和賞の設定△移民問題△キリスト教文化会館建設△キリスト教学会連盟の発行△宗教々科書編纂△日本の國民性―歴史、習慣等を加味した―に適應した傳道文書の刊行△復員者の再教育△傳道再化のため人格識見を具備した宣教師の派遣をミッションに要請すること等を討議した。尚、復員者の再教育、宗教教科書の編纂等については関屋貞三郎氏を委員長とする三つの小委員会を設けて具体案を練り、本年二月復員者の再教育、映画教育に関する問題その他を夫々関係方面へ具申した。

## 宣教團の活動活潑化

戦後の日本に対する各國、特に米國各ミッション・ボードの活動は目覚ましいものがある。廿年秋キリスト教使節團、同教育視察團一行の来朝を始めとして、廿二年四月中旬、G・E・パット、P・S・メーヤー両氏は北米外國傳道協会並に教会世界奉仕團の代表として来朝、続いてハリイ・D・ポヴエンカク、アリス・E・ケリイ、ジヨン・H・コップ、カール・D・クリエテの四代表も到着し三田綱町に事務所を開設し、日本基督教團はじめ関係各方面と協力、活動を開始した。更に十月中旬A・R・ストーン、ドージヤー、タムソン、ブライス氏ら二十名、更に年末にかけてアキスリング、ハナフオード夫妻等千八名が来朝した。

聖公会もヘーズレット、マン、ライフスナイダーの各母教会代表を迎え再建を協議して以来続々宣教師の赴任を見、現在約四十名に達している。その中には一旦帰英後再来したJ・C・マン主教をはじめシンガポール抑留邦人から結婚と称われたA・ヘンテ女史、ジヤパン・レスキュー・ミッション（羽東光学園）創設者ジヤック・デンプシイ夫妻等がいる。

又、カトリツク教会については、廿三年一月廿六日教皇廳発表によれば終戦以来現在までに三百廿六名のカトリツク宣教師が連合軍司令官により入國を許可され、その中二百三十二名は既に日本に到着していると報ぜられている。

尚、宣教師の入國については、最初、日本に滞て傳道して居り食糧、住宅の得られる者という制限が付せられていたが、廿三年春総司令部はこの制限を緩和する旨発表、これにより戦前日本に活潑な傳道活動を行つていなかつた教派も宣教師入國の許可を得られることになつたので、今後宣教師の來朝は急速に増加するものと見られる。

## 対日布教五ケ年計画

「北米外國傳道協会では廿三年三月四日ペンシルヴァニア州パツク・ヒルズ・フオールスで海外傳道会議を開催、席上日本部委員長シエーファー博士は対日布教五ケ年計画を提案した。これによれば戦災教会復興はじめ七項目にわたり総額二千七百万ドルが計上されている。その内訳次の通り

△日本における戦災教会の復旧（五百万ドル）
△在日宣教師を現在の二百七十名から六百名に増加（一千四百万ドル）
△大学院及び専攻科を特徴とするキリスト教大学の設立（百万ドル）
△日本人（牧師及び一般人）を米國の大学で再教育するための奨学資金（四十七万五千ドル）
△聖書の普及（三百万ドル）
△社会事業従事者の養成（百万ドル）
△地方傳道委員の設置（九十万ドル）
△キリスト教関係書籍の発行（三十万ドル）
△その他（百三十二万五千ドル）



## 世界の指導者相次いで來朝

廿二年の末から廿三年の春にかけて、各國教界の指導者達が続々來朝、正に盛旋のいとまがない程であつた。その氏名、來朝日次、目的等を挙げれば次の如くである。

ユージン・バーネツト博士（世界YMCA常任委員・北米YM同盟主事）日本の青年運動視察　二二・一一・三―一九
E・J・ウオルシユ博士（米國ジヨージタウン大学副総長）日本教界視察　二二・一一―
デツカー博士（國際宣教連盟幹事）日本教会視察　二三・二・一一
ペングト・ホフマン博士（世界基督教学生運動主事）日本の学生運動視察　二三・二・一一―
E・パーカー氏
N・ヘーグマン氏
S・P・マツク氏　ラジオ・映画・幻燈・紙芝居・レコード・演劇等聖傳道の指導　二三・二・二四―二八
ステイヴン・ニール主教（世界教会会議研究部長・英國聖公会主教）二三・三・四―
フオレスト・ナツプ博士（世界基督教教育連盟総主事）二三・三・一―
ウインパン・トーマス氏（世界学生基督教運盟幹事）学生救済運動のため　二三・四・一
ヴアン・ダブニー博士（ニユートン、アンドバー神学校長）　二三・四・一―五・五・七
ロバート・A・クツク博士（青年を基督へ國際運動総主事）　二三・三・二―二三・三〇

これらの人々の指導乃至協力により、日本基督教教育協力会、聖書傳道を目的とするA・V・ミツシヨン、日本学生救済委員会の設立等が成果として現された。

尚、本年九月には三重苦の聖女ヘレン・ケラー女史の來朝が約束されて居り、又、スタンレー・ジヨーンズ氏も今秋來朝の筈であつたが、廿二年十二月内地の知人の許へ届いた便りでは廿四年初頭に日本を訪れたいと希望が述べられている。

## 來日した宣教師團

現在日本に宣教師乃至代表者を派遣している宣教團体は次の如くである。

アメリカン・ボード＝コングリゲイシヨナル＝ABC（旧組合教会）
アメリカン・バプテスト・ホリデン・ミシヨナリー・ソサイエテイ＝ABFMS（旧バプテスト東部組合）
メソヂスト・チヤーチ＝MC（旧メソヂスト教会）
プレスビテリアン・チヤーチ・イン・ユーエスエイ＝PCUSA（旧日本基督教会）
プレスビテリアン・チヤーチ・イン・ユーエス＝PCUS（同前）
ユナイテツド・チヤーチ・オブ・カナダ＝UCCカナダ合同教会（旧メソヂスト教会）
エパンヅエリカル・アンド・リフオームド・チヤーチ＝ERC（旧日本基督教会）
フリー・メソヂスト・チヤーチ＝FMeC（旧自由メソヂスト教会）
ジヤパン・エヴアンヅエリスチツク・バンド＝JEB（旧日本傳道隊）
リフオームド・チヤーチ・イン・アメリカ＝RCA（旧日本基督教会）
ウエスレアン・メソヂスト＝WM（旧ウエスレアン・メソヂスト教会）
エパンヅエリカル・ユナイテツド・ブレズレン・チヤーチ＝EUBC（旧福音教会）
ルテラン・エパンヅエリカル・アソシエーション・オブ・フインランド＝LEAF（旧フインランド・ルーテル教会）
チヤーチ・オブ・イングランド・イン・カナダ＝CECカナダ聖公会
チヤーチ・オブ・イングランド・イン・オウストラリア＝CERオーストラリア聖公会
チヤーチ・ミシヨナリイ・ソサイエテイ＝CMS　英國聖公会宣教協会
ソサイエテイ・フオア・ザ・プロパゲイシヨン・オブ・ザ・ゴスペル＝SPG　英國聖公会福音宣布協会
プロテスタント・エピスコパル＝PE　米國聖公会
ユナイテツド・ルテラン・チヤーチ＝ULC　日本福音ルーテル教会
チヤーチ・オブ・ザ・ナザレン＝CN　日本ナザレン教團
サルヴエーション・アーミイ＝SA　救世軍
サウザン・バプテスト・コンヴエンシヨン＝SBC　日本バプテスト連盟
セブンスデイ・アドヴエンチスト＝SDA　安息日再臨教團
フレンド＝F　基督友会
スカンヅナビアン・アライアンス・ミツシヨン＝SAM
エツセムブリイ・オブ・ゴツド＝AG　イエスの福音教会
セントラル・ツヤパン・パイオニア・ミツシヨン＝CJPM
インデペンデント＝Ind
リーベンゼル・ミツシヨン＝LM　横浜福音医療宣教團
ミノ・ミツシヨン＝MM
ユナイテツド・クリスチヤン・ミツヨナリー・ソサイエテイ＝UCMS
ウーメンス・ミツヨナリー・ユニオン＝WMU

ヤング・ウーメンス・クリスチヤン・アソシエイシヨン＝YWCA

尚、教派を超越した團体である教会世界奉仕團＝米國（CWSチヤーチ・ワールド・サーヴイス）が港区芝三田綱町九に東京支部を、北アメリカ外國傳道協会も同所に東京事務所を持つて居り、又日本基督教團、聖公会、救世軍等独自の活動地盤を有しているものを除いたミツシヨンの内地協同團体として在日實教部会（ジヤパン・エバンジエリカル・ミシヨナリー・フエローシツプ）が廿二年秋に結成され、ナザレン派のウイリアム・エコール氏が会長に推されている。

極東婦人十字軍（ファー・イースタン・ゴスペル・クルーセイド）はGIゴスペル・アワーが発展したもので、一九四七年一月一日北米デンヴアー市で結成され、豊島区雑司ケ谷一ノ三三九に日本支部が置かれている。超教派的傳道活動が目的で、医療傳道、神学校開設、孤児收容、バイブル・クラス等を行つている。

青年を基督へ（ユース・フオア・クライスト）運動の日本支部は世田谷区玉川等々力町一ノ一九三テモテ・ビーチ氏方である。

**内外協力会の機構**　内外協力会は教團、基督教育同盟、八ミツシヨン・ボード代表で構成されて居り、廿三年二月十二・十三日第一回会議を開いて規則、予算等を決定した。委員氏名次の通り

議長・小崎道雄（教團総会議長）▲【教團選出委員】（常）富田満、平賀徳造（会計）賀川豊彦、木村義伍、飯島誠太、山本忠興（幹記）岡田五作、阪田寅夫▲【教育同盟選出】都留仙次、豊田実、島中博、神崎驥一、出村彰（副議長）石原謙（常）矢野貫城▲【宣教師代表】（会計）メーヤー、（常）クリエテ、（書記）ダウンズ、ミス・カーテス、デマーグ、ヘンドリツク、ミス・ハナフオード、カープ（註・常は常務委員の略）



# 日本の將來は基督教國に

日本及び日本の基督教を世界の眼はどう見ているか？　終戰直後日本の教界視察のため來朝したカトリック及びプロテスタントの指導者達は各々次の様な見解を述べているが、結論として何れも新生日本がキリスト教の影響を強く受ける國、換言すればキリスト教國とならうと観測している。

**キリスト教の影響力**　教皇ピオ十二世の指令によつて昭和廿一年春來朝した米國カトリック教会のミカエル・レデイ、ヅヨン・オハラの両司教は、連合國が日本援助のため執るべき方針として

一、占領軍がキリスト教の教義を実践することにより日本人に西欧の文化と宗教の價値を理解させること

二、日本人に自由な民主的制度が如何にして建設されるかを示すため、多数の宣教師及びその他指導者を日本に派遣すること

その他を勧告、又、日本の印象として

新生日本は連合國が十分な指導さへ與えれば西欧文化とキリスト教を基調とするものとならう……日本人は有史以來はじめて眞の宗教の自由を與えられ、天皇を神に祭り上げた神道は勢力を失墜した。現在日本のキリスト教信者は約三十万に過ぎないが、この少数の信者が將來数百万の人々に影響を與え日本は結局キリスト教國家となならう

と謂つている。

又、終戰後最初の新教宗教視察團の一行に加わつて來朝したリチヤード・ベーカー氏は滞日数ケ月の調査資料を取りまとめて『太陽は曇れり』と題する一書を刊行したが、その結論として『日本の教会は殉教を敢てしなかつた』と述べ、併し彼等が國家の政策に逆わなかつたならば恐らく日本の教会は滅亡してしまつたであろうとも言つている。

ベ氏の観察によれば日本の合同教会即ち日本基督教團は『長年月の間に自然に発酵して來たものであると共に「軍家が造つたもの」である。同教團は一九四〇年の宗教團体法によつて強制されたもの』であるが、今後眞の自発的合同の実を上げるように努めるべき機会は少くない、との観測を下している。

**再一致への実験室―日本**　クリスチヤン・センチユリー誌主筆ポール・ハツチンソン氏は廿一年末欧州からの帰途日本に立寄り、その日本教界印象記を廿二年一月八日号同誌に載せたが、同氏はこの印象記の中で、日本基督教團に関し、ミツシヨンの活動に関し、更に日本におけるキリスト教の位置について次の如く述べている。

國民のキリスト教に対する態度＝指導民族としての誇りを打ち砕かれた日本國民は、苦悩のうちにも、新しく彼らに力と感化を與えんとするものに手を伸ばしている。彼らが最も力強く求めんとしているところのものは、彼らの征服者の力の拠り所であると彼等が信じている〝價値〟であり、その一つはキリスト教である、と彼らは考えている。その結果として、キリスト教の傳道にはかつて見ざる門戸が開かれているのである。危険はむしろ、彼らが國家主義の堕落した姿を示さんがためにクリスチヤンになつたり、彼らの國を征服者の足場に供せようとして久リスチヤンになる事にある。

日本基督教團の現狀と將來＝戰時中政府の圧力によつてカトリック教会以外の教会は一つの日本基督教團に統合された……然し今日政府の圧力は取り去られたが、多数の教派は元の教派に帰ることを希望していない。彼らは不與識な無理の手が彼らを一つの教團に結合したことを確信し、その確信の故に飽くまで合同教会に留まらうとしている。……この間に処してアメリカとカナダにおける主なる十三の教派は、日本における彼らの事業を再組織してこの合同教会と協同し、これを支援しようと決議したのである。

日本基督教團こそは教会の世界再一致への実験体である。これこそ東洋の年若き教会の多くが切く祈り求め來つたデストである。印度、中國及び日本の教会の指導者の心に往來するものは合同教会への希望である。欧米においては合同への超え難き障閉となつているオーダーの價値や單一の告白形式等の如きは彼らにとつて意義が少い。日本基督教團は進展している。西洋の諸教会の直面している一致教会のテストとしてミツシヨンはこの日本の合同教会と協同すべきである。彼ら（宣教師）はその教派的差異を捨て、日本基督教團と共に合同の働らきに進むべきではあるまいか。

日本におけるキリスト教の將來＝今日の日本の全般的情勢は余りにも混とんとしていてその前途を予測することは困難である。しかし一つのことだけは断言し得る。それは來るべき五年乃至十年の間に日本のキリスト教が宗教界に重要な地歩を占めるであろうということである。若し合同教会と宣教師の協同計画がうまく進展して行くならばキリスト教日本―キリスト教的規範と價値とによつて強く影響される國という意味において！の実現は間近に迫つている。そしてその実現の暁には東亞全体に強い影響を及ぼすであろう。

# 基督教各派の現況

## 日本基督教團

日本基督教團は昭和十六年十一月、宗教團体法による認可を得、わが國唯一のプロテスタント教團として発足した。明治以來日本に傳道されたプロテスタント系の凡ゆる教会―聖公会、救世軍をも含めて―の合同により成つた教團は、それ以前多年にわたる合同問題に対する関心を実現にまで促進した動機には時代の圧力が大きな作用を成していることは否めない。当時教團を構成する教派として文部当局に屈出でたものによれば、三十二教派、之に後、聖公会の一部、活水傳道隊その他が参盟し、実に世界に類例のない新教の大合同を実現したのである。

### 大合同が実現するまで

日本基督教團の成立の前に教派と教派を結ぶ機関としては日本基督教連盟が存在した。これは各教派の連絡協同機関としての組織体で内外に対する折衝機関でもあつた。しかし各個教会に対しては何等の連関を持たぬものであつた。それに比して日本基督教團は各教派が凡てを挙げて身ぐるみ教團内に没入し同じ信條、同じ教憲規則、同じ方針、同じ行政の下に進まうという世界にも類例を見ない画期的なものであつた。この教会合同の機は古くは新島襄、植村正久氏等の時代に発酵されたが成らず、長く中絶していたが再び基督教連盟時代から探り上げられ毎年審議の目標となつていた。昭和十五年（一九四〇年）は我國紀元二千六百年に相当し、国を挙げての祝典に湧き立つていたが、一方國際状勢は緊迫し、基督教に対しては圧迫が強化され始めていた。同年八月には、日本救世軍が英國との関係の故で嫌疑をうけ検挙取調べをうけるなどの事も起り教会自体自己防衛の要に迫られた。自然教界内にも合同促進の氣運が動き、外部からも政府への力が加つて來た。時の連盟会長阿部義宗氏の肝入りで八月に各派代表者が第一回の会合を催して懇談協議し、これに端緒を発して合同運動は急速に進展するに至つた。

こゝにこの事と一見別個のように思われるが言きもらす事の出來ぬ一事がある。昭和十六年六月、我教界から六名（七名であつたが多田素氏は出発直前死亡）の平和使節を派遣したことである。一行は阿部義宗、賀川豊彦、小崎道雄、松山常次郎、河井道子、アキスリング氏等であつた。平和使節一行は米國各地の集会において日本の立場を説明、和平工作に勝して帰朝したが戰争に突進しつつある態勢を如何ともすることは出來なかつた。しかし終戰後逸早く慰問と視察のため來朝したビショップ・ペーカー、ホールトン、バンカーク、シエファーの四氏の米國教会代表の一行は実に戰前我教界よりの平和使節に対する答礼使を兼ねたものでもあつた。同代表團の日本視察の結果は聖書讃美歌の寄贈、教会堂復興支援、及び國際基督教大学設設の挙となつて現れるに至つたことを記憶せねばならぬ。

さて、教派合同の機運はいよいよ熟し昭和十五年十月十七日、青山学院原頭において行われた紀元二千六百年奉祝を含めた全國基督教信徒大会に於て教会合同の決議がなされた。同じ月の十九日、各派から代表者が参與、教会合同委員会が調成された。初めは賛否両論が対立したが、多年の理想を実現する好機として賛成が圧倒的になり、ここに日本基督教各派卅四教派が打つて一丸となる態勢を整えた。（写真は紀元二六〇〇年記念大会の盛況）

### 合同教團・部制で発足

合同準備委員会では昭和十五年十月から翌十六年五月まで廿数回大小の委員会を重ね懇談討議を行つた。その結果合同教團は参加教派を十一のグループにまとめ、いわゆる部制を以て発足する事に決定を見た。同年六月廿四、廿五両日東都富士見町教会において創立総会を開催することとなつた。創立総会の結果、最初の総理者には富田満氏が当選した。宗教團体法案に準拠して日本基督教團規則を整備、文部省に提出、同十一月廿四日認可、ここに日本基督教團は成立した。時に所属信徒十六万余、教師二千余人、同年十一月二十四日第一回総会を開く。二週間後太平洋戰争に突入、直ちに戰時体制下に置かれた。故に教團としては正常の活動を阻まれ、無極的に打つて出ることを不可能にされた。第二回総会は昭和十七年十一月富士見町教会にて、第三回総会は同十八年十一月同上にて開催、昭和十九、廿年は戰時中の盛開かなかつた。戰時中教團の努力したことは九教区（現在は十八教区）の整備連絡にあつた。九教区とは北海道、東北、東京、東海、中部、近畿、中國、四國、九州、その他に朝鮮台湾、満州、華北、華中の五布教区があつた。更に教團存立の基礎たる教團の信條制定にも苦心した。早急に決定することは至難であつたのでまず信條委員の手で『信仰問答』をつくり発表した。教團の信仰聖書たる基督教の純粋信仰維持のため教学部を設け信仰告白の制定へ歩を進めた。

昭和十八年には第二部（日本聖教会）第九部（きよめ教会、日本自由基督教会）が治安維持法に触れた嫌疑で制圧を蒙り、教職者、信徒は検挙され、教職者で入獄したものの中教名は殉教するに至つた。

当時の教勢（昭和十八年三月）は教会教千六百十一（内、内地千四百六十